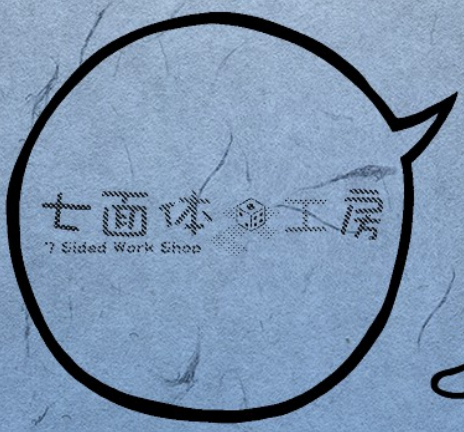
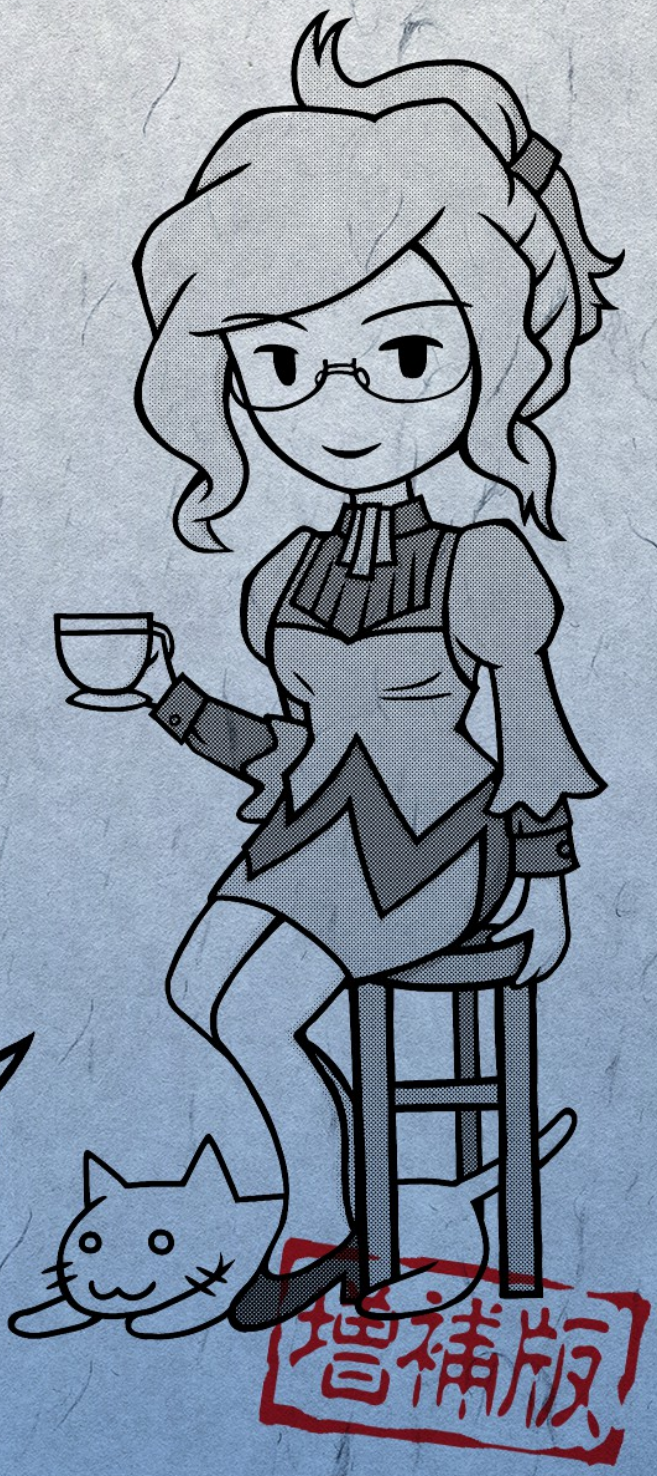
まかないごにんまえ

《七面体工房ログ・ホライズン短編集②》





まかないごにんまえ

七面体工房ログ・ホライズン二次創作短編集２

もくじ

序 …… ２

ログホラ・サファギン物語（大きな愚） …… ４

〈花の都〉の相談員（コンシーリス）（さわめ）……１４

レプリカ・ヒーロー（津軽あまに） ……２４

Ｄｅａｒ　ｍｙ――（橙乃ままれ） ……４４

立秋のとある居酒屋にて（山本ヤマネ） ……５２

あとがき ……６４

序

あら、いらっしゃい。
ようこそ、〈古書店ひよこ堂〉へ。初めてのお客さんね？
御用は製本？　それともお買い上げですか？
あら、お買い上げと。珍しいわね。品揃えなら、〈第八〉さんや〈海洋〉さんのところのお店の方がいいと思うんですが。
え？　あまり外には出回っていない、珍しい話が読みたくて来た？　旅の〈年代記作家〉さんのご推薦？　あらあら。
まあ、そういうことならいい選択ですね。うちには少数製本の趣味みたいに作られた本がたくさんありますから。
大量印刷するような需要はないけど、どうしても本の形にしたいっていう熱のこもったお話たち。そういうものの品揃えなら、うちはどこにも引けをとりませんとも！
創作の情熱の卵をぴよっと殻から引っ張り出してあげるのが、この〈古書店ひよこ堂〉の存在意義みたいなもんなのですから。
完全創作ドキュメンタリー、料理のレシピに夢小説、むふふで厚い薄い本に、研究論文、なんでもござれ。どこかロケットで突き抜けちゃって、通常流通に乗せられなかったアレ気な本だって、ここには満載取り扱っておりますとも！
さあさあ、みなさんはどんなお話をご所望ですか？
ぴったりなのをすぐに本棚から引っ張り出してきますよ？

ふむふむ、この世界のエネミーの生態に興味がある？
それならこちらがぴったりです！
「ログホラ・サファギン物語」。
ウェストランデへ向かう博学な方たちの船旅のお話。
白の魚人……もとい〈貴族〉と、彼に同行する〈冒険者〉たちが、海に住まう亜人たちについて語りつつ大立ち回り。読み終えたら、あなたもサファギン博士間違いなし！

ヤマトの外の世界の様子や文化を知りたい？
であれば、こちらはどうでしょう。
「〈花の都〉の相談役（コンシーリス）」
舞台は欧州サーバー〈花の都〉。〈学園〉勤めの〈エルダーメイド〉は悩める少年の味方です。趣味と実益を兼ねた残念才女相談役の明日はどっちだ！　今うちに入荷しているのは第一章だけですが、近々続刊予定とのこと、注目です！

ほう、バトルものがお好みですか。
でしたら、この「レプリカ・ヒーロー」はいかがですか？
ススキノの街で〈シルバーソード〉の下、更生しつつあった〈ブリガンティア〉の〈贋作師〉。その前に現れたのは、かつての相棒、詐欺仲間。ちっぽけなプライドを賭けて、元小悪党が頭をひねって奮闘します。

そちらの方はささやかな恋愛ものをご所望と。
でしたら、この「Ｄｅａｒ　ｍｙ――」がおすすめです。
アキバに暮らす月見草の、小さな揺れる想い。
これには野暮は言いっこなし。まずはともあれご一読を。
実話？　創作？　真相はただ、梟の鳴く朝靄の中に……。

むむ、元の世界のことを描いた話はないか、ですか？
「立秋のとある居酒屋にて」がぴったりかと。
わたしたちの故郷、地球の日本におけるとある酒場の日常。
こっちにきて私たちもずいぶんたちますが、あの頃を思い出すと、この世界の英雄女傑も、元の世界ではなんてことのない物事で一喜一憂する普通の人だったんだよなあ、と懐かしくなりますよね。

……これらは全部、元の世界では同人誌と呼ばれていたもの。自分が読みたい話を書いて、少し多く作った分をおすそ分けする、いわばまかない料理のようなものです。
言うなれば、メガ盛りまかないごにんまえ。世間様とかさておいて、より自分が好きなものを目いっぱいつめこんだ、おかわり上等シェフの気まぐれスペシャルってやつですね！
まあ、色々言っちゃいましたが、まずは気楽に楽しく読んでもらえたら、この本の作者さんたちもきっと大喜びですよ！

〈エルダー・テイル〉流に言うならば、「開かれた白いページのようなこの世界に刻まれた五つの物語」。どうか、お気軽にご賞味くださいね。

◆

……ああ、そうそう。
この五作の「まかない」を読み終えたあなたが、六つ目の「まかない」の物語を思いついて、創作したいっていう気持ちの卵が温まってきたりしたら。いつでも私、比翼子に相談してくださいね！
そのための資料なら風土記でも百科事典でもいっぱい貸し出す用意がありますし、〈古書店ひよこ堂〉がぴよっと、そのお話、形にする手助けをいたしますので！
この書棚がたくさんのおいしい「まかない」でいっぱいになることが、私の幸せですからね！

ログホラ・サファギン物語

大きな愚

飛行機雲が青空を切り分けるかのように、一艘の船が白い波の軌跡を描きながら大海原を切り裂いてゆく。

〈新型精霊船エーギル〉。

北欧神話に登場する巨人の名を冠されたこの船は、その名に反して「白鳥のような」と称される優美な外見を誇っている。

日本人の多くが「白鳥」という言葉から想像するのは湖にゆったりと浮かぶ水鳥の姿ではないかと思うが、この船の場合はいささか趣が異なる。

この船が模しているのは、空を飛ぶ白鳥の姿だからだ。

中央の主船体と左右の副船体をデッキで繋いだ三胴船（トリマラン）という形態は安定性と積載量に秀でており、前後に引き伸ばされた細長い船体の形状にも関わらず五〇〇トンもの貨物を運ぶことが可能。

また、高速航行にも適しているとされ、鋭いナイフのような細い船腹が描く軌跡は〈武闘家〉の振るう猫の爪（カッツバルゲル）を彷彿とさせるものだ。

召喚された〈風乙女（シルフ）〉の魔力風を直接照射される帆は、船体を覆うように広げた翼のよう。それを支えるメインマストもまた白い尖塔の如き繊細さを備えている。

「サファギンが出たぞー！」

そのメインマストの上層に設けられた見張り台から聞こえる声に、思索に耽っている間にやや伏せていた顔を上げる。途端、遮るものの少ない天球から降り注ぐ日差しに、元から糸のようと言われる目を更に細め、問題視されるものを求めて視線を巡らせる。

その目が甲板の一点に釘付けになった。

薄い唇に紅を差し、頬骨の浮き上がった顔に白粉を塗り、二角帽（バイコーン）を頭に載せた、商人貴族。ギョロリと真円を描く大きな目が特徴的だ。

その男、〈神聖皇国ウェストランデ〉の商人貴族、ウモト＝アルテ＝マルヴェス子爵と目線が合ってしまった。

「何故そこで私を見るのかねっ!?」

苛立たしそうな声にふと気づけば、甲板にいた〈冒険者〉全員がマルヴェスを注視していた。

◆

しかし、そこからの展開は早かった。

エーギルに乗船している〈冒険者〉は大きく二種類に別れる。

一つは、マルヴェスが往路の護衛として〈ミナミ〉から連れてきた〈Ｐｌａｎｔｈｗｙａｄｅｎ〉の〈冒険者〉。

もう一つは、〈ヨコハマ〉で乗り込んだ〈ホネスティ〉の

〈冒険者〉で、元からの護衛と合わせれば、大規模戦闘（フルレイド）を戦える程度の人数になる。
かれらは迅速にパーティを編成すると、波に揺れる船上を〈冒険者〉の身体能力に任せて突っ切り、四方に散って防衛戦を繰り広げる。

主船体の船首甲板に到達した頃には既に見知った顔が〈水棲緑鬼（サファギン）〉を迎え撃っていた。
「フッ、この面子が揃うのも随分と久し振りな気がするな」
身体のラインを浮き上がらせるライダースーツを身に着けた赤毛の少女が両手の鉄鞭を振るうと、彼女に付き従っていたドレス姿の幼い〈夜叉姫（ヤカー・プリンセス）〉が氷の吐息を吹き、船に追いつこうと加速していた〈水棲緑鬼〉を海面ごと氷漬けにする。
「フン。仕方がないさ。此処の所、色々とあったからな」
苛立たしげに眼鏡の位置を直しながら従妹の言葉に答えた黒髪の青年も、相対するように右手の銭剣を一振り。控えていた半透明の〈幻霊の執事（ファントム・バトラー）〉が宙を駆け、弾丸のように飛び出してきた〈水棲緑鬼〉が空中にいる間に叩き落とす。
「だったらさ。丁度いーから活動再開と行こーぜ！」
後方に流れていく氷塊と波紋から視線を外し前方に目をやれば、赤い毛皮に虎縞模様の獅子が咆哮している。猫人族の少年はその筋肉質な長身を、既に甲板に上がってきていた〈水棲緑鬼〉の群れに飛び込ませ、大立ち回りを演じている。
「いい考えね。私もそれに賛成よ」
その背中を守るように身を寄せるのは、白磁色の甲冑に波打つ金髪が映える美女。少年の死角を狙う〈水棲緑鬼〉の槍を盾で防ぎ、剣で叩き落とす。聖句を唱えて傷を癒やす姿は、まるで弟を気遣う姉のような神聖さに満ちている。
「なら決まりじゃのう。〈部長〉、仕切りは任せたぞい」
髭モジャの顔を更に多機能ゴーグルで覆った怪異な面相のドワーフは、満身創痍となりながらも後衛を狙って擦り抜けてきた〈水棲緑鬼〉を両手斧でどついてトドメを刺した後、こちらを振り向いてニヤリと笑みを浮かべる。
左右を見れば、〈召喚術師（サモナー）〉の二人も（そして従者も一緒に）頷いている。
どうやらこれは決定事項のようだと腹を決めた〈部長〉は、矢を番え、弓を引き絞ると、〈ホネスティ〉の名物チーム活動再開の狼煙を上げるのだった。
「では、これより〈モンスター生態研究部〉の活動を再開します！」

◆

アキバ総選挙において腹ぐろ眼鏡の策に敗れた斎宮トウリとその派閥であるマルヴェス子爵、アキバ公爵アインスを始めとした〈ホネスティ〉の残党は、〈アキバの街〉を逃げ出すことになった。

彼らはマルヴェス子爵の拠点である〈ニオの水海〉で再起を図るため、〈ヨコハマ〉に停泊していた彼の商船、〈新型精霊船エーギル〉で一路〈ミナミの街〉を目指しているのだ。

普段のマルヴェスであれば、この辺りの海を縄張りにする海賊団に小銭を渡し、あらかじめ航路の安全を確保しているところだが、如何せん今回は急な出港となったため、乗船する〈冒険者〉の戦力に任せた強引な航海となっている。

万が一にも斎宮トウリやマルヴェス子爵、〈精霊船エーギル〉と〈ヨコハマ〉で仕入れた商材を失えば彼らに再起の道はない。

まさに、弱り目に祟り目、泣きっ面に蜂、といったところである。

とはいえ、防衛に当たる〈ホネスティ〉の〈冒険者〉たちには其処までの悲壮感はない。ここまで着いてきた彼らはかつての〈ホネスティ〉で大規模戦闘（レイド）を経験している古株ばかりだし、襲いかかる〈水棲緑鬼〉たちのレベルは高くない。

〈教授〉シゲルなど「この程度の数、〈チョウシ防衛戦〉に比べればどうって事ねぇよ」と嘯いていたくらいだ。

◆

「さて、敵を知り己を知れば百戦危うからずと言いますし、まずはおさらいからしてみましょう。〈水棲緑鬼〉とはどんなモンスターでしたか」

射撃の合間に、矢筒から取り出した矢を教鞭代わりに設問をしてみると、打てば響くように左右から応えが返る。現役高校生でもある〈召喚術師（サモナー）〉のコンビ、究理（きゅうり）と那須（なす）だ。

「フッ。〈水棲緑鬼〉は亜人種族の中でも特に水中生活に秀でたモンスターだ。食性は魚が中心で、水中でも陸上でも呼吸が可能。ただし、長期間の陸上活動はできないため水辺のない内陸ではあまり見られないな」

「フン。外見は直立した魚のような姿で、尻尾は無い。体格は１２０から2メートル超、体重は平均して１００ｋｇ前後。色は淡灰色から濃紺色まで様々、茶色系統の斑模様があり腹だけが生白い、と言う所だ」

息の合った返答だが、それに気づいて顔を見合わせた二人はそっぽを向くようにそれぞれの持ち場に視線を戻す。素直になれない二人をフォローするように年長の二人が補足を入れる。

「鰭と言うべきか腕というべきか、太い前肢は器用で力が強いのう。おっとっと、儂らにとっての驚異は大きな水かきのある後肢で、航行する帆船に泳いで追いついたり、水面からジャン

プ一発で甲板まで跳んでくるのが困りもんじゃ」
「知能は〈緑小鬼（ゴブリン）〉と同程度という話ね。ただ、水の中で暮らす関係上、あんまり創造性は高くないみたい。武器の好みはっ！　槍や短剣といった水中での取り回しが楽なもの。鎧は一部の上位個体のみ革鎧や鱗片鎧を着けることがあるくらいよ」
〈吟遊詩人（バード）〉のシモンと〈施療神官（クレリック）〉のセシーリアがそれぞれ目の前の敵を（字義通り）捌きながらの補足。やはり実物を前にすると調査内容を思い出しやすいのだろうか。〈武闘家（モンク）〉の少年レッドバトラーは考えがまとまらなかったようだが、襲いかかろうとした一体に矢を射ち込んで軽く麻痺させると余裕ができたのだろう。
「サンキュー部長！　でも、こいつら何考えてんのかどーにもわかんねーんだよな。言葉も『ギョギョギョー』って感じで翻訳もされねーし。こいつら同士では通じてるみたいだけど、これなら白塗り貴族の方がまだ話できるぜっ！」
明るい声で言い放ち、そのまま蹴りを放つ。流石にモンスターと比べてやるのは気の毒に思ったが、その全員がつい先刻間違えたばかりということを思い出したため、場に沈黙が降りる。

◆

そのまま暫くは黙々と掃討に当たっていたのだが、〈夜叉姫〉の〈氷の矢（エレメンタルボルト）〉と〈氷の吐息（エレメンタルブラスト）〉に任せていた究理が、レッドバトラーの周囲に群がっていた〈水棲緑鬼〉に〈鞭の女王様（ウィップクイーン）〉を差し向けた事で一段落がついた。
「さて、次は生活形態について述べてみましょうか。とはいえ、水中生活するモンスターですから、わかっていることは多くないでしょうが……」
〈紅のヒトカタ〉を鏃に付けた矢でレッドバトラーに張った障壁を補修しながら話を進めてみたのだが、振り返った皆の表情は自信に満ちた笑みだった。
「〈水棲緑鬼〉の生息域はこの〈アザースの大洋〉みたいに暖かい遠浅の海底ね。自然の浸食洞窟や沈没船、沈んだ古アルヴの廃墟などに血族の個体が集まって、数百体で部族を構成するわ。コイツらが船を襲うのは、積荷だけじゃなくて、沈んだ船そのものが有用だからなのよ」
「えーっと。たしか、社会構成は王（キング）を中心にした階級社会。大多数の個体は生産者であると同時に戦闘要員で、普段は部族の食料――まぁ、海藻や生魚、貝類だな――を獲ってくる役割。そいつらを専業の戦士や魔術師といった上位種が支配する形なんだぜ」
戦闘に余裕ができたのもあるのだろう。広範囲魔法攻撃で傷を追った敵を薙ぎ払いながら前線の二人が応じる。そこに続く

のは鼻で笑う声。
「フフン。〈水棲緑鬼〉の中にも専業の魔術師や、魔術に適性のある個体が生まれることがあり、独自に伝承する水や冷気の魔法を扱う。他の属性を扱うのが苦手という訳ではないのだが、水中では炎や毒、電撃の魔術が扱いづらい、ということのようだな」
　なるほど、確かに海中で火を使っても維持するのは困難だし、毒は拡散、電撃は放散して無作為に周囲への被害を広げるから扱いづらいというのは納得の行く話。特に電撃は大半の魚系モンスターがそうであるのと同じように〈水棲緑鬼〉にとっての弱点だから、迂闊に使うと被害甚大となる。
「アイツらは卵生でな。孵化した幼生には後肢が無く、立派な鰭の付いた尾で水中を自在に動き回る。幼生は部族全体の子として育てられ、後肢が生える頃には職能の特徴が現れる。尻尾が完全に消えると成体として看做されるようじゃのう。大勢で集まって集団産卵するみたいじゃぞ」
　雌については追加調査が必要じゃけどな。と呵々大笑したシモンは、セシーリアと窮理の冷たい視線もどこ吹く風のようだ。〈蛇女（ラミア）〉に魅了されて隷属するという話も聞くし、やはり大多数は雄なのだろう。報告の最後は究理が締めた。
「奴らの縄張りは、複数の部族による合議によって決まる。大抵の場合、もっとも軍事力の強い部族が海岸に近い縄張りを得る。海岸近くは自然洞窟が多いため、より多くの兵を住まわせることができ、また人間種族と戦う際の防波堤としても期待される。一方で、王を失ったり、兵数を多く減らした部族は沖合に退避して戦力の回復に務めるんだ」
　聞く所によると、彼らは〈チョウシ防衛戦〉の後で〈水棲鬼〉の生態調査クエストを受けていたらしい。原因が〈緑小鬼王の戴冠〉だと判明した〈緑小鬼〉と違って〈水棲緑鬼〉がチョウシを襲った理由は依然として不明のままだったため、〈円卓会議〉からの調査依頼と言うかたちでクエストが発布されていたのだ。

◆

「では、〈水棲緑鬼〉の生息地域についてですが……」
「そんなもの、〈アザースの大洋〉沿岸地域に決まっておろうが！」
　話を続けようとしたら、思わぬ所から答えが返ってきた。
　ツカツカと大股に歩いてくるのは、マルヴェス子爵。肩幅が広く骨ばった体格のため、ただ歩いているだけだというのに肩を怒らせているようにみえる。
「彼奴らはザンドリーフからイセにかけてのヤマト本島南岸に多く棲息しておる。フォーランド島の南岸にもいるにはいるが〈クレイサップ湾〉には〈魔竜鯨（ケートー）〉や〈首長竜（プレシオサウルス）〉といった大型の海魔が幅を利かせてい

るから〈海竜（シードラゴン）〉に庇護されて細々と暮らしておるのだ」
「んげ、マルヴェス……」「流石、同族には詳しいわね」
「フッ、魚顔は伊達ではないな」「フン、インスマ村に帰れ」
「むしろデスノ」「それ以上はヤヴァいじゃろうが」
　現れるなり正解を横取りしたマルヴェス子爵に心無い野次が飛ぶ。
「えぇと、マルヴェス卿。どうして此処に？」
　セシーリアの疑問は当然だった。
　〈大地人〉の乗員には船室へ避難してもらっていた筈なのだ。実際、彼の来た方を見ると、主を置いて船室に逃げるに逃げられずにいる船員たちの姿が見える。
「その方らがちんたら戦（や）っているからであろうが」
　どうやら、こちらの戦いぶりにダメ出しをするために来たらしい。
「よいか、その方ら。恐れ多くもこの船には斎宮どのが乗船されて居られるのだぞ。万が一の時にはこの身を最後の壁にするべく様子を伺っておれば……」
「それは確かに、見上げた忠誠心だと思うが……」
　マルヴェスの言い分に言葉を詰まらせる那須。舌鋒鋭く究理が言葉の後半を奪う。
「それは、わたしたちの腕が信用に足らないと言いたいのか！」
「判っていないな。わたしが雇った護衛と違い、その方らは斎宮どのの幕下に入ったばかりで然程親しくもない。そんなものに主上の安全を預けるなど、馬鹿げた話だ」
「なっ!?」
　返す言葉に感情を昂ぶらせる究理だが、それを押し留めるようにシモンが口を挟む。
「まぁ、当然じゃろうな。それに、信頼や信用なんてものは、これから付き合っていく中で築いて行けば良いのじゃよ」
「そういう事なら話は早いなっ！」
　言葉と共に飛び上がったレッドバトラーが怪鳥（けちょう）のような蹴りを放ちながらマルヴェスの前に降り立つ。
　その蹴りでマルヴェスを狙って〈水棲緑鬼〉が投擲した銛を弾き飛ばし、獅子の顔でニヤリと嗤い一吼え。
「だったら存分に見て貰えば良いさ。一匹たりとも通しゃしねーから」
　〈水棲緑鬼〉の第二波が押し寄せようとしていた。

◆

「陣形を変えます！」
　足の遅いシモンを〈方違え〉で援護しながら、迅速に配置を変更する。
　〈水棲緑鬼の鮫騎士（シャークライダー）〉や〈水棲緑鬼の

泡術師（バブルマン）〉といった亜種や上位種が多く混じり始めている。
「なぁ、オッサン」
「誰がオッサンか！　〈冒険者〉ときたら本当に礼儀を知らぬものばかりで」
　後退してマルヴェスの直衛に当たるレッドバトラーが話しかけていた。傍から見ると喧嘩を売っているようにも見えるが、彼に他意はない。
「オッサン、意外と物知りなんだな」
「当たり前である。このマルヴェス、〈ニオの水海〉が故郷にして拠点ではあるが、そもそもは旅の商人でな。このヤマトで行ったことのない国はないくらいだ」
　それは、魔物の脅威が実在するこのセルデシアにおいては驚異的な胆力と言えるだろう。
　とは言え、彼の出身を考えれば納得もできる話である。
　〈ニオの水海〉は旧世界の日本においては琵琶湖に当てはまる。つまり、彼は我々の感覚で言えば「近江商人」と言えるのだろう。
　鎌倉から江戸にかけて、日本全土が戦乱に明け暮れていた時代に近江国のみならず日本全国津々浦々を旅して廻り、日本三大商人と言われた近江商人に照らし合わせれば、あり得ないと言い切れる話ではないのだ。
「じゃあさ、北側の方の海とか淡水にはいないのかな、こいつら？」
　こいつら、と言いながら前衛を擦り抜けてきた〈水棲緑鬼〉の大跳躍を〈シャドウレスキック〉で撃ち落とす。
「ふむ、そうですな。彼奴らにとって北の〈ヤマト海〉では寒すぎて暮らしづらい。あの近海は〈魚竜人（イクチオス）〉の支配領域だし、ノトの沖では〈深き海の太母（エキドナ）〉が魔獣を生み出し続けている。淡水にも居ないではないが、やはり〈蛇女〉や〈蜥蜴人（リザードマン）〉の勢力に押されてますな。沼地に適応した亜種が少々居るくらいか」
「フッ、だったらもっと暖かい南洋にでも棲んでいれば良いものを」
　先刻の苛立ちがまだ収まらないのか究理が毒づく。もっとも、その矛先を向ける相手は〈水棲緑鬼〉たちだ。戦場での戦いに切り替えたため〈夜叉姫〉と交代で電撃を操る〈風乙女〉を従えた彼女は、的確に敵の弱点を貫いていく。
「残念ながら、そういう訳にはいかんのだ。沖には〈海巨人（シージャイアント）〉の海底王国があるからな。海の亜人どもにも厳しい縄張り争いがあるのだよ」
　ちなみに、内海である〈セトの海〉は夜になるとアンデッドが徘徊する魔海と化す上に〈人魚（マーメイド）〉を支配する〈牛頭大鬼（ミノタウロス）〉や、孤島に住む〈羅刹（ネイリティ）〉の部族もいて一筋縄ではいかない。やはり〈水棲緑鬼〉には住みにくいようだ。

◆

「こうして聞いてみると水棲の亜人種族も結構多いのね」
シモンと入れ替わって下がってきたセシーリアが感嘆の声を上げる。〈ヒーリングフォージ〉を使い、戦技召喚を連発した召喚術師に向かっていた〈水棲緑鬼の鮫騎士〉に剣を叩きつけ、同時に狙われた究理の傷を癒やす。
「〈水棲緑鬼〉に〈魚竜人〉、〈海巨人〉に〈人魚〉、淡水だと〈蜥蜴人〉に〈蛇女〉ですか、確かに多いですね」
「いや、正確に言えば〈人魚〉は精霊だな」
「そうじゃの。〈人魚〉や〈羅刹〉の他に、〈夜叉（ヤカー）〉〈樹人（エント）〉〈夢魔（インプ）〉〈猫妖精（ケットシー）〉〈鳥乙女（カラヴィンカ）〉なんかは生身の身体があって亜人みたいに社会を作っておるが、特攻属性なんかを調べてみると精霊に属するみたいなんじゃ」
指折り数える部長に対して、即座に反駁したのは前線で銭剣を構える那須だ。甲板に落ちた彼の影より次から次へと湧き出る〈動く骸骨（スケルトン）〉と肩を並べて斧を振るうシモンがそれに補足を入れ、攻撃も考察も見事な〈デュエット〉を決める。
「なんでサファギンだけ〈水棲緑鬼〉で鬼なんだろうな？」
「そう言えばそうね。字面から見ると〈緑小鬼〉の亜種みたいに見えるわ」
敵の攻勢が落ち着いた隙に自己回復を行うレッドバトラーと、支援（バフ）魔法をかけ直すセシーリアがその話題を拾って展開させる。
「フッ、亜人種族で名前に鬼がつくのは〈水棲緑鬼〉〈緑小鬼〉〈醜豚鬼（オーク）〉〈子牙竜鬼（コボルド）〉〈灰斑犬鬼（ノール）〉に〈爪熊鬼（バグベア）〉。あとは〈人食い鬼（オーガ）〉と〈灰色大鬼（トロウル）〉に〈牛頭大鬼〉という辺りか」
「〈悪鬼（オニ）〉もですな」
記憶を掘り起こす究理に入るマルヴェスのツッコミ。この二人、よくよく相性が悪いようだ。
「彼奴らは忌々しいアルヴの呪いによって生まれた人類の敵ですからな。それ以前から蝦夷地で争っていた巨人族や、わざわざ縄張りから出てこない獣人どもと比べると、危険の度合いが桁違いだったのだよ」
人里近くに住み悪戯を好む〈黒狸族（ブラッククラクーン）〉は兎も角として、冥く湿った洞窟を好む〈鼠人間（ラットマン）〉や地下に迷宮を築く〈蜘蛛人（アラクニアン）〉、深山幽谷で孤高を気取る〈天狗（テング）〉。河川や浅瀬に潜む〈蜥蜴人〉と〈蛇女〉に海を住処とする〈魚竜人〉。彼らは元々、人が踏み込まない土地の住人であり、互いに避けあって暮らしていたのだ。
巨人族は、その巨体だけでも脅威だというのに、集団で連携

の取れた戦いを行う。だが、人類にとって幸いな事に、その出生率は低く、やはり種族ごとに生活できる環境が限られている。
「なるほど。そう考えると、鬼たちは人間の生活環境を奪って棲むことができ、簡単に数を増やすことができる。という訳ですか」
モンスターの縄張り争いでは押され気味に思える〈水棲緑鬼〉も、人間の船や漁村を襲うことが生活の中心となっているのだと考えれば、人間にとっては脅威でしかない。
何の恨みや憎しみがあるのかはわからないが、積極的に人間の領域にやってきては侵略行為を働く彼らを鬼と読んだ〈大地人〉たちの気持ちを想いながらも、部長は戦場に意識を集中する。
そこでは、本来はヨコハマの中規模戦闘（ハーフレイド）にしか現れないはずの〈水棲緑鬼の王（キングサファギン）〉がその巨体を甲板に持ち上げようとしていた。

◆

「正面〈水棲緑鬼の王〉一体、レベルは六〇。お供は左右副船体の護衛チームに流してしまってください」
〈方違え〉でマルヴェスを下がらせ、他パーティに取り巻きエネミーの排除を任せる算段を念話で付けた部長。弓を構えてレイドボスに正対する。

「さて皆さん、〈水棲緑鬼の王〉の特性を覚えていますか？」
〈水棲緑鬼の王〉が甲板に上がるまでの時間を利用して陣形を整え、障壁を張り巡らせながら問えば、そこは歴戦の部員たちだ。
「弱点は炎と雷。あと、猫人族がパーティにいると色々ボーナス入るよなっ！」
攻撃の狼煙と共に雄叫びを上げるのはレッドバトラー。鋭い〈ワイバーンキック〉が炸裂し、そのまま挑発と攻撃を繰り出して敵愾心を溜める。
「一定以上のダメージを与えると構えを変えて攻撃力が上がるんじゃ」
「その分、防御が薄くなるので其処を攻めるのがセオリーですね」
〈援護歌〉を〈虹のアラベスク〉に変えて全員の物理攻撃を電撃属性に変えながら前線を目指すシモンと、既に前線に到着して〈サンクチュアリ〉による支援構築を始めたセシーリア。
「フッ、主な攻撃手段は、長い尾による薙ぎ払いと水流のブレスだな」
「フン、低確率でだが、広範囲に麻痺を与える状態異常攻撃も行うぞ」
隣に立った究理が〈風乙女〉に命じて電の矢を撃たせながら答えれば、召喚し直した〈幻霊の執事〉を連れて隠密した那須がそれに補足を入れる。

そして、パーティチャットから聞こえるマルヴェスの声。
「猫人族の船員をパーティに招待しておいたぞ。言っておくが、戦闘に参加させるつもりは無いからな」
猫人族がパーティに居る事によるボーナスは、六人分になっていた。

◆

敵を知り、己を知らば、百戦危うからずや。
結局、部長の矢に影を射抜かれて足を止められた〈水棲緑鬼の王〉は、少々どころではない被害を与えながらも六人掛かりの総攻撃（フルボッコ）という憂き目に会い、退治された。
王を失った〈水棲緑鬼〉たちも三々五々と散り散りに撤退していった。彼らもまた人と出会わぬ深い海の底で長い時間を駆けて力をつけ、再び人の領域を目指すのだろうか。
ともあれ、あとには甲板に大量のドロップ品を積んだ〈新型精霊船エーギル〉と、勝利の喜びを分かち合う〈大地人〉と〈冒険者〉、それを取り巻く静けさを取り戻した海だけが残された。
「しかし、亜人種族の分類について、イコマやロマトリスの文献を調べればもっとわかるかもしれませんね。今後の課題としても面白そうです」
ふと、顔を上げた部長の目に移った魚影。
「いけません。まだ一匹残っています！」
足止めの魔力を乗せた部長の矢が、魚の顔を持つ亜人の影を射抜いた。
「だからっ！　何故ここで私を足止めするのかねっ!?」
魚人……もとい、〈水棲緑鬼〉と誤認されたのは、戦闘の結果を斎宮に報告しようと船室への扉に手をかけたマルヴェス。
憤慨するマルヴェスに、平謝りするしかない部長なのであった。

〈花の都〉の相談員（コンシーリス）

さわめ

コツ、コツコツコツ… 静謐に満たされた教室で、黒板にチョークで『何か』が書き記されていく音だけが静かに響く。

「ということで、第一帝政が崩壊した後あらたな政体が目まぐるしく入れ替わる時代がしばらく続くわけです。興味深い点としては王政、革命政府、帝政のサイクルが繰り返されることや、列強諸国が急激かつ反動的な革命の輸出を恐れてフランスが政体としてリベラルな側面をゆるやかに受け入れる――」

日差しを浴びると体が朝を認識して目が覚めるという実験的な事実があるというが、少なくとも午後一番の歴史の授業ではそれはウソなんだろう。少なくとも、ノエミという少女にとってはこのリセで行われている講義はすでに意味不明な呪文の連なりと区別がなくなり、意識はフワフワと現実と前日の夜にプレイしていたゲームの想像とが渾然としたなにかに揺蕩っていた。目の前で相方の《武闘家》が前線を構築し、《変異した鷲獅子》を相手に大立ち回りをくり広げている。その光景はもちろん白昼夢であって、ペンを落とすか、机に突っ伏すか、教師の目に止まって叱責されるか、いずれにせよ何かのきっかけがすぐに彼女を現実に引き戻すことになるはずだ。

そしてそれはほどなく現実となった。

◆

「ラシェルくん、わたしは講義を受けにくるものであれば《廃棄児》であろうと《冒険者》であろうと歓迎だがね、退屈だと思うならいつでもメイドの仕事に戻ってくれてかまわんのだが？」

滔々と、抑揚に欠けるテノールの声で行われる歴史の講義というのはどうしてこう眠くなるのだろうか。それはどうやら地球でも、このセルデシアという異世界でも変わらず、ただの人間の体でも《冒険者》の体でもさしたる違いは無いんだな、とラシェルと呼ばれた少女はぼんやり考えた。

周囲からは様々な感情の視線が集まっているのがわかる。好奇が7割で、残りは軽い侮蔑や恐れ、好意のようなものも交じってる気がする。それに確実に1人から呆れられているようだ。

講義室の大半を占める《大地人》の貴族からすれば《冒険者》であるということが既に珍しいことだろうし、一方でドワーフのメイドが貴族と同じ内容の教育を受けようというのは、彼らの常識からすると様々な反応があってもおかしくはない。呆れているのは講義を受けている同じ《冒険者》で妹分のユッタだろう。何にせよここはひとつフォローを入れて注意を反らし、かつ講義の流れを元に戻す必要があるだろうとラシェルは

判断する。
「リンケ教授、本来の職分を外れたところで醜態をお見せしてしまい申し訳ありませんでした。さし支えなければこのまま聴講させていただいても？」
ラシェルは、ゆっくりとかつ淀みなく、優美とすら言える所作で謝罪の意を示す。その動きには一切の無駄も無ければ揺らぎもない。誰が見ても完璧で、それ以上に強い言葉を投げかけることを許さない動作だ。
「そ、そうだな。きちんと反省しているようでもあるし、今回の講義はガリアンの地に住まうものであれば皆知っておくべき内容でもある。特別に聴講を許そう」
どうやらその言葉は実を結んだらしく、歴史学の講師であるところのリンケ氏の怒りを有耶無耶にすることに成功したようだった。
ラシェルはほっと胸をなでおろす。この講義に出席しているのは《大地人》貴族の子弟が《冒険者》について、そしてその他にも貴族として必要な様々な知識を学ぶ〈学園〉職員としての業務の一部であって、決して怠けているわけではないからだ。
そうは言っても、講義の退屈さは覆らないなあ――そんな思いが頭の中をふわふわと再び漂い始めた辺りで、自分にだけ聞こえる鈴の音が脳裏に響く。《冒険者》がフレンドリスト上の友人と直接言葉を交わすことなくコミュニケーションを取るための能力、というかもともとは個人間ボイスチャットだった《念話》だ。
『ラシェル先輩、さっき《エルダーメイド》のモーション使いましたね？』
さっそくユッタから完璧な偽装というか、自らに備わっている全自動社交辞令ともいうべきサブ職業の能力使用に対するツッコミを入れられた。どちらかというと大雑把で勢い任せのラシェルに比べると、この狼牙族の少女は細かいことに気付く目ざとい娘で、しかも空気を読むのも話術もラシェルよりずっと上手くやってのける。
『だって実際に退屈なんだもの、仕方ないでしょ。それにこういう時にスキルを使えば社交上の失敗をしないのが《エルダーメイド》の良い所なんだからそこは大目に見て欲しいところじゃない？』
イギリスの開発部門が異様な情熱に基づいて作り上げたというこの《エルダーメイド》は、メイドに求められる状況に合わせて礼を失しないための膨大な所作をモーションとして作り込まれているという元々は趣味色の強いサブ職業だった。エルダー・テイルが『現実』となった今では《大地人》のハイ・ソサエティに属する人びとと付き合う際に不作法を避けるために大変に役立つサブ職となってしまったのだが――。
『それはそうですけど、先輩さすがにさっきのはかなり目立ってましたよ？いくら講義そのものが先輩の本当のお仕事と関係ないにしても、出入り禁止になったらさすがに差し障ると思う

んですけど』
　愛らしくしかも要領の良い後輩は、追及も痛いところを的確に突いてくるようで、これにはラシェルも上手い逃げ口上が浮かばない。
『――これからはもうちょっと気を付けることにする。とりあえずお仕事の方も進めるから、そっちは生徒らしく講義受けてて』
『はーい。頑張ってくださいね。先輩』
　何とか念話を打ち切り、もう一つの『お仕事』にとりかかる。聴講に参加している生徒ひとりひとりの様子を注意深く観察していくのだ。講義への態度というよりは、もっと個々人の体調やメンタルの状態が表面化していないかといった点で目を配る。もちろん後ろから見るだけなのだから大したことがわかるわけではないのだが、ラシェルがこの学園で元々引き受けている役割にとって生徒たちの様子からトラブルの予兆を捉え、場合によっては早期の対処に繋げられる可能性のある情報収集はバカにしたものではない。
　そんなことを名目に、教室で熱心に講義に集中する生徒たち――主に少年が大半――に熱い視線を注ぐ。彼らの故郷であるガリアンの歴史ということでほとんどの生徒は真面目に講師の言葉に耳を傾け、黒板の記述を写し取っているようだ。
　ラシェルたち《冒険者》には書かれている文字はわからなくとも、書いてある内容を理解することはできる。今回の講義は、曰く「《第一の森羅変転》の混乱期とガリアンの武王について」。
　ガリアン武国、この国は現実世界においてほぼフランスの位置を占めている。いわゆる古代アルヴの文明の終焉、そして未だ謎に包まれた《第一の森羅変転》による動乱期を、常に『武王』と称される英雄的な人物を中心とした各地の伯たちの死力によって乗り切ったと伝承される地域だ。
　武王は血筋によってではなく、《剣の乙女》と呼ばれる女性が認め、武王の象徴たる剣を佩びることによってその地位を証立てる。また武王の剣はその担い手に、《冒険者》どころか《古来種》に匹敵する力を与えるものとされていた。
　生徒たちの様子を順々に確認しながら、ラシェルはゲーム時代の知識と講義で語られる内容を照らし合わせる。実際にエルダー・テイル稼働初期には武王の名を継ぐＮＰＣが存在していたが、幾つか前の拡張パックの大型イベントで戦場に斃れ、最新の拡張パック、そして《大災害》を経た現在に至るまで《剣の乙女》も武王も、その座は空白のまま――だったはずだ。
　少なくともラシェルの知りえる友人の伝手や噂でも、〈学園〉が築き上げている情報網とやらにも、ガリアン武国において新たな武王誕生の兆しは見つかっていない。それが誰かにとって幸運なのか、不運なのか、そういう難しい話は自分の手に余る。とりあえずは手の届く範囲で、この〈学園〉の生徒たちを守ることが自分で選んだ役割なのだ。得手不得手なんて人

それぞれだし――この広大な世界で自分一人が本物の英雄かなにかのように振舞うなんて想像もつかない。それよりも今なにより大事なのは講義に励む少年たちの姿を見守ることなのだ。世界の存亡よりも、少年を見守る方が大事なのである。

◆

「さて、今日の講義はここまで。次回までに、南方戦役におけるリヨン伯の功績について予習しておくように。」

ラシェルが入念に観察をしている間に、講義が終わりを迎える。

講義から解放された生徒たちはおもいおもいに集団を作り、それぞれに散っていく。〈学園〉の生徒に与えられている自由はかなり大きい。門限はあるにせよ街に出ることで《冒険者》の文化に触れることは難しくはないし、それぞれに望む講義にせよ訓練にせよ特に必修となっていない科目を選んで自らを研鑽することもできる。いずれにせよ、散り散りになった彼らを個別に監視するような必要は現時点ではない。生徒たちと同様に、ラシェルも講義室を離れ、自分の本来の職場へと戻ることにする。もちろんメイドたちの控え室――ではない。ラシェルは確かにサブ職業として《エルダーメイド》を取得しており、〈学園〉のメイドの中では名目上のトップとして扱われている。とはいっても現代人である彼女は本当にメイドとして働く能力が十分なわけでは無く、実務は雇っている《大地人》のメイドや他の人員に任せている。つまり、彼女がこの〈学園〉で担っている役割とは、《冒険者》であり、かつ《大地人》の貴族社会に対する窓口としても一定の信用を勝ち得る《エルダーメイド》であること双方を兼ね備えて初めて成立するもの――生徒たちの相談役なのだ。

現在、この〈学園〉が存在している〈花の都〉――すなわちパリ――は《冒険者》と《大地人》が混在し、表面的には平和裏に生活を送っている。しかし、それは単なる偶然と幸運によって転がり込んできたようなものだ。〈花の都〉の主要な施設は所有権が『武王』に設定されていたこと、欧州の《冒険者》の大半が冷静に、あるいは一種の諦観と共に現状を受け入れてしまったことが何と言っても大きかった。そして現実世界における《大崩落》を知る彼らは「《冒険者》の大規模な団結」という選択肢を早々に見捨て、より小さなグループにまとまった上でセルデシアの社会から離れて行くか、《大地人》、《冒険者》を問わず他者と関わることを最低限に抑えることによる消極的な共存へと舵を切ったのだ。良くも悪くも、西ヨーロッパの《冒険者》は集団としてセルデシア世界に対して大きな影響を振るうこと無く細分化し、互いに分断した状態で世界のうねりの一部となった。

〈学園〉はその潮流においてはかなりの異彩を放つ集団である。《大地人》と《冒険者》という異なる文化の接触における

摩擦を最小限に抑えるため、次世代を担う貴族の子弟を預かって《冒険者》の存在を含めた様々な知見を学ばせるための中立な教育機関。設立された経緯についてはラシェルも知らないが、膨大な折衝と交渉、予算や人材の確保が必要だったことは想像に難くない。一度も顔を見たことが無い学長など、一体どんな超人だったらこんなことを成し遂げてしまうのだろうかとラシェルは思うこともあるほどだ。

いずれにせよ、このバラバラに細分化した《冒険者》のコミュニティが寄り集まっている〈花の都〉では、命に係わることはほぼ無いとしても、大小のトラブルが予想外の形で降りかかってくる可能性は十分にある。まして学園の生徒は《冒険者》とは別世界の住人である貴族の子弟であり、何も起こらないと考える方が無理がある。そんな問題に巻き込まれた生徒に手を差し伸べ、問題に立ち向かい、解決する。それこそがこの学園におけるラシェルのほんとうのの任務なのだ。

◆

と、いうわけでラシェルは〈相談所〉（セントレ・ド・コンセイル）という看板のぶら下がった部屋でゆったりと読書に耽っていた。今日の一冊は最近個人で執筆行を始めたという《冒険者》が発行した恋愛本である。展開は少々性急に感じられなくもないが、ヒーロー役の少年はラシェルの好みの範囲で及第点などと評価を下したりもしている。つまり、時間を持て余していた。

彼女の任務は確かに重要だが、その頻度という点では彼女と〈学園〉が積極的に介入しなければならないような重大事というのはそうそう生じるものではない。また、貴族はその地位から安易に家の外に借りを作ったり弱みを見せないように教育されることが多い。ここに相談員であるラシェルが女性であるという所まで加味すると「本物の」案件が持ち込まれる可能性は限りなく低く、逆に持ち込まれる相談が本物である場合のひっ迫具合は相当なものということになる。

後輩であるユッタが遊びに来たり、数少ない女子生徒がやってくることはあるが、他愛もない世間話や本人としては真剣そのものな恋愛相談といった具合で、こちらも本来の事件とは程遠い。もちろん恋は一大事であるにせよだ。

そんな背景から、ラシェルの夕刻以降の生活は読書、茶会、コイバナ、雑談といったもので占められることになる。もちろん《冒険者》として活動する日もあるので全て、と言うことはない。いささか退屈ではあるけれど、であればそれは平和の証なのだと一人でそれなりに納得しながらその日を費やすというのがラシェルの日常なのだ。

コン、コン、コン――。

ふいに部屋に響く、〈相談所〉へと遊びに来る誰とも違う個性のノック。つまり、この〈相談所〉へと初めてやってきた人

間の存在を告げる音がラシェルの精神の弛みを一気に切り替えさせる。新たな来客は、すなわち事件の始まりだ。
「どうぞ、お入りください。〈相談所〉は〈学園〉の生徒に対して常に開かれています」
失礼にならない表現で、硬質な印象を避けつつも毅然とした意志を織り込んだ、ラシェルが最大限に気を配った返答を返して生徒の入室を促す。最初の印象は重要だ。隔意を持たれたり、怯えられてしまえば話を聞きづらくなってしまう。そうなると相談員としての仕事にとってマイナスの影響は大きい。
「それでは、失礼する」
はたして、まだ声が変わりきっていないのであろう、中性的な響きの声と共に入室してきたのはドワーフであるラシェルとそう変わらない身長の生徒だった。声に若干の堅さが感じられるが、ためらいや怯みは感じられない。それはつまり、強い決心を伴ってここにやってきたのだということがはっきりと理解できる。
さらにラシェルは容姿を確認していく。髪の毛は薄いはちみつのような色で少し癖が強くかかっている。まだ成長しきっていない体躯は堅さやいかつさとは無縁で、しなやかさと軽やかさをイメージさせる。目鼻はすっきりと整っており、その表情はあどけなさや幼さを手放しつつも十代にありがちな不遜さや軽率さは見られない。なによりもラシェルを惹きつけたのはその瞳だ。たった一人、踏み込んだことのない未知の場所へやってきて、貴族のプライドを曲げてまで赤の他人の手を借りること、その重大さを十分に理解した上で彼女と相対している。真っ直ぐにラシェルを見るその視線は歳不相応といって差し支えないであろう強靭な理性と聡明さを帯びていて、容易く彼女のハートを射抜いた。
パタン、と本を閉じて椅子を立ち、来訪者の前に立つラシェル。どうやらこれは本物の事件が舞い込んできたらしいという危機感と、好みのツボを全押しされてしまったという興奮とで混沌の渦に流されそうな己を、かつてないほどの理性で強引に押さえつけて、自分の仕事を始めるための儀式を始める。
貴族との交流には時に儀式めいたやりとり、段取りを踏んだ会話が必要となる。それは互いの立ち位置や前提を確認するために行われるものであり、ラシェルにとっては一人のメイドから〈学園〉の一員として生徒のために全力を尽くすために自分のスイッチを入れるためのルーティンなのだ。

◆

まずは、最低限の確認から始める。
「ここがどういう部屋なのか、ご存知ですね？」
間髪入れず、明瞭な答えが返ってくる。
「もちろん知っている。我々、〈学園〉の生徒が自らの手に余る問題に遭遇したときに、助けを求めるべき場所であると」

よどみない答えに笑顔で頷きを返し、取り決めの確認を始める。貴族にとって名誉や面子は彼らの社会における死活問題となるほどに重要な財産だ。それを傷つけないことをはっきりと示さなくてはいけない。

「ではいくつか最初にわたし達の約束を聞いてください。その上で、わたしを頼るかどうかを決めてください。もしも何も語らずにここを出るのであれば、貴方はここには来なかったことになります。よろしいですか？」

無言で首を縦に振る生徒。

ラシェルはにっこりと笑みを浮かべ、指を立てながら順番に〈相談所〉のルールを言葉にしていく。

指を一本立てて、

「ひとつ、わたしは貴方と対等の友人として相談に乗ります。〈学園〉の基本的な理念ではありますが、特にここではわたしは必ずあなたの味方だと思ってください」

指を二本立てて、

「ふたつ、そしてその秘密は原則として〈学園〉の名において守られます。あなたが秘密にしておきたいことをわたしから口にすることはしません。」

さらにその指を三本にし、

「みっつ、わたし一人の手に余る場合は〈学園〉の《冒険者》が関わることになりますが、彼らも決して生徒に分かる形で口外はしません。ここまでよろしいしょうか？」

再度の念押しを口頭で行う。無言を肯定の返事と解釈し、さらに最後のルールを口にする。佇まいを直し、真剣そのもの表情で最も重要なそれを口にする。

「よっつ、ですからわたしに相談する時は、できる限り隠し事はしないでください。本名や実家の事情についてまで話す必要があるとは思いませんが、わたしたちはあなたの言葉を信じて全力を尽くします。信頼の証として、相談事に関係するものについての隠し事はなさらぬようにお願いします。」

最後まで告げると、再度表情を緩めて微笑みながら続ける。

「以上が、〈相談所〉のルールです。今ならまだ――」

「いや、ルールは了解した。助力を求めるのはわたしの方なのだ。これ以上をあなた方に望むのは傲慢というもの。我が家名たる――」

初めから決心はついていたのだろう、あまりに迷いのない答えに対して指先で言葉を制する。その即断は立派かもしれないが、先走りすぎてもいる。

「だから、家のことは口にしなくても大丈夫。それからわたしのことはこれからラシェルと呼んで。わたし達は身分と関係ない友人として、言葉遣いについては大目に見て欲しいんだけど――いいかな？」

「わかった、ラシェル――言葉についてはわたしのほうこそ堅苦しいと思わせしまうかもしれないが、《冒険者》のやり方にあわせよう――合わせる。それからわたしはテレーズと呼んで

くれ」
少しぎこちない様子ながらも、提案をテレーズは了解してくれた。そう判断
したラシェルは満面の笑みを浮かべて手を差し伸べる。
「これからよろしく、テレーズ」
「こちらこそ、ラシェル」
力加減に気をつけながら握手を交わし、契約が成立する。そして事件が始まり、一方のラシェルの頭の中ではすでに巨大なミッションを成し遂げたような充実感と多好感で溢れかえっていた。

◆

ほどなく落ち着きをとりもどしたラシェルは、テレーズを来客用のテーブルに招き、対面に座る。手早く〈魔法の鞄〉（マジックバック）から来客用のティーセットを取り出し、お茶とお菓子の準備を整える。
「じゃあとりあえず、お話しよっか。話しづらいことなんかもあるだろうし少なくともわたしは自己紹介しなくちゃいけないしね」
関係はいつでも変わるもの、まずは自分のことを少しずつ理解してもらい、親近感と信頼を得る。問題について取り掛かる必要性は当然だが、意思の疎通に齟齬があっては解決の取っ掛りを得ることだってできない。
「わたしは〈学園〉でこの〈相談所〉を預かっている《冒険者》のラシェル。種族はドワーフで職業は施療神官、それにエルダーメイド。最近の趣味は恋愛小説を読むことと、友達とお茶を飲みながら過ごすことかな。これからよろしくね。テレーズのことは　とりあえず話したくなったことだけ話してくれたら良いから」
ラシェルは〈学園〉の相談員という立場上、ついでに言ってしまえば本人の性格からして隠すようなことは（少年趣味を除けば）無い。一方でやってくる依頼者は問題を抱えた貴族だ。問題を聞き出すにも一苦労するということも珍しくは無いのだが、テレーズはそういった障害は既に無かったらしく滔々と自らの事情について語り始める。
「わたしにはジスランという双子の弟が居るのだが、こういうと何だが少し、いや大分、かなりひどいお調子者で何かと問題を起こすんだ」
「テレーズはここに来た時からすごくしっかりしてるよね」
正直、歳不相応なのではと思う程にしっかり受け答えをこなすテレーズに対し、彼の双子の弟はとんだやんちゃということらしい。
「母がかなり厳しい人だったんだ。それで自然とこうなってしまった」
「双子なのに不思議」

口では相づちをうったものの、まあ実際に双子が似るというのは大体のところ思い込みだとラシェルは思っている。基本的に他人なのだし、単なる印象の話だ。

「弟に話を戻そう。弟が何かと問題をおこすのは実家にいたころからそうなんだが、〈学園〉に来てからは悪友が増えたのかそれに拍車がかかってしまって」

話を本筋に速やかに戻す辺り、かなり実直な性格をしているのだろう一方で、さすがに身内の恥に触れる段となると、バツが悪そうに視線を逸らすテレーズ。

「あー、《冒険者》は好き勝手な生活してる人が多いからね…」

ラシェルの側も、この類の問題については少々きまりのわるい気分になってしまうのはやむを得ないところである。〈大地人〉の、それも貴族として育てられた人間と比べた場合〈冒険者〉の生活は自由を通り越して放埒であると言われても仕方のない例も珍しくない。〈学園〉が文化交流を促す側面をもっている以上、避けられない問題ではあるのだが、常に頭痛の種としてついてまわっているのも確かだ。

「最近は門限破りもよくしているようで、わたしも何回か説教したりしたんだが、効果はほとんどあがらなくて」

「まあ、〈学園〉の生徒は基本寮住まいだし、門限破って夜遊びしてる生徒は結構いるからね… たまーに外の女の子とのトラブルなんかもあったかな。ほとんどは単に羽目を外して飲んだり潰れたりしてくる程度なんだけど」

男子生徒が門限を破るのは常態化しており、また〈学園〉側もそれを大目に見ているのは事実である。〈花の都〉は幸か不幸かまだまだサービス業については未発達な分野も多く、夜遊びと言ってもせいぜいが飲み明かすか、〈冒険者〉相手に声をかけて振られる程度で済んでいること。男女のトラブルで最悪の事例として残っているのが生徒がストーキングされた事案が1件というあたりでギリギリの線を保っているという現状が多少の冒険を許している根拠となっていた。

「女性関係はさすがに無いと思いたい……とりあえず、わたしの弟について言うと、そんなわけでおおよそひと月前ぐらいから門限破りを繰り返すようになったんだが、ここのところ急に態度がおかしくなってしまった」

視線は相変わらず逸らしたままだが、それでもしっかりとした口ぶりで弟について言及を続けるテレーズ。

「態度が、どんなふうに？」

ラシェルは、ここが要になるだろうという点に差し掛かったところですかさず相づちを入れ、話の続きを促す。

「門限破りを始めたころは、妙に自信過剰というか、尊大な態度をとっていたんで、妙な遊びでも覚えて気が大きくなったのかと思っていたんだが」

「途中で変化があった、ということなのかな」

ラシェルの言葉に頷きながら、テレーズは今まさに問題となっている状況を口にする。
「ここ数日の間、ジスランが明らかに大きな失敗を隠しているというか、何かに怯えているような素振りで、わたしのことも避けるようになった」
「それで心配になって、〈相談所〉（ここ）を頼った――と」
「その通り。わたしは結局のところまだ力を持たない身だし、《冒険者》を含む〈花の都〉のルールにだって明るくはない。だからそれらに明るい専門の人間を、〈相談所〉とラシェルを頼ろうと決めたんだ」
自分が言うべきことは全て言い切った、ということなのだろう。よどみなく言葉を並べ切ったテレーズは、最後に大きく息を吸って吐き出し、来客用のソファに深く身を沈める。
「どうか、助けてはもらえないだろうか」
ラシェルにとって、〈学園〉における己の責務という以前に、助けを求められて断るという選択肢は無かった。彼女はおせっかい焼きなのだ。こと、それを求めるのが愛らしい少年であれば、もはや助けを求める言葉は太陽が東から上るぐらいに当然の現象として、助けを求める言葉は彼女を無軌道に駆動させる動力となる――なってしまう。
「なるほど、そういうことならまさに〈相談所〉が取り扱うべき事案。テレーズの信用に応えられるように全力で頑張るよ。早速今晩からでも調査にとりかかって、何か分かればテレーズに伝える。そういうことで」
胸中で『大きな失敗』について考えながらテレーズの求めを快諾する。〈花の都〉は基本的には安全な場所だ。〈大地人〉は非力だし、夜に出歩くのはほぼ〈冒険者〉ばかりであることから暴力沙汰の加害者というのも考えづらい。いずれにせよ、捜査対象であるところのジスランの動向を確認もしない内から断定できることなんて何ひとつないのだ。まずは彼の現状を把握しなくては――。
こうして〈相談所〉はいつものように、厄介ごとを解決するために厄介ごとをふりまく機関としての姿を露わにしようとしていた。

（つづく）

レプリカヒーロー

津軽あまに

▼1

「やったっすね兄貴！」
「ああ、八時間と三十二分後、〈チースィフェイク〉の切れ目が縁の切れ目ってわけだ」
「あくどい金で買った宝石が目の前でぱっと消えるって寸法っすね！　さすが兄貴、あの話術、キレッキレだったっすよ！　兄貴頭いい！」
「違ェよむち坊。俺は頭がいいんじゃねえ。賢くなるにも、強くなるにも時間がかかる。そんな地道なことをやる暇なんざ俺にはなかった。なら、どうすれば簡単に勝てるか？　簡単だ。相手をバカにしたり弱くしたりすればいいのさあ」
「……デバフ？」
「違ェよ。ゲームの中、データの話じゃねえ。いや、それも一部か。相手の判断力を下げて、反応速度を遅らせて、まあ、そういうことだ。たとえば、相手の思考を誘導して、こちらがちらつかせた選択肢の中でしか考えられないようにしたりとか。人間、枠がなくて余裕があればそこそこ冴えた方法が浮かぶもんだ。それを、焦りや欲を匂わせて鈍らせる。中の人間、腹ン中にデバフをかけるわけさ。相手をきっちり観察してな」
「うー。よくわかんねぇっす」
「ま、テメェは〈贋作師〉としてブツを作ってりゃあ、俺がうまーくそれを使って稼いでやるってことだよ。わかんなけりゃあその方がいい。ゴロの手管なんざ、覚えてもろくなこたぁねぇしなあ」
「でも、兄貴。俺ァ、兄貴みたいなホンモノになりたいんだ」
「俺が、ホンモノ、ねえ」
「俺、元の世界でも半端でさ。こっちでも、レベル四十とか、そんなもんだしさ。兄貴がいなけりゃ、いじけてうずくまってただけだと思うしさ」
「むち坊、それこそ、俺の思うつぼだぜって話をしたんだぞ。俺についてくか、あのままススキノで項垂れてるか、それしか選択肢がないようにテメェは思い込まされてるのさ」
「でも、兄貴は、殴ったりしないし、悪党からしか金むしらねえし、かっこいいじゃないっすか。その手伝いができるなら、俺は……」
「いいさ。人間見たいものしか見ないもんだ。それもまた、俺の手管の肥やしの一つだからな。せいぜい利用させてもらうぜ、むち坊よ」

▼2

エッゾ島、ススキノにほど近い森の中で、六人の〈冒険者〉が巨人と剣を交えている。

巨人はエッゾを闊歩する代表的なモンスターだが、〈冒険者〉たちが相手をしているのはその中でも、知能も低く力も弱い〈根喰巨人〉だった。

「もうだめ無理だ〈シルバーソード〉と一緒の訓練メニューとか絶対無理っすひきニート堕肉塊にいきなりビリー伍長のブートなキャンプをさせるくらい無理がある！　うち帰る！　ウパシさんのご飯たべる！」

「やかましい！　帰ンなら〈帰還呪文〉でも唱えてろ！」

「旦那マジ蹴りやめたげて！　むちお死ぬ！」

「じゃれてる暇があるなら位置取り！　自動回避がないんだから、敵の間合いを見て動き回らないといい的だよ！　ヘイトだけに気をつけてりゃいいってわけじゃないんだから！」

〈冒険者〉側のうち、五人までは全力ではない。最も力量の劣る〈ブリガンティア〉のむちおに合わせ、「師範システム」を使って半分以下のレベルにまで力を抑え込んでいるのだ。レベルだけをとってみれば、六人に差はない。

けれど、むちおからすれば周りはそれでも「別格」だった。

全身が痛い。恐い。生臭い。めまぐるしく変わる戦況。レベルは均等にしているはずなのに、周りの奴らは何もかもが違う。そんな状況に、むちおは改めて他のメンバーとの格の差を実感していた。

まず、冗談みたいなパステルピンクのメイド服に身を包みながら、自分の腰ほどもある太さの金棒を振り回すエルフ女性、浮世。そして、斧を片手に味方の様子をたえず伺い、回復魔法をかけて回るドワーフ、ヴォイネン。二人は、今やエッゾ島でも最も有名な冒険者ギルド〈シルバーソード〉のメンバーだ。

それ以外の四人は、かつてエッゾを暴力で支配した戦闘系ギルド〈ブリガンティア〉の構成員。ギルドマスターのデミクァスに、メンバーの牛乳峠、6割は曇り、むちおという顔ぶれである。

デミクァスは持ち前の負けん気もあって、見る間に〈シルバーソード〉から戦術を吸収している。恐いもの知らずの戦いぶりは、もはや一流のレイダーたちも一目置くほどだ。6割は曇りはどうやらレイドの経験があったらしく、当然のように〈シルバーソード〉との連携をこなしている。むちおと一番状況の近い一般人である牛乳峠も、プレイ歴が長いせいで装備や基礎知識はむちおと段違いだ。

つまるところ、レベル、経験ともにむちおはこのメンバーの中で最も不足しているのである。おまけに、彼のサブ職業は〈贋作師〉。アイテムなどの偽物を作ることに特化した職業だ。〈大災害〉前は短時間で消滅する、見た目だけの記念撮影用のハリボテアイテムを作ったり、低確率でしか効果を発揮しない

ポンコツアイテムを作ったりという、冗談のような特技しか使えないロールプレイ職だった。モンスターとの戦闘には使い道がないし、〈ブリガンティア〉が悪徳ギルドだった頃はともかく、〈シルバーソード〉とともにまっとうな冒険をするようになってからは、ほとんど意味のないものとなっていた。
「……く、くそっ。この巨人野郎テメェなんざ、こ、こわくにゃんてねー！」
「噛んだわね」
「噛みましたな」
「あと隠密中に叫ぶとか何やってんのあの子は」
「――チェストー！　〈絶命の一閃〉！」
「ほら、反応されたじゃない。あ、防御された」
「気合の入れどころが明らかに誤チェストでごわすな」
「誤チェスト言いたかっただけよねヴォイネン。ま、ガードごしでもふっ飛ばして態勢は崩せるでしょうし、〈根喰巨人〉相手ならワンパンでしょ。伊達に毎日鍛えてないんだから」
　相手の死角からむちおが投げナイフを放つ。情けない叫び声によって不意打ちは失敗したものの、むちおが繰り出した〈暗殺者〉の最強特技〈絶命の一閃〉は、何とか巨人の生命力を削りきった。
　どう、と倒れる巨体。
　それと同時に、むちおもまた、地面へと倒れ込んだ。
「しんどいってーか３Ｄとか絶叫とかマジ無理なんですけどリアルバトルとかどうして当然のようにできるわけ？　危険のネジとか飛んでる？　オレ普通っすよね？　違うの……？」
「うっせぇ」
「痛い！　ひどいギルマスダウン追い打ち反対！　これだから格ゲ職モンク汚い！」
「おら、帰るぞ。今日のノルマはこれで終わりだ」
　牛乳峠が手を差し伸べるも、むちおはそれを手足をじたばたさせて振り払った。
「無理ー。立てねえもうちょっと休んでから帰るっすからみんなは先に行っててくれー……」
「だらしねぇ。やる気がねぇ奴は置いてくぞ」
「はあ。バカなんだから。いいわ、気がすんだら帰ってきなさい。ウパシさんに心配かけない程度にね」
「へーい」
　倒れたまま手を振り、〈帰還呪文〉で仲間たちがススキノへと飛んでいくのを見送るむちお。完全にその姿が見えなくなったところで、彼はよっこらせ、と勢いをつけて起き上がった。
　くたびれた振りをして、追加での自主訓練を行う。それが、むちおの最近の日課だった。
　息を整え、腰のホルダーから左右の手にナイフを取る。腰から背、肩へと捻りを加え、一時代を風靡した野球の投手のように、回転とともに手にした刃を放った。真っ直ぐな軌跡を描き、白刃は手近な木の幹へと突き刺さる。次いで左の投げナイフが、

一発目のナイフの柄へと突き立てられる。
さらにホルダーから抜きはらい、そのまま投刃。三、四、五、六、七、八、九、十。
最初のナイフを円で囲むように連続投擲した刃が幹に突き立てられた。
むちおのレベルは低い。攻撃の威力はレベル依存の筋力ステータスによるため、訓練をしても簡単に限界に行きあたる。攻撃特技を使用すればゲーム時代のモーションを肉体が再現することで攻撃が命中するため、本人の身体運用をいくら練習したところで影響は少ない。
だが、通常攻撃の精度はステータスとともに、実際に体を動かした際の姿勢や重心、指先に至るまでの角度に依存する。このことに、これまでの訓練でむちおは気づいていた。つまり、ゲームのステータスの補正はあるものの、実際に手先が器用だったり反復訓練をしたりすることで、命中率にボーナスを受けられるようなのだ。
〈大災害〉からこちら、〈贋作師〉として手先の器用さを鍛え続けてきたむちおにとって、この面の上達は著しかった。今はまだ止まった的相手に曲芸めいた狙い撃ちができる程度だが、鍛えれば、動き回る相手であっても、鎧の隙間やエネミーの目などの弱点を狙うこともできるようになるだろう。そうすれば、ちょっとしたレベル差も覆せるようになる可能性がある。
むちおには、デミクァスのような気の強さはない。6割は曇りのように元レイダーなんて経歴もなく、牛乳峠のように〈エルダー・テイル〉歴が長くて資産があるようなベテランでもない。本当に、何者でもない、代わりなどいくらでもいる平凡な量産型の〈冒険者〉の一人でしかない。たまたま、隣にすごい人間がいて、それについている金魚の糞でしかないのだ。だからこそ、何か、ホンモノの、いっぱしの者になりたいという焦りがあった。
十一、十二。刃の軌道がぶれる。十三。ナイフが幹を逸れた。
「ひ、ひゃう！」
と、逸れたナイフの向かった方の繁みから、悲鳴があがった。
「は？」
むちおは慌てて声の方向へ駆けだした。誰かが流れ弾（ナイフ）に当たってしまったら、冗談ではすまない。相手が〈大地人〉だったら万が一ということもある。
「おい、大丈夫かよ！　悪かったっす！　手元が狂った！」
「お、おう……だ、大丈夫だ。こ、こわくなんて、ないぜ」
返事をしたのは、茂みの中で尻もちをついて倒れている子どもだった。
身なりを見るだけでわかる。〈大地人〉しかも、おそらくは〈廃棄児〉だと、むちおは見当をつけた。〈廃棄児〉とは、亜人の襲撃などで親を失い、都市にしか行き場のなくなった孤児たちを指す言葉だ。ゲーム時代はさまざまなイベントのトリガーや、ちょっとしたアイテムの交換などをしてくれるマス

コットのような存在だった。しかし、〈大災害〉後のエッゾでは、〈冒険者〉と〈貴族〉の混乱によってその数を増し、その生々しい背景設定を改めて〈冒険者〉たちに認識させていた。

「……おいおい少年ボーイ。なんでンなとこにいるんだよ。街に近いからってここはエネミーも出るんだぞ」

「べ、別にいいだろ！　あんたらが毎日モンスター狩りしてっからここもすっかり安全になったし……」

「まあ、確かに……ん？」

毎日、狩りをしていることを知っているということは。

「毎日、見てたのか？」

「う。だから、いいだろ別に！　僕が何してようが……」

頬を膨らませる少年の表情に引っかかりを感じ、むちおはしげしげと彼の顔を覗き込んだ。

「な、なんだよ……！　お、怒ろうたって恐くないんだからな！　あんなに泣き言ばっかり言ってガキみたいにじたばたしてる奴が！　今さらマジな顔したって、おまえなんか、一緒にいたあの髭のおっさんと比べたら全然迫力がないんだから！」

一緒にいた、髭のおっさん。その言葉に、むちおの中で記憶がよみがえる。

それは、〈エルダー・テイル〉がゲームであった頃から〈大災害〉後、しばらくまでの間行動をともにしていた相棒との日々。兄貴、と呼んで慕っていた相手との、スリリングな思い出の数々だった。

むちおのかつての相棒は、ザサードという名前の〈盗剣士〉だった。お世辞にも上品とは言えない口調の中年男性（声からそう思われただけで、実年齢は知らないのだが）で、どこか愛嬌があって、むちおは彼とつるんでいた。〈贋作師〉を勧められたのも、ザサードからだった。使い道のあまりないジョーク職である〈贋作師〉だが、ザサードの話術と機転は、その力を色々な悪戯や儲け話へと繋げてくれた。

〈大災害〉後、現実となったセルデシア世界で、ザサードの心理戦上手はさらに磨きがかかった。〈大地人〉の〈貴族〉や〈商人〉の中でも悪徳と噂される者たちを相手に、むちおの作った贋作アイテムを駆使して荒稼ぎをしてみせたのだ。

〈贋作師〉の贋作アイテム特技には大まかに二つある。

一つは時間をかけて本格的な贋作を作る特技、〈レプリカメーカー〉。正規のアイテムを作るのと大して変わらない素材や資金を費やして、あらゆる製作級アイテムの贋作を作り出すもの。〈レプリカメーカー〉の贋作アイテムは、鑑定などで見破られない限り、本物と同様の市場価値で流通する。だが、武器防具の場合装備してもハリボテ同然の効果しかなく、道具の場合は一割の確率でしか効果を発揮しない。

もう一つは、短時間で間に合わせの贋作を作る〈チースィフェイク〉。少ない材料と時間で量産が可能だが、この特技で作った贋作アイテムは短時間……〈大災害〉後は十二時間で消滅する。さらに、道具の効果が発揮する確率はたったの２％だ。

この二つを使い分け、ザサードとむちおは〈大地人〉の資産家たちから悪銭をむしりとり、そして、景気よくばらまいた。
楽しい日々だった。むちおは自分が、ホンモノになれたような気がした。〈大災害〉直後、無気力にうずくまっていた自分を助けてくれたザサードに、心底感謝していた。
ずっと、二人は相棒で、痛快な冒険ができるのだと思っていた。ある日、忽然とザサードがむちおを置いて、旅だってしまう日までは。
「……あんときの、少年ボーイか」
「んだよ。今さら思い出したのかよ」
目の前の少年は、ザサードとむちおがつるんでいたときに助けた子どもだった。街でゴミ拾いをしていたところ悪徳商人とぶつかり、彼が手にしていた高価な商品を壊してしまって、弁償をせまられていたのだ。ザサードはその壊れたアイテムと、〈チースィフェイク〉で作った間に合わせの贋作宝石を交換してその場を収めて、この子どもをその商人の地元からススキノへと移り住ませたのである。
「……ってか、俺らの訓練、毎日見てたのかよ。少年ボーイ」
「訓練だけじゃねーよ。あの髭が消えて、あんたが落ちぶれてたときも、たいてい見てた」
むちおは木に額を打ち付けた。顔から火が出そうだった。
ザサードがススキノから消え、連絡がとれなくなってから、むちおは一気に無気力になった。フレンドリストでの現在位置から、ザサードはミナミへと拠点を移したらしいことだけはわかった。だが、念話の着信も拒否され、音信不通になり、むちおは自分がザサードにとって用済みになったことを悟ったのだ。
それからの日々は、みじめなものだった。長いものに巻かれるように〈ブリガンティア〉に加わり、ケチな悪事に手を染めた。たまに〈贋作師〉の特技を使って〈大地人〉を助けるようなことをしてもみたが、ザサードのようにはいかず、ばれてデミクァスから怒鳴られ、蹴り飛ばされることもしばしばだった。
「で？　情けないオレを笑いにきたのかよ少年ボーイ？　いい加減暇人だなオイ」
「少年ボーイじゃねぇ。ケートだ。……ショックだったんだぜ。助けてくれたときはアンタがめちゃくちゃかっこよく見えたのに、あんな、何でも作れる力も持ってるのに、あんな乱暴者たちにいいようにされてさ。アンタの力と機転があれば、なんだってできるのに」
それは、かいかぶりだ。むちおはいたたまれない気分になった。〈贋作師〉の力は、本当に、何の役にも立たない贋作アイテムを作るだけだ。それを活かせたのは、ザサードが賢かったからだ。彼のような機転のない臆病者の自分では、それを使って大それたことなんてできない。ザサードはホンモノで、むちおは、彼自身が作るアイテムのようなニセモノでしかないのだ。
「でもさ。最近のアンタは、ちょっと、また、昔みたいだったんだ。かっこよかったんだ」

「どこが。みんなの足引っ張って、泣き言叫んで、一人で居残りしたところで、全然何も変わらねえ」
「知らねえよ。あんたは、やっぱりヒーローなんだよ。かっこ悪いけど。たまにしかかっこよくないけど。だから」
ケートは右の拳を突きだし、左手でむちおの手を取ると、無理やり右で握っていたものを掴ませた。
「〈ブリガンティア〉だか〈シルバーソード〉だかなんだか知らないが、あんな奴らに負けんじゃねえぞ。あんなのになめられっぱなしとか、僕が許さないんだからな！」
それは、いつか悪徳商人からだまし取った、ケートが壊したブローチ。むちおがまだ、自分をホンモノの義賊めいたヒーローだと自分を錯覚していた頃の戦果だった。
だが、〈チースィフェイク〉と同じように、その贋作の思い込みは壊れて消えてしまった。
「……ガキは簡単に言ってくれるっすわ」
ススキノの方へと駆けていくケートを見ながら、誰に言うとでもなくむちおは呟いた。と。一人の静けさを破るように、能天気なベルが鳴る。念話の着信音だ。
夕飯時を知らせる〈ブリガンティア〉メンバーからの連絡だろうか。それにしては、早すぎる。
虚空に指を走らせて、着信ウィンドウを展開すると、そこには「送信者：ザサード」の文字があった。

▼3

「いよう、むち坊。一世を風靡した〈ブリガンティア〉の一員が、落ちぶれたもんじゃねえか」
翌日、ススキノにほど近い森の中でむちおを待っていたのは、間違いなく、かつての相棒、ザサードだった。無精ひげに外跳ねの癖っ毛、にやにやと口元を歪める表情はいつかのまま、一つだけ以前と違うところがあった。
「眼鏡、かけたんっすね。兄貴」
「もらいもんでな。使ってみると便利だぜ。約束通り一人で来てくれたんだなあ。嬉しいぜ」
むちおは改めてザサードの表情を伺う。ステータス画面によれば、ギルドタグは〈Ｐｌａｎｔｈｗｙａｄｅｎ〉とある。現実世界でいう大阪に位置するプレイヤータウン、ミナミを統一したという巨大ギルドの名前だった。
〈シルバーソード〉の話によれば、〈Ｐｌａｎｔｈｗｙａｄｅｎ〉は強引な手法でミナミとナカスの〈冒険者〉を併合し、複数ギルドの枠組みを維持したまま合議制をとったアキバの〈円卓会議〉とは微妙な関係にあるらしい。
そのギルドタグをつけたまま、今、なぜザサードはここに立っているのか。
ススキノの街ではなく、こんなところに呼び出したのか。
「散歩のついでに酒を飲みに来たってわけでもないっすよね」

「ま、おまえはさんざ俺の手口を見てるからな。無駄口も意味はないか。むち坊、頼みがある。おまえさんにしかできない仕事だ」
　頼み。その言葉に、むちおの胸に浮かんだのは高揚と疑問だった。ザサードが自分を頼りにしてくれたことは嬉しい。だが、自分にしかできないこととは何か。〈贋作師〉は珍しいサブ職業だが、〈Ｐｌａｎｔｈｗｙａｄｅｎ〉ほどの超巨大ギルドならば何人かは在籍しているだろう。その中には、むちおよりも高レベルの者もいるに違いない。
「……オレは、何を？」
「〈ブリガンティア〉のウパシ。あの女が持っている〈チキサニの首飾り〉を、盗ってくることだ」
　むちおの高揚は、ザサードの言葉によって一瞬で冷えきった。
　〈チキサニの首飾り〉。それは、〈ブリガンティア〉のギルドマスター、デミクァスがつれてきた〈大地人〉貴族の娘、ウパシが大切にしているアクセサリだった。
　それ自体は、何か優秀な力を持つレアアイテムというわけではない。木と琥珀でできた、〈貴族〉のものとしては簡素な首飾りだ。琥珀に刻まれた木を模した刻印の力で、森で獣に襲われないようになるらしい。わざわざ〈冒険者〉が欲しがるようなものではないはずだ。
　ただ、ウパシにとっては、既に滅んでしまった実家と、自分を繋ぐ縁のようなもの。何度となく家事の合間にその首飾りを磨いているのを、むちおは見たことがあった。
「……兄貴、マジすか？」
「ああ、マジだよ、むち坊。おまえならできるだろう。あの女にとっておまえは身内の一人だ。〈チースィフェイク〉ですり替えて、それだけのことさ。〈ブリガンティア〉のギルドハウスに怪しまれず出入りして、ウパシって女を油断させられるのはおまえだけだ」
　ザサードの表情は、変わらない。年甲斐もなく愛嬌のある悪戯っ子めいた笑みもそのまま、だが、その視線は冷たくむちおを射抜いていた。
　ウパシの宝物を盗み出す。なぜ。むちおは困惑した。むちおが憧れたザサードはいつだって、詐欺はしても、悪党から奪うだけだった。ウパシは、宝物を奪われるような悪人ではない。むしろ、悲惨な境遇の中にありながら、気丈にも居場所を作り出した、健気に生きる善人だ。戦う力はなくても、デミクァスの暴虐を止め、ススキノの街の人々と新生〈ブリガンティア〉を繋いでくれた恩人だ。もし彼女がいなければ、むちおたちはススキノにい続けることができなかったろう。
「……兄貴、なんで？　そんな悪党みたいなこと」
「俺は昔から悪党だぜ。善人が詐欺なんざするもんか。片棒を担いだおまえが一番よくわかってるだろうが」
「でも、兄貴がかっさらってくのはいつだって悪い奴らばっかりだったじゃいっすか！」

むちおの言葉に、ザサードは表情一つ動かさなかった。
「効率さあ。後ろ暗い金なら、かっぱいでも表だって復讐しにくい。それら、この世界には〈冒険者〉を法はないからな。厄介なのは義侠心に駆られたお節介だ。そういう奴らを敵に回さないためにも、ああいう奴らはいいカモだった。それだけさ」
「だったら今はなんで！」
「抜け目なく相手を観察すること。そう教えたよな。ギルドタグ、見ただろう？　今の俺のバックはデカい。安いリスクなら踏み倒せるようになった。なら、必要に応じて、相手が善人だろうが女子供だろうが、ためらう必要なんざなくなったのさ」
「……っ」
「ああ、〈ブリガンティア〉の復讐なら怖がらなくてもいい。首尾よくいけば、おまえも〈Ｐｌａｎｔｈｗｙａｄｅｎ〉で保護してやれる。〈シルバーソード〉が束になったところで、手は出せないさ。貴重な〈贋作師〉だ。おまえが望めばミナミでいい暮らしもできる」
　違和感。違う。何が？　ザサードの言葉は正しい。詐欺にいいも悪いもない。そもそも、ニセモノの自分に、ホンモノについていくだけだったむちおに、その良し悪しを断ずる資格すらない。ザサードがそういう基準で動いていたなら、彼はそういうホンモノだったということだ。それだけのはずだ。ザサードの言葉は正しい。〈ブリガンティア〉から、多くのメンバーは離れ、ススキノから出て行った。好き勝手やった結果、このまま街にいられないという、その方がまっとうな感覚だ。
　であれば。むちおが選ぶべき答えは、決まっていた。
「それは、できないっす。兄貴」
　理屈ではない。「最近のアンタはまた、ヒーローっぽかった」、と。そう言ってくれた少年の顔がちらついたのだ。
「まあ、三割くらいそう言うと思った。成長したな、むち坊」
　口元をさらに深く歪め、ザサードはむちおに背を向けた。そのまま奥の繁みに手を突っ込み、そこに隠していたモノを軽々と持ち上げた。
「なら、お願いは終わり。ここからは命令だ」
　ザサードが掴んだのは、縛られて気を失う〈大地人〉の少年。昨日、この場所で会話を交わした〈廃棄児〉、ケートだった。
「〈チースィフェイク〉の成功率は今のおまえだと、諸条件を加味しても四割ってとこか。八度で成功率九割八分。一度の試行で半時間。長く見積もって四時間。材料集めと相手に怪しまれないように説得する時間も考えれば……二日待とう。それまでこいつの五体満足は保障する。まあ、うまくやってくれや」
　流れるような計算速度。電卓を使っているわけでも、〈会計士〉でもないのに、いつもザサードはすさまじい暗算をしてむちおを驚かせたものだった。
「行きな。用事はそれだけだ。期待してるぜ、相棒」
　むちおはザサードに背を向けると、ポケットに突っ込んだままにしていた壊れたブローチを握りしめた。

▼4

〈ブリガンティア〉のギルドハウスは、ススキノの外れの廃ビルを改装したものだ。かつては巨大な宮殿めいた建造物を所有していたのだが、〈シルバーソード〉の手によって空中分解した後に、改めて数人で暮らすための今の建物を購入し直したのである。リビングにあたる部屋には、当然のようにギルドメンバーではないメイド服の女エルフ……〈シルバーソード〉の浮世が座っていた。

「おかえりなさい。どうしたの？　顔色悪いわよ？」

「顔が悪いのは生まれつきっすよ」

「そういう自虐ネタは笑えないわ。一人で訓練もいいけど、やりすぎで体調崩すならやめといた方がいいわよ」

どうやら、浮世にはむちおの自主練がばれていたらしい。

「俺はクズっすからね。〈シルバーソード〉みたいにキラキラしてないんで、みっともなくあがくしかできないんっすよ」

「あら、卑屈。なによ、今日はずいぶんと重症みたいね」

むちおは一刻も早く会話を打ち切りたかった。時間がない。〈チキサニの首飾り〉の贋作アイテムを作るにも、ウパシに怪しまれないように説明をするにも。

おまけに浮世は勘がいい。何かボロを出せば、そこから全てが台無しになる可能性もある。

「バカねえ。何があったか知らないけど、今より早く「ちゃんとする」ことなんてできないでしょうが。最速の治療、最速の予防はこの瞬間からしか施せない。あたりまえ過ぎて口にするのもバカらしいくらいだけど」

それでも、浮世はむちおを引き留めた。

「アンタ、デミクァスに喧嘩売ったでしょ。〈シルバーソード〉がこっちに来たばっかりのとき。レベル４２対レベル９０。勝ち目とかないのに。バカかって思ったわ」

突然の話題転換に、むちおは思わず浮世へ向き直る。ザサードといい彼女といい、今日の話し相手は自分を置き去りにしてばかりだ、とむちおは思った。

「そう、バカって思った。……私は、本当に自分のことをバカだと思ったの。レベル差とか関係なしに、向かっていった子がいるのに、私たちは、街の状況がわからないからとか、様子見をしようとかいって、何日か手をこまねいていたんだから。私らはね。アンタがデミクァスに喧嘩売ってるのを見て、改めて確信した。自分がここに来た目的とか関係ない。目の前で困ってる人がいて、それを気持ち悪いと思う以上、一秒でも早く踏み込まないといけなかったんだろうって」

「違う、浮世姐さん。それは、ホンモノじゃないんだ」

本当ならばさっさと話を切り上げるべきなのにも関わらず、むちおは思わず反論していた。

事実だけを見れば、浮世の語ったことは事実だ。落ち目の〈ブリガンティア〉で、むちおは、デミクァスに対決を申し込

んだ。実質的なギルド運営の柱だったロンダークが抜け、メンバーは次々と脱退し、そんな中で今までのやり方は続けられないと、たてついたのだ。結果は、数秒で敗北。気が付いた時には大神殿で復活して、自分が一度「死んだ」ことを思い知った。

浮世はその行動に影響を受けたというが、それは、むちおが、自分の正義感に基づいてとった行動ではなかったのだ。

「あれは、そう。ウパシさんがホンモノなんだ。ウパシさんがデミクァスの旦那に逆らって、〈大地人〉なのに、殺されたらおしまいなのに。オレはそれがすごくキラキラして見えて、それを真似すれば、オレはキラキラになれるんじゃないかって、そう思って。……だから、ニセモノなんだ。本当に、勇気があったとかじゃないんだ。だから」

「それがどうしたのよ。アンタの行動があたしらを動かしたのには違いないでしょ。心の中なんて、誰にも見えないんだから。本当とか偽物とか、私にとってのアンタの行動の価値にはあんまり関係ないでしょう？　患者を個人的に嫌いな凄腕の医師が治療するのと、心底相手を思いやった親がエセ医学にはまって我が子にあやしい治療を施すの、どっちがマシって話」

浮世の言葉はシンプルで、だからこそ、むちおにとってはまぶしすぎた。彼女もまた、ホンモノなのだ。だから、むちおが何に悩んでいるのか、本質的には理解できないのだろう。

「あと、ウパシさんに今のこと伝えてあげたら喜ぶと思うわ」

胸ポケットの中の壊れたブローチがちくりと痛んだ。

▼5

街道沿いの簡素なログハウス。〈街道の守り手〉によって、ヤマトの街道には一定の距離ごとにこうした施設がある。

先ほど別の小屋を見てからさほど距離がない。ザサードの把握している限りでは、ミナミ近辺と比べてアキバ周辺の方が多くこの施設が建てられているのだが、ススキノ近辺もアキバ周辺並に手厚く〈街道の守り手〉が活動しているようだ。エネミーの出現頻度の高い島だからこそ、需要があるのだろう。

約束から二日後。むちおから指定があったのはこの小屋だ。

ザサードは、かけていた眼鏡の「機能」を起動する。彼の上司から配られた特殊なマジックアイテム、〈渡り鳥の目〉。〈大災害〉前、〈エルダー・テイル〉がゲーム時代にゲーム画面の隅に表示されていたミニマップを表示することのできる代物だった。全周囲一定範囲の生命反応を感知し、伏兵を探すのが主な用途だ。

生命反応は小屋の中に一つだけ。

むちおが素直にモノを持ってくる可能性は、五分程度だとザサードは予測していた。扉を開けると、真っ青な顔でむちおが座っていた。手は震え、息は荒い。デミクァスのお気に入りである娘を騙したことへを怖がっているのか。

テーブルには紅茶のポットが湯気を立ち、蒸らす時間を計っているのか、砂時計が置かれていた。空のティーカップが二つ

に、皿の上にクッキーが五枚。うち一つはかじりかけだった。
「兄貴っすか……。つ、つけられたりしていないっすよね？」
「当然だよ。俺がンなヘマをしたことがあったか？」
「ウパシはデミクァスのお気に入りっす。もしばれたら半殺しじゃすまねぇ。今の奴は〈シルバーソード〉とも繋がってる。奴らの動きは兄貴でもフレンドリストじゃわかんないだろ？」
　ザサードは改めて、右手の指で眼鏡の縁をなぞって〈渡り鳥の目〉を起動する。間違いなく、この小屋の中に人間は三人だけ。むちおと、ザサードと、そして、人質の〈廃棄児〉のみだ。
「大丈夫だ。ここには俺らしかいない」
「……そっか。悪ィ兄貴。少し、気が立ってた。かけてくれ」
　ザサードは手にした巨大な鞄を脇に置くと、むちおの向かいの椅子に腰かけた。
「ブツは？」
「が、ガキはいるのか？　いや、〈廃棄児〉一人今さらどうでもいいって話はあるんだがやっぱり死んじまうのは寝覚めが悪いし、兄貴が殺しをやるのを見るのもしんどいっていうかＮＰＣだってわかってても人の形をしてるだろ？　人形だってゴミに捨てるのは気持ち悪いじゃないか。人形供養っていうのがあるだろやっぱりみんなそう思うんだよだから」
「落ち着けむち坊。ガキはここだ」
　まくしたてるむちおを制してザサードが鞄を開くと、そこには猿ぐつわを噛まされてうめくケートの姿があった。
「そ、そうか。さすがに兄貴だやっぱり約束は守ってくれるよな。そういう兄貴だから俺は安心して」
　再びだらだらと言葉を続けようとするむちおに、ザサードは違和感を覚えた。元々この弟分は、緊張するときほどくどいしゃべり方をクセがあった。口を動かすことで思考が硬直するのを防ごうとしているのだ。だが、それにしてもこれほどだっただろうか？
「むち坊。ブツだ」
　改めて、ザサードは促した。これで出さなければ、子どもの身は保障しないという言外の意味を込めた一言だった。
　むちおは慌ててポケットをいくつか探ると、震える手でザサードに首飾りを差し出した。
「これだよ。〈チキサニの首飾り〉。ウパシの家に伝わるちゃちなマジックアイテムだ。こんなの、何の役に立つんだよ」
「こっちに来れば教えてやるよ。ほら、よこしな」
「ガキは……」
「ホンモノだってわかれば解放だよ。わかってるだろう」
　観念したように、むちおは首飾りをザサードの手に置く。
（さて、ここからが本番だ）
　ザサードは、改めて笑みを深くした。
　この時点で、ザサードはむちおを信用していない。たった今手渡された首飾りが本物である可能性は低いと考えている。この弟分は小心者のクセに妙なところで思い切りがいいお人よし

だ。そして何より、優秀な〈贋作師〉でもある。そうなるようザサードが仕込んだのだ。贋作アイテムでその場を乗り切ろうと考えてもおかしくない。

だから、この場で測られるのは、むちおがどれほどザサードを侮っているか、あるいは警戒していかということ。

（ただ贋物を掴ませるだけで出し抜けると思うなよ、むち坊）

〈贋作師〉の特技で作ったアイテムは、一見本物と変わりなく見える。それを見ただけで看破することは不可能だ。サブ職業〈鑑定士〉ならば別だが、ザサードにそんな技能はない。だが、今のザサードには、ミナミの技術の粋を集めて作られた数々のマジックアイテムがある。

腰の〈魔法の鞄〉から、ザサードはモノクルを取り出した。

〈真贋の境界〉。贋作アイテムを看破する消耗品だ。

眼鏡型の〈渡り鳥の目〉を外し、モノクルをはめて、ザサードは〈チキサニの首飾り〉を鑑定する。視界がくらみ、アイテムに関する情報がモノクルを埋め尽くすエフェクトの後、結果は、数秒ほどで明らかになった。

――〈チキサニの首飾り〉は贋作アイテムです。

その瞬間、木製の首飾りは、元となった素材であろう、壊れたガラクタのようなブローチへと変わった。

その結論を、ザサードは全く驚くことなく受け入れた。

「薄情だなあ、むち坊。ガキは、どうでもいいってか」

ザサードはショートソードを抜きはらい、脇の鞄へと突き付けて、相対するむちおを睨み……

だが、そこには、むちおの姿はなかった。

相変わらず紅茶のポットは湯気を立てたまま、砂時計の砂は落ち切っている。

クッキーは減っていない。薬を盛られることを警戒してザサードは手をつけていなかったのだから当然だ。

テーブルの上は変わらぬまま、ただ向かいに座っていたはずの相手だけが消えている。

目を離したのは一分程度。特技などを使って隠密状態になるには充分な時間ではある。では何のために？

鞄の中の〈廃棄児〉は奪われていない。ザサードのショートソードの切っ先の向けられた先で、身じろぎをするだけだ。

その状態で、逃げた？　それに何の意味がある？

ザサードは一瞬逡巡すると、ショートソードをテーブルに置き、〈渡り鳥の目〉を装着して起動した。眼鏡のレンズに広がるミニマップは、むちおがまだ、この小屋の中にいることを示している。逃げては、いない。

「何のつもりだ、むち坊。いい加減に」

ザサードが口にしたその瞬間、周囲の全てが「消滅」した。

浮遊感。体が支えの全てを失う。白くなる視界。否。色を失って白くなったように見えたのは視界ではない。視界の全てであったログハウス。その全てが、存在を失って、消失していこうとしているのだ。

この現象を、ザサードは知っている。
〈贋作師〉の特技、〈チースィフェイク〉その、効果時間終了に伴う消失だ。即ち、この小屋自体が、〈贋作師〉の特技で作成した贋作アイテムであったということ。
街道沿いの、妙に間隔の短く建てられたログハウス。テーブルの上に置かれた砂時計。意味もなく長々とまくし立ててこちらをイラつかせるむちちおの様子。違和感の断片が組み上がり、ザサードは一つの結論を出す。
（砂時計は、このタイミングを計るための目安。きょどったふりでまくし立てたのは時間調整のためか……！）
全ては、この瞬間のための仕込みだったのだ。
あらゆるものが落下していく中、ザサードは空中でショートソードか〈廃棄児〉か、どちらを手にするか思考し、まずショートソードを掴んだ。ついで鞄に手を伸ばすが、正確に飛来してきた投げナイフによって、その指は鞄に触れるすんでのところで弾かれる。ザサードはそのまま、落下する鞄が姿を現したむちおによって空中で掴み取られるのを見た。
「はっ！　少しは考えたようだな、むち坊！」
ログハウスが消滅し、ザサードは剥き出しの地面へと着地し、地面に顔を出していた突起を踏みぬいた。
――炸裂。衝撃がザサードの全身を襲う。
ＨＰバーを確認する。ダメージ、固定値にして五百。物理防御無効の固定ダメージ。この効果を、ザサードは知っている。
〈火炎びん〉。本来は投擲用のアイテムで、命中すると対象に五百のダメージを与える消耗品だ。一つだけならば大した威力がないが、〈大災害〉後は、落とし穴などのトラップとともに大量に使用、連鎖的に爆発させることで、高レベル〈冒険者〉に対しても致命的なダメージを与えられることが実証済である。それだけに、市場価値は上がり、大量購入には相応の資産が必要だ。
「さすが兄貴。運がいいっすね。一つしか発動しなかった」
距離を取り、〈廃棄児〉の少年をかばうように立ちながら、むちおはザサードを睨みつけていた。
その言葉の含むところを理解し、ザサードは改めて自分の立っている足元を靴で掘った。そこには、ごろごろと幾つもの〈火炎びん〉が埋まっていた。ステータス画面を見る限り、通常の〈火炎びん〉。だが、もしもこれが正規のアイテムならば、最初の爆発に全て誘爆し、ザサードのＨＰを見る間に削り取って死亡させていたはずだ。
ならば、鑑定アイテムを使うまでもない。ここに埋まっているのは、贋作アイテム。ホンモノそっくりだが、１割、あるいは２％の確率でしか効力を発揮しない、劣化品ということだ。
「……これが、テメェの仕込みか」
「オレは雑魚っすからね。急成長できないなら、相手を弱くする仕込みをする。兄貴の教えっすよ」
ザサードは武闘派ではない。レベルも７０といったところ。

だが、むちおと比べれば圧倒的な力量を持つ。一対一であれば、逃げられることなく仕留めることができる。
だが。この場所は、むちおの指定してきたフィールド。
随所に〈火炎びん〉が仕込まれた地雷原だとすれば、ザサードにとっても危険はある。
「兄貴。兄貴の後ろには〈火炎びん〉は埋めていない。このまま背を向けて帰ってもらえはしないっすか？」
「言うじゃねえか。贋作アイテムでせこせこ小細工して、それでもう勝ったつもりか？　テメェの限界、使い道を一番知ってるのは俺だってのに？」
ザサードの言葉に、むちおが一歩後ずさる。当然の反応だ。
どれほど下準備をしても、〈廃棄児〉を守るためにといきがっても、むちおはザサードに根っこからは逆らえない。〈エルダー・テイル〉がゲームであった頃から、「そう仕込んだ」のだ。ザサードに依存するように。その言葉を絶対と思うように。勝てない絶対なのだと信仰するように。ホンモノとニセモノという越えられない差があるのだと思い込むように。いずれどんな悪辣な詐欺の手駒としても扱えるように。
〈ブリガンティア〉の影響か、それとも〈シルバーソード〉のまぶしさに目がくらんだのか、今は気の迷いがあるようだが、一度心を折れば従順になるだろう。そう判断し、ザサードはフィールドを見まわした。
一見して、どこに〈火炎びん〉が埋められているかはわからない。だが、立ち止まってクロスボウで射撃戦を始めるのは下策だ。ザサードは白兵戦を得意とする〈盗剣士〉。それに対してむちおは中距離を得手とする投げナイフビルドの〈暗殺者〉。この距離で足を止めて戦えば相手に有利である。むちおも、それを理解して、〈火炎びん〉の地雷原を戦場に選んだのだろう。
ならば、〈火炎びん〉を無視して相手に駆け寄って戦うか。その場合は、〈火炎びん〉のダメージを受けてなお、むちおに勝てるかという問題がある。
（〈火炎びん〉のダメージは一つにつき五百。装備や消耗アイテム込みで俺が耐えられるＨＰは一万程度。二十個爆発すれば即死。だが、今の〈ブリガンティア〉は全員〈大地人〉への補償で資産はからっけつのはず。この短期間でそれだけの個数を調達できるか？）
ザサードはその疑問に、否と答えを出す。
（無理だ。こいつ一人で調達は不可能だろう。ならば考えられるのは、「全てがハッタリで罠の先には〈火炎びん〉など埋まっていない」か、「贋作アイテムで作った〈火炎びん〉が埋まっている」かだ。前者はフカしとしてはリスクが高すぎる。後者が妥当な線か）
「――贋作（ブラフ）で足止めできると思うのか？」
ザサードの鎌かけに、びくり、とむちおの体が震えた。
「な、ならどうするっすか！　贋作アイテムでも発動するときゃ効果は発動するっす！」

（たしかに、だとすれば相応の危険はある。しかしそれは〈レプリカメーカー〉で作った場合だの確率だ。〈レプリカメーカー〉の贋作アイテム作りは、本物とさして費用が変わらない。結局資産が限られたこいつが選べるのは、廉価に量産できる〈チースィフェイク〉のみ。この二日間を寝ず食わずで〈火炎びん〉の量産に費やしたとして、作成可能なのは一時間に二個、一日四十八個、二日で九十六個。何らかの設備やアイテムの補正を受けたところで百が限界。仮にこの罠の先に〈チースィフェイク〉製の〈火炎びん〉が百個埋められていると仮定して、受けてもリカバリ可能なダメージは五千程度、〈火炎びん〉十個分か。――確率、０．００２％。話にならない。ブラフだ。無視して踏み越えられるライン）

「殴って言うことをきかせるのは下策だ。面倒だからな。けれど、仕事なんでね。悪く思っても構わないが、後悔はしてもらうぜ」

ザサードはウィンドウから特技群を展開すると、目的のものを指定した。〈ユニコーンジャンプ〉。大跳躍によって距離を一瞬で詰めることのできる〈盗剣士〉の移動特技だ。

「ッ！」

むちおは即座に反応し、ナイフを投げ放つ。二本の刃がザサードを掠め、バッドステータスマーカーを点灯させた。累積麻痺毒。即座に動けなくなるわけではないが、動きがわずかに鈍る。それでも、跳躍の軌道がぶれるほどの衝撃はない。

空中で身を翻しながら、ザサードはむちおの頭上をすり抜けざま、〈ラウンドウインドミル〉で短剣を一閃した。手ごたえあり。むちおのＨＰは一撃で大きく削られる。当然だ。装備の格が、レベルが圧倒的に違う。

そして、ザサードはそのままむちおの背後へと降り立った。

〈火炎びん〉は――起動しない。

「やっぱりな。テメェは自分の逃げ道だけはふさげない」

ザサードは、　むちおの背後には、まず〈火炎びん〉は埋められていないと確信していた。むちおは、最後までザサードと戦わないように説得しようとした。それは、ザサードを恐れているからだ。累積麻痺毒を使ったのも同様。むちおは「逃げること」を勝利条件としている。ザサードの言葉に反射的に後ずさったのもその証拠。そんな彼が、最短の逃走経路をふさぐことなどあり得ない。

これで、間合いはザサード有利。負ける要素などありえない。

ＨＰを０にすることは簡単だ。だが、ザサードの目的はむちおの心を屈服させること。〈ヴァイパースラスト〉からの、〈ブラッディピアシング〉。手足を切り付け、突き刺し、致命傷にならない範囲で苦痛を与え、ザサードは次々にむちおの四肢の自由を奪っていく。やすりで削られるように減っていくむちおのＨＰバー。苦痛の表情を浮かべ、むちおは一歩後退する。

むちおでは、ザサードには勝てない。ニセモノはホンモノには抗えないのだから。

さらに一歩むちおを後退させることができれば、むちおがかばっていた〈大地人〉の子供へとザサードの手が届く。そうなれば、改めてそれを人質にして、再教育をすればいい。
つまりは、この突きをあえて防がせ、衝撃で下がらせれば、ザサードの勝利。詰み。むちおがザサードをホンモノと慕う限りにおいて、自身をニセモノと卑下する限りにおいて、絶対に覆らない結論。
が。ザサードは、一撃を繰り出す直前に、むちおの目を見た。
いつもなら、せわしなく視線をさまよわせていた臆病者の青年が、今は、まっすぐにザサードを睨み付けていた。
違和感。そんな目は知らない。そんな意志ある瞳でこちらを見るように、ザサードはむちおをしつけたりはしていない。
敢えて防御をできるようにゆっくりと突き出されたショートソードを、だがむちおは全く意に介さずに踏み出した。
ザサードの刀身がむちおの脇腹を貫く。ただでさえ削られていたＨＰが、残りわずかとなる。
その危機を吹き飛ばすように、むちおが吠えた。
「っ、チェスト……っ！　〈絶命の一閃〉！」
ザサードのショートソードを刺されたまま、むちおは腰だめにナイフを突き出した。
〈アサシネイト〉。特技の発動によって瞬間的にむちおの身体が加速し、非力なはずのナイフの一刺しを、十二職最強の破壊力を帯びた必殺の技へと昇華させる。
「――が、ぬるいなあ、むち坊！」
ザサードはむちおの体に刺さったショートソードから手を放すと、腰に差していたもう一本の短剣を抜きはらい、刃の峰で〈アサシネイト〉の切っ先を真正面から受け止めた。
（ビビりを吹っ飛ばすために気合いを入れたつもりだろうが、技の前に叫ぶなんざ、防いでくれっていってるようなもんだろうが……！）
レベル差はあれど、さすがは十二職最強の攻撃力を誇る特技。その突進力は一歩、二歩とザサードを後退させ――
そこで、ザサードは気づいた。
（……っ。違う！　これもまた、奴の仕込みか！）
あえて防ぎやすい形で攻撃し、受け止めさせて後退させる。
それはまさに、直前にザサード自身が仕掛けた策だ。ならば、むちおがまた、同じ手段をとってもおかしくはない。
つまり、技の前に無駄に叫び声を上げたこともまた、むちおの作戦のうち。ならばそれは何のために？　〈大地人〉の子供からザサードを引き離すため？　否。むちおにはもっと明確に、ザサードの立ち位置を移動させるメリットがある。
そもそも、この戦場はむちおの指定した場所。むちおが二日かけて作った、〈火炎びん〉による地雷原なのだから。
「――てめェ……！」
「ぬるま湯だと思ってると、火傷するっすよ」
――六歩目。後退したザサードの足が、地を深く踏み抜いた。

落とし穴。そう理解する直前に、ザサードの体は動いていた。腕が落とし穴の縁を掴み、落下を防ごうとする。
「ケート！　頼む！」
しかし、その手は、むちおの脇にいた〈廃棄児〉の少年に蹴飛ばされてほんのわずかに逸れ、空を切った。
ザサードの体は深い落とし穴へと落ち込み、底に叩きつけられる。無数の、数えるのも馬鹿らしい数の瓶が転がった、穴の奥へと。
「――っ！」
爆発。爆発。誘爆につぐ誘爆。閃光が白く視界をつぶす。狭い空間に衝撃が次々と炸裂する。
薄れゆく意識の中で、ザサードの脳裏に浮かぶのは無数の疑問だった。
どこで間違えた？　贋作アイテムがこれほどの高確率で連鎖的に発動した？　ただの天文学的な幸運に殺される？　まさか。それにしては、むちおはこの事態を当然のように受け止め過ぎている。最初からこうなることを確信していたかのように。ザサードを絶体絶命に追いやるだけの爆発が確実に起きることを確信していたかのように。
（〈火炎びん〉は、全て、本物だった？　なるほど。その可能性は勘案すべきだった。〈チースィフェイク〉の効果時間は半日で、この〈火炎びん〉が埋められた後に、あの贋作ログハウスは建てられていた。贋作ログハウスが消滅してもなお〈火炎びん〉が地中にあるなら、それは「本物」か〈レプリカメーカー〉の贋作アイテムでないと、理屈に合わない――）
「信じてたっすよ、ザサード。アンタなら、オレの臆病さとぼっちっぷりを確信してくれるって」
穴を覗き込み、むちおは初めて、かつての相棒の名を呼んだ。
（俺が背後に回り込むと信じて、自分の後方一定距離の箇所に〈火炎びん〉を仕込む。その上で、あえて〈絶命の一閃〉を防がせて、この穴に押し込む。……もしも俺が真正面から切りあったら、圧に負けたと見せかけて、後退して、心中でもかますつもりだったってところか。くそ。考えたもんだ）
ＨＰバーが見る間に削れていく。ザサード肉体の輪郭が薄れ、虹の泡が空へと昇っていく。
ほぼ即死、という状況であった。
「ホンモノに、なりたくはなかったのか？」
ザサードは、穴の上のむちおへと問いかけた。
それは、呪いだった。おまえはニセモノだ。ホンモノになりたければ俺に従え、という、この都合のいい弟分を従属させるための枷だった。だが、むちおは躊躇なくそれを振り払った。
「確かにオレはニセモノだ。けど」
虹色の泡となって消えていくザサードを見下ろしながら、むちおはトドメとばかりに、一本の〈火炎びん〉を投げ落とした。
「ガキの前で心底ホンモノの悪党になるんなら、俺はニセモノのヒーローで十分っすよ」

▼6

ザサードは硬い石の感触を背中に感じて意識を取り戻した。
ミナミの街の大神殿。死に戻り、という奴だ。万が一〈ブリガンティア〉や〈シルバーソード〉に敗北したときのために、ススキノの街に入らなかったのが裏目に出たらしい。
「……〈シルバーソード〉が、純正品を流したか。くそ、きちんと仲間を作れたんじゃないか、アイツは」
ザサードは体を起こし、首を回してストレッチをする。
『なら、どうすれば簡単に勝てるか？　簡単だ。相手をバカにしたり弱くしたりすればいいのさあ』
――あえて小心者、臆病のふりをしてザサードを侮らせた。
『相手の判断力を下げて、反応速度を遅らせて』
――二つの〈贋作師〉の能力と真正のアイテムを使い分け、ザサードの思考に迷いを生じさせた。
『こちらがちらつかせた選択肢の中でしか考えられないようにしたりとか』
――埋まっている〈火炎びん〉地雷を贋作アイテムだと思わせることで、「どこかに埋まっている地雷を避ける」ことより、「踏んだ場合にどの程度の確率で危険が生じるか」の計算にザサードの意識を誘導した。
完全に、いつかむちおに対してザサードが口にした詐術の基本を、あの弟分は、再現してみせていたのだ。

「くっそ、むち坊め。立派なゴロになりやがってよう」
敗因はむちおを見誤ったことだと、ザサードは結論づけた。
ザサードの背中を妄信するのではなく、そこから自分なりに贋作の使い方を考えられる程度には一人前であったこと。そして、追い詰められたときに独りでうずくまるのではなく、仲間に助けを求められる程度には人とのつながりがあったこと。さらには、ニセモノとホンモノという幼稚な呪いを、断ち切れる程度には大人になっていたこと。
「ま、あれなら俺が世話しなくてもやっていけるか」
「とかって恰好をつけてるけどただ任務失敗しただけのダメな三代目でありました。何ミスしたのに嬉しそうなんですか。マゾですか三代目。三代目はマゾヒストとか、アレなビデオのタイトルですかそうですか」
と、いつの間にか足元に座っていたメイド服の少女がザサードを見上げていた。
「ああ、失敗したよ。してやられた。……けど〈サンタクロース〉に金は渡した。刀のことも話した。問題は籠の中でネズミが暴れることだ。あの女の遺品……〈チキサニの首飾り〉はただのブースターでマーカーだ。なくたって、あいつは女相手なら適当に暴れるだろうさ。その力が十でなく九や八になったところで、大した違いはないだろ？　全てはまだあの女の手のひらの上。それだけの話さあ」
「乙女の渾身の下ネタをスルーとかどうかと思います三代目」

「いいからテメェは黙ってろ耳年増エロメイド」
「しっかし、三代目は優しいこって。単純バカなガキ一人、いくらでも丸め込む方法ならあったろうに」
　これまた、ザサードの背後に現れた中華風の服の長身青年がこれみよがしに溜息をつく。
「堅気のガキの手を借りてやれるほど、温い仕事じゃねぇよ。足手まといは勘弁だ」
「三代目。こっち来てから、ずいぶん甘くなりましたねえ。やっぱり、現実世界（あっち）じゃぁ無理してやしたかい？」
「おう、小指一本いっとくか？　どうせ魔法で治るんだ。大したケジメじゃねぇだろう」
「へっへっ、怖い怖い」
「さっさと灰色バイトリーダーに渡りをつけてきな。狂犬メイドの右目に睨み殺されるぜ」
　軽口をたたき合うと、三人の悪党たちは巣であるミナミの街へと踏み出す。
「じゃあな、ニセモノのヒーロー。いつかホンモノのヴィランがくる日までに、きっちり成長しておけよ？」
　壊れたブローチをぱちん、と指ではじいてポケットに放り込むと、ザサードはいつもの不誠実な笑顔を繕った。

Dear my ――

橙乃ままれ

アキバは草露の街だ。

実際に雨がふることは決して多くはないのだが、現代地球に比べて緑に恵まれた――ほとんど森の中と言っても良いこの街は、いつでも潤いに恵まれている。

夜明けはとうに過ぎた、しかし現代人にとっての「朝」はまだ遠い、午前五時のアキバの街は人の気配もなくただ細やかな小鳥のさえずりに満たされている。

下草にも、植え込みにも、街路のちょっとした果樹にも、透明でキラキラした夜露がひんやりと溜まって、ひっそりとした静けさがそこにある。

うっすらとした霧を含んで爽やかに薫る青草の小道の先、テラスのように作られたウッドデッキのカフェ・ガーデンで、薄手のカシミアを膝にかけたヘンリエッタが、金属製のマグを手に小首をかしげて耳を澄ませていた。

何か変わったものがあるわけではなく、ただ単純に遠く細やかな朝に耳を傾けているだけだ。

小鳥のさえずりに混ざって、ドアを開け閉めする音、何か大きな布を広げるバサバサという乾いた音、早起きな人々が起き出して街がゆっくり活動を始めるこの時間が、ヘンリエッタは大好きだった。

（この時間くらいしか落ち着けないというのも、理由のひとつなんですけれどね）

肩をすくめて透き通った闇色の茶を一口含む。

副ギルドマスターとして多忙な日々を送るヘンリエッタは、ギルドハウスにいる間なかなか気の休まる暇がない。副ギルドマスターといえば聞こえは良いが、低年齢の多い〈三日月同盟〉において、それは（中学校の教諭みたいな意味で）実質保護者職である。肝心要のギルドマスターが「水着ぃ、今年デザインの可愛い水着ないとお出かけできへんもん。絶対、デブゆわれるぅ」と涙ぐみながらぐるぐる回るような有様なのである。

とはいえ、そんな負担にヘンリエッタが辟易としているかというと、そんなこともないのだ。

〈ハーメルン〉の騒ぎがあった直後ならともかく、いまはそれから時間もたち、ギルドの中は落ち着きをみせている。みんなやりたいことはあるだろうが、生活の場所を維持するための雑用は分担されたと言ってよいだろう。

そもそも〈サブ職〉によって職能が決められているのがこの異世界だ。〈料理人〉が厨房を預かり、〈売り子〉が渉外を担当し、戦闘職は外へ素材を採集に行く。年齢的にも、一番下の

子どもたちをその少し上が面倒を見て、年長者が子守としてそれとなく見張るという流れができている。
保護者のようなとは言うが、ヘンリエッタが何もかも取り仕切って指示を出さなければ何も進まないという状況ではない。こんなにも忙しいのは、誰もが（ことによるとマリエールすら！）ヘンリエッタに報告をしたがるからなのだった。ヘンリエッタ自身は、それをなんだか奇妙なしきたりだと思っているのだが、ギルドメンバーはヘンリエッタに作業終了を報告すると、なんだかとても安心をするらしい。
それに気づいたヘンリエッタはギルドに居る間、なるべく執務室にいるようにしているので、実作業が多いというよりは人に囲まれて忙しいというのが、ギルドハウスでのヘンリエッタの立ち位置なのだった。

もっとも、そんなふうに人に囲まれて過ごすのが嫌いではないヘンリエッタでも、たまにはひとりの時間を持ちたくなる。ギルドの仲間にこの話をすると心配をかけるので告白したことはないが、むしろ、ひとりで静かに過ごすのだってヘンリエッタは好きなのだ。
賑やかに過ごすのも、静かに過ごすのも好きだ。
みんなで過ごすのも、ひとりですごすのも。
そんなことを言うならば、フレンチの洒脱なランチも好きだがロシアのこってりしたシチューだって好きだし、ワインで乾杯する女子会だって楽しいが、下町風のおでんと焼鳥だって美味しいのである。
ヘンリエッタにはたくさんの好きなものとちょっとした思い入れがあって、選べない。身の回りにはちょっと気を引かれるものや美味しいもの、良いもの、良い人がたくさんいて幸せだ。
だからこそ何かひとつに執着することができずにいる自分を、ヘンリエッタはぼんやりした人間だと思っていた。てきぱきとしたキャリアウーマンだと周囲に思われていることは知っているが、とんでもない。そんなのはただ技術や要領の問題であって、人間の本質にはなんの関係もない。

世の中にはちょっとした贅沢がたくさんあって、そのひとつはこうして早朝の散歩に出ているいまのような時間である。耳を傾ける遠くの物音は、むしろ早朝の静けさを浮き立たせ、ひんやりとみずみずしいそよ風は季節を教える。
ヘンリエッタは、もう一口黒薔薇茶を飲むと、慕わしい人々や、今日の予定に思いを馳せた。

街で最も早く目をさますのは厨房の関係者だ。
さざめきは次第に炊事の煙となってゆっくりと広がってゆく。
中世的な不便さのつきまとうこの異世界での料理は、とにかく時間がかかりがちだ。温かいものを食べようとすればなおさらで、スープなどは当たり前だが、石窯で焼くパンは数時間を

必要とする。
仲間たちが起き出すそのはるか前に〈料理人〉は目を覚まし、人数分の食事を準備するのだろう。まだ人の気配のまばらな朝特有の、透明な光の中で、その物音がアキバの目覚めを告げている。

早朝の街はとても不思議だ。
光に照らされた街は普段通りの姿を見せるのに、ただ人影だけがない。
異世界に来たから当たり前ではあるのだが――それでも別次元に滑り落ちてしまったようなふわふわとした不安感と、それよりも大きな開放感。
透明な光も、しっとりと濡れる紫陽花も、潤いある空気も、高い場所を飛んでいく名前も知らない小鳥たちも、ヘンリエッタは好きだった。それらは少しずつ大事で、だがヘンリエッタが所有したいのかといえば距離があり、それは寂しくもあったが満足でもあった。

「は？」
そんなヘンリエッタが一瞬硬直してしまったのは、ゾンビ――いや敗残兵――ではなく、凄絶な雰囲気のうつむく青年が通りかかったからだった。
「シロエさま？」

「――え？」
周囲を見回したその青年は、目の下にベットリと隈を刻んだまま、ヘンリエッタを発見し、それから数瞬して気づいたかのように「ヘンリエッタさん」と呟いた。
ええ、そりゃもちろんヘンリエッタですよ、とひざ掛けを椅子の背に掛けた彼女は、路上のシロエに近づくと、有無を言わさず引きずり始めた。テラスのテーブルまで連行すると、重いマントを剥ぎ取り、先程までの席の対面に座らせる。
――また徹夜をして。仕事漬けで！
――歩いてきた方向からするとギルド会館に泊まったわけですね？
――泊まりと言いつつ寝もしないで。
――そういうときは声くらい掛けなさいと、いいましたわよね。
息を吸い込み、言いたいことはたくさんあるのだが、居心地悪そうに座るシロエを見て、ヘンリエッタは諦めた。
目が泳いでいるシロエは拾ってきた犬のようだ。
シブヤの一件以来、恐れられているような気がしてヘンリエッタとしても凹んでしまう。
代わりに彼女は〈魔法の鞄〉からポットを出して、マグカップを増やした。
「ギルドハウスに戻る前に朝のお茶くらいは――」
「お付き合いします」
「よろしい」

「ヘンリエッタさんにはかなわないな」
シロエの観念したようなつぶやきに苦笑したヘンリエッタは、その曖昧な微笑みに胸を突かれた。

言うことを聞かず無茶ばかりする眼鏡の青年は、同じギルドの年少組とはまた違った意味で、ヘンリエッタの悩みの種だ。
ワーカーホリックであるこの青年は、目を離せば平気で何十時間でも、事によれば何百時間でも、惜しみない労働を続ける。グループを作っておけば、自分たちで家事の手伝いまでする（イタズラもするが）子どもたちと違い、そんなシロエを見て血の気が失せたことも一度や二度ではない。

「泊まり込むほど仕事を抱え込んではだめです」
「面目ない」
「ちゃんと聞いてます？」
「聞いてます、聞いてます」
しかし、その一方で、この青年の無茶を強く止められない自分もいたりする。
それはもちろん、この有能な青年が身を削るようなとき、それが必要で――少なくとも効率面から言えば有用であるという点が一番大きい。一番大きいのだが、それだけかといえばそれも違い、多分ヘンリエッタは、シロエが仕事をしている姿が――それも〈円卓会議〉のような巨大組織を切り盛りするために戦っている姿が、好きなのだとも、思う。

人間というのは効率が悪い存在だ。
互いに意思を疎通させ、協働する時、そこには巨大な労力的ロスが存在する。
コミュニケーションとは本来それほどまでに巨大な労力を必要とする行為なのだ。不格好で迂遠で、効率とは程遠い生き物が人間とその集団。それが曲がりなりにも、社会を形作るほど協働できるのは、前例の積み重ねでコミュニケーションコストを軽減しているからに過ぎない。つまり、人の社会は、意思疎通で互いに理解し合っているから回っているように見えて、実はそれぞれの参加者が、前例を思い出しながら孤独な連携で働いているにすぎないのだ。
だから新しい組織を立ち上げたり、事業を立ち上げたり、既存の制度を改革するためには巨大な山脈のような労力が必要となる。
前例が存在しない時、人々の集団はどれだけ頑迷にも愚かにも、そして反抗的にもなるからだ。
参加する各人を説得し、それぞれにパフォーマンスを発揮してもらうというマネジメントは時に巨大土木工事にも匹敵する労力を伴う。
だからそんな戦いに身を投じるシロエを、ヘンリエッタは尊く思う。

多少艶めいたことを言うのならば、そんな戦いの価値を分かる人は少なく、その少数の一人が自分であるという独占欲の充足も、なくはない。

つまり女としての甘さだ。

好感をもっている青年の無茶を許してあげたいと、その姿を近くで支えてあげたいと、そう感じるヘンリエッタのエゴである。もちろんそれは、強いものではない。強い情動そのものをヘンリエッタはそこまでもちあわせないのだ。

しかし含まれていないといえば嘘になるほどには感じている。他人には言えない罪深さだ。

似合わない思考に、ヘンリエッタは少しだけ体温が上がる自分を感じる。だからことさらに歳上ぶった態度で指を振った。

「無茶をする殿方の背中は凛々しいですが、無茶ばかりでは愛想を尽かされますよ」

ヘンリエッタの揶揄をしばらく検討するような表情で吟味していたシロエは、それはないんじゃないかな、と答えた。

「事務作業とか根回しは、僕の趣味だと思われているんじゃないですかね？」

「そんなことはありませんでしょう。――多分」

至極真面目な口ぶりの青年にヘンリエッタは呆れて、いや、その可能性もありうると思い直した。

マネジメントの作業は、他のメンバーからなかなか理解されないものだ。役職としては存在しても、現場の作業スタッフにあれこれ指示を出す口うるさい小姑と思われていることも少なくはない。

実際には作業工程を組み立てるための下調査、メンバーの能力や人間関係の把握、適正な配置、作業の割り振りに進捗管理、ボトルネックの察知とその対処――やるべきことは無数にあり、チームを効率よく運用としようと思えば、その作業量はかなりの大きさになるのだが、作業者から見れば「上司」という言葉でくくられてしまう。

ヘンリエッタも地球世界の勤務企業で実感しているが、なかなかに理解されない職責なのだ。

「ヘンリエッタさんは理解してくれてますし、お手伝いも感謝してます」

そんな複雑な気持ちが表情に出ていたのかもしれない。

いきなり他人行儀になったような、それでもいたずらっぽく頭を下げるシロエの韜晦に、ヘンリエッタもまた「いえいえとんでもない。私はただのアシスタントですもの」と微笑みを返した。

そして「やっぱりね」とか「ちゃんとわかっています」とかいうエクスキューズをつけて、ヘンリエッタは、目の前のこの聡明な青年が好きなのだとこっそり再確認した。

そしてその気持は心のなかにしまっておこうと思うのだ。
好きは好きなのだが、恋愛だと胸を晴れるほどの熱量が、ヘンリエッタにはない。
その話をするのならば、そもそもヘンリエッタは男性というものがよくわからない。中高大学と女子ばかりに囲まれていたし、就職した職場では年上の（というか祖父といえるような年齢の）重役を相手することが多かった。
時に交際をほのめかすような食事の誘いを受けることがないでもなかったが、今ひとつ興味の持てなかったヘンリエッタはそれらを失礼にならぬように断っていた。一部上場で企業風土の健やかな職場は、そうして断っても人間関係の悪化などに結びつかなかったというのも大きい。ヘンリエッタの周囲にいる人々は、ヘンリエッタから見て「人間」だった。もちろん友人として、同僚として、それなりの敬意や好意を感じることはあったけれど、それはあくまでひとりの人間としてであって、性を意識するような相手はいなかったように思う。
シロエは別だ。
ひとりの職業人として、この青年の決断力や誠実さ、実行力をヘンリエッタは尊敬している。
しかしそれだけではなく、シロエのことを思う時、胸の奥が静かに苦しくなるような、古ぼけたラジオから、遠い遠い異国の恋歌が流れるような、そんな感情が湧き出すのも感じる。それはコップの水に僅かにレモンの果汁を垂らしたように、見かけではわからず、栄養的にもなんの価値もないようでいて、でも舌先ではやはり感じ取ることができるような、小さな違いだ。
とても小さな。
マリエールが直継に向けるようなこの人と少しでも近くにいたいというひたむきさも、アカツキが持っているような健気な一途さも、ヘンリエッタは自分に欠けていると思う。。
シロエは好きだし、大事ではある。
でも諦めがつかないほどではない。
そんな自分が恋愛を語るのは僭越でもあると思うし、そんな程度の思いで相手を束縛しようとするのは不実であるとも思う。
だからヘンリエッタはその思いを口にはしない。
シロエは仕事のできる青年で、その能力と果断さに敬意を払っている。幸い自分には限定ジャンルながらシロエを応援できる程度の能力はあるようだ。接点がある、と言ってもいいだろう。それで十分だと、ヘンリエッタは思う。自分のささやかな思いには、ふさわしい報酬。
無言になったふたりは、しばらく朝の静けさを楽しんだ。
朝の光に浸されて、人影のない、無人の街で。
馥郁たる緑の香気と朝露のきらめき。濃い薔薇茶の湯気。

お互い職業人だし、普段は忙しいから、ゆっくりした時間の価値はわかる。シロエの方は気を使って何か話しかけようとしたようだが、ヘンリエッタは目線でそれを抑えた。
気苦労ばかり多いこの青年に、余計な気を使わせたくはない。
恐縮したように苦笑するシロエの襟元を整えてあげたいとヘンリエッタは思ったけれど、それは自重して、目を細める。
とてもおだやかな、オーボエの音を確かめるような、低い鳴き声がした。
通りの上に腕をさしかけるような広葉樹の枝に、鳩ほどの大きさのフクロウが留まっている。茶色い羽には白のラインが矢羽のようにはいった聡明そうな鳥だ。思慮深げに小首を傾げる姿は、眼前の青年に、少し似ていた。
視線の先で喉を震わせるように鳴いたフクロウは、丸い瞳でヘンリエッタとシロエを見返してきた。曇りのない瞳だ。野生動物なのだからそんな知能はないと思うのだが、「良い気候だな」とでも話しかけられたような気分になった。
それほどに人間臭くて、賢そうな表情だったのだ。
「良い子ですよね」
シロエがそんなことを言った。シロエらしくはないような、それでいてシロエらしいような。判断に困る内容だったが、ヘンリエッタは素直に頷いた。
「賢そうです。シロエ様に似ていますよ」
ヘンリエッタも感じていたことだからだ。

通りを挟んだあの枝とこちらので、この静かな朝にたまたま巡り合ったヘンリエッタとフクロウだった。ヘンリエッタは、賢そうで、可愛い、良い子だとフクロウに親近感を抱いた。
朝の気配の中で、それは「好きなもの」として、ヘンリエッタの胸の宝箱にしまい込まれた。
一度出会って、もう二度と出会わないかもしれないが、そんなことは関係なくヘンリエッタが感じる、それは善いものだ。多分、二度とすれ違わないかもしれないその距離感を含めて、敬意に足る価値をヘンリエッタが認めたのだ。
何度か首を傾げたフクロウは、遠方の音に耳を澄ますような仕草を見せると、未練も見せずに飛び去った。野生動物特有の唐突さが、ヘンリエッタに寂しさと満足感をもたらした。

そしてたぶん。
同じテーブルについているシロエも、広い意味ではそうなのだ。
このアキバの街ですれ違っただけの、人生の中の限られた時間を少しだけ共有するだけの、相手を理解しているとか、理解してもらえているとか思い込むだけの――ヘンリエッタのものではない、飛び去るものだ。
でもだからこそ、同じように宝箱にしまい込むのだ。
騒がしい仲間に囲まれて過ごすのも、一人の時間を過ごすの

も、同じように好きな自分だから、シロエがいる現在も、シロエがいない未来も同じように小さな幸せに満足を感じて過ごせる。

ヘンリエッタは半分の寂しさと、半分の満足感に挟まれてそんなことを考えた。

「家に帰ったんでしょうかね」

「そうですね。……そろそろ、お互いギルドハウスに帰りましょうか。早朝デートもいいですが、今日のお仕事が待っていますから」

冗談めかした言葉で、指先だけをシロエの頬に触れさせた。

キョトンと目を丸くする表情が、アオバズクに本当にそっくりだ。

頬を染めて口をへの字に曲げる年下の男の子に、ヘンリエッタはクスクスと笑った。

ヘンリエッタの人生は穏やかに凪いだ春の海のようで、いままで光と祝福に包まれていた。

だからこそその無意識の慈愛を込めて、ヘンリエッタは苦労性の青年を、心のなかではＭｙ　ｄｅａｒと呼ぶ。

親しい、慕わしいひと。

その後にＦｒｉｅｎｄと続けはしない、心のなかでだけ目の前の青年に捧げる、ヘンリエッタの心の欠片だ。

夏の始まりを告げる、真っ黒な雷雲と豪雨を伴う嵐までは。

それを知らないヘンリエッタにとって、世界はまだ穏やかな早朝の静けさの中にあった。

立秋のとある居酒屋にて

山本ヤマネ

視界が一瞬にして燃え盛る赤に塗り潰される。
その炎の嵐が過ぎ去った後の世界は、全ての色を失っていた。
さっきまで共に闘っていた仲間たちはみな力尽き、地に屍を晒している。
私の視界の中で動くものと言えば、ニワトリともダチョウともつかぬ禍々しい容姿をもつ巨大なモンスターだけだ。
その〈一なる監獄のヴァンデミエ〉は頭と胴体にそれぞれひとつだけ持つ目で私たちを見下ろし、まるであざ笑うかのように巨体を小刻みに揺らす。
地に倒れた仲間たちの姿が、ひとつ、またひとつと小さな光に包まれながら消えていく。そして私の視界もモノクロの光のベールに覆われて、ブラックアウトする。
私たちは負けたのだ。
でもこれは日常の風景。今まで何度も何度も重ねてきた、ただのありきたりなひとつの敗北の風景だ。
〈エルダー・テイル〉の〈大規模戦闘〉というのは、そもそも簡単に勝てるようには出来ていない。仲間を集めて、モンスターやギミックのパターンを調べ抜いて、何度も訓練を重ねて。それだけの準備をしても勝率が三割にも届かない。それが〈エルダー・テイル〉のレイドというものなのだ。
ましてや今回のこれは事前情報が一つもない状態でのファーストアタックだ。勝てる方がおかしい。初見殺しのいやらしい罠を予測と勘で回避し続けて、ＨＰ残り５％まで漕ぎ着けたのだ。むしろこれは限りなく勝ったに等しいのではないだろうか。いや勝ちだろうこれは。

「っていうかさあクシ。とりあえずそろそろ戻ってきてくれない？」
「ぐぬ、いや戻るもなにも私は普通だし……」
そんな風に思いにふけっていた私の肩を誰かがつつく。
はっと振り向くと、呆れ顔のヤエが私をジト目で睨んでいた。

今日は日曜日。大学の講義も他の予定もなかったらしいヤエは、なぜか昼前に私の住むアパートへやってきて、私の横で自前の大きなノートＰＣを広げている。
まあ、ヤエは今回のレイドチームのメインタンクをしているわけで、すぐ横で意思の疎通を図れるっていうのは便利だったりはする。しかし、最近ヤエの私物が広くもない私の部屋のス

ペースをどんどん占拠しはじめているのはどうかと思う。
「えー、普通なわけないじゃん。高校ジャージで椅子の上で胡坐かいたままもう数分くらい無言のまま、しかめっ面したりにやけ顔したりしてるし？」
「いやまて、そんな変な顔とかしてないから！　っていうか人のプライベートさらっと喋るな！　みんなにそのまま聞こえるだろ。変に思われるじゃないか！」
　というか今はこの状況の方が問題だ。一部テキストチャットに拘るプレイヤーも残っていなくはないけれど、もう数年前から〈エルダー・テイル〉ではレイドに限らずパーティーを組んでいれば音声チャットで意思疎通を図るというのが普通だ。それが何を意味するかというと、今レイドパーティーを組んでいるギルドの仲間二十四人すべてにヤエのとの会話がそのまま聞こえてしまっているということなのだ。
「お、姉御の再起動完了したっすか」
「まあ櫛八玉の死後硬直はいつものことだからな。今更驚かんさ」
「ジャージ。それもまた一興」
　しかしそんなヤエとの会話が何かのきっかけにはなったらしい。
　今まで静かだったチャットにメンバーたちの会話が戻ってくる。まあその内容は一部アレだったりはするのだけれど。
「よもやの初見撃破かと思ったが、さすがに最後のアレは見抜けなかったなあ」
「惜しかったっすよねえ。うわーっ超悔しい！」
「しかしこれはギルド年間ベストバウト上位ランクインは固いんじゃないかと全俺会議内でも話題沸騰中ですよ！」
「っていうかこれ、もう一回でいけそうじゃね？」
「後続チームの三佐さんからも割り込みリトライＯＫ出てるっすよ。行っちゃいます？」
　そもそも私たちのチームは、レイドのギミックを暴き出す為の先遣部隊だ。後続には私たちの得た情報を受けて他のギルドよりも早いクリアを目指す本命チームが複数控えている。本当だったらその後続チームにすぐにバトンタッチするところなのだが、私たちが思ったよりも健闘したこともあって、連続で再戦というのもアリと、山ちゃんかクラスティ君あたりが判断したのかもしれない。
「ごめん、私この後バイトなんだよね。そろそろ出る準備しないとだからもう一回は無理かなあ」
　しかし、レイドというのは複数のプレイヤーの時間を少なからず拘束してしまう遊びだ。許可が出たとしても、出番待ちをしている他のプレイヤーをこれ以上待たせるのは忍びない。それにバイトに出なくてはならない時間までもあと少し。勤労大学生はゲームばかりしていると干上がってしまうのだ。
「あーじゃあ仕方ないっすか。でもこれじゃクシさんはまたノ

ンクレジットっすねえ」
「それはいいよ、私はそっちには拘ってないし。それより〈ハウリング〉とか〈茶会〉に持ってかれるほうが嫌だしさ」
「そうっすねえ。特に〈茶会〉が取ると妙に掲示板とか荒れるっすよねえ」

クレジットというのは、ゲーム内での称号のようなものだ。
サーバー内で一番最初に〈大規模戦闘〉を一番最初にクリアしたチームメンバーの情報は、そのギルド名と共にゲームデータとして保存され、大々的にインフォメーションされる。このレイド初回撃破に自分の名前が刻まれるということは〈エルダー・テイル〉のプレイヤーにとっては一番わかりやすい上級者の証。特にレイドに参加するプレイヤーにとっては特別なステータスなのだ。
まあ私はいつも検証が進んでないレイドにまっさきに挑んで全滅する役ばっかりをやらされるせいで、このクレジットというやつにはほとんど縁がないのだけれど。

「ってなわけで、動画担当は検証班にファイル送信。あとのメンバーは掲示板の方に気付いたこと書きこんどいて。んでもって解散、おつかれさまー！」
「了解。状況終了」
「おつかれー」

みんなの解散の挨拶を聞きながら、私は椅子に座ったまま大きく伸びをする。
こうやって定期的にレイドに挑戦することはもう生活の一部になってしまっているし、ゲーム仲間とのささいな会話は楽しい。とはいえ、数時間もパソコンの前に座りっぱなしでは身体の節々が錆びついてしまう。名残惜しくはあっても、このくらいで引き上げるのが丁度いいのだろう。
「っていうかバイトっすか。クシさんなんのバイトしてるんです？」
「クシのバイト？　えっとねー、飲食店みたいな？」
「おお、飲食店！　ファミレスとかの制服は萌えっすよね！」
「最近は居酒屋チェーンとかも可愛いのあるよなあ」
「俺会議内の要望としては圧倒的票差でアンミラきぼんぬ！！」
「メイド喫茶ＭＡＪＩＤＥ！？」
「いやちょっとまてヤエ、また勝手に個人情報晒しやがって！っていうか勝手な妄想するなお前らぁ！」

もう少し友人は選んだほうがよかったのかもしれないと、ときどき思ってはしまったりするのだけれど。

「なんていうか、そんなみんなのドリームぜーんぶ裏切る格好だよねえ、これって」
「うるさい。私はここに働きに来てるんだ。服なんて機能性だろ。ジーンズにTシャツのなにが悪い」
「女子力皆無」
「ぐぬ」
「上下うにくろなのバレバレ」
「ぐぬぬ」
就業時間五分前に店に入り、私の仕事着であるマグロのアップリケのついたエプロンをかけて厨房へ出ると、目の前のカウンターにはヤエが座っていた。というか、このヤエはアパートを出たあと、なぜか一緒に私のバイト先であるこの店までついてきてしまったのだ。
他のお客様といえば奥のテーブル席に数人。近所のキャバクラのオーナーである愛子さんをはじめとして見知った顔の常連さんばかりだ。いつもとちがって小奇麗なポロシャツを着ているあたり、恒例となっているゴルフコンペの帰りなのだろう。
ここは都内の某歓楽街の一角にある小さなお店、大衆割烹「梟の塒（ふくろうのねぐら）」。
割烹なんて名前はついているけれど、実際のところはちょっと料理とお酒にこだわりのある居酒屋といった態の店で、二年ほど前から週に数回通う私のアルバイト先だ。
「崎本さーん、えっとねーとりあえずイワシのガリ巻き。それからお酒は〈夜明け前〉をおねがいしまーす」
「わかった」
どうにも納得がいかず唸る私を尻目に、ヤエはメニューも見ずに注文を投げる。崎本さんもそれが当然のように答えを返して手を動かし始める。
「っていうかヤエ。なんで妙に慣れてる感じなんだ？」
「えーだって、雰囲気ちょっとレトロで好みだし、崎本さんの料理おいしいんだもん」
「あら、ヤエちゃんはここのところよく通ってくれる常連さんよ？」
「あ、女将さん、こんばんわー」
「まじか。いつのまに……」
ヤエの声に奥から出てきたのは和服姿のお姉さま（と言わないと機嫌が悪くなる）、この店の女将さん。お姉さまは言いすぎとしても年齢不詳で妙に所作に色気のある私の美人な雇い主様だ。
「ほらほら、ぼうっとしてないでお通しとお酒、出してちょうだい？」
「しっかりお願いねえ、クシじゃなかったユカちゃん？」
「りょ、了解……」
女将さんはともかくヤエにそんなことを言われるのはものす

ごく癪に障るのだけれど、悲しいことに今の私は給金の奴隷だ。ちょっとばかり客の性格が悪かったとしても、よほどのことでなければ逆らうことはできない。

私はとぼとぼと厨房を出て、妙に勝ち誇った表情でふんぞるヤエに料理とお酒を配膳する。

そして再び厨房に戻ると、今度は崎本さんが眉間にしわをよせて腕を組み、直立したまま硬直していた。

「あ、そうそう。ユカちゃんが来たら意見を聞きたいと思ってたのよねえ。これ、どうにかならないかしら？」

彫像のように固まったまま動かない崎本さんのかわりに答えてくれたのは、おなじく困り顔で腕を腰にあて首をかしげている女将さんだ。その二人の視線はカウンターの上の平たい竹かごにそそがれている。その竹かごに乗っているのは細い茎の先にギザギザとした葉が分かれて生える野菜。たぶん野菜だ。

「えっと、これがどうしたんです？」

「愛子さんの差し入れなのよ。そうなんだけどねえ……」

「パクチーよ！　ユカちゃんなら知ってるでしょ？　流行ってるし！」

突然、厨房に乱入してきたのはテーブル席で他のお客さんの歓談していたはずの愛子さんその人だ。

愛子さんは私がバイトに入る前、この店がオープンしてすぐからの古い常連さん。それだけ長い付き合いともなると、もう色々と規格外だったりする。

店が予想外に忙しくなってしまったりすると勝手に私のホールの仕事を手伝ってくれたりすることもあれば、今日みたいに他のお客様が少ないときには厨房に勝手に入ってきて冷蔵庫を覗き込んでいることもある。とはいえ本当に邪魔になることはしないあたりは、さすがに自分でも店を持ってる人なのだなあとは思うけれど。

「なんか近くの農場で作り始めたとかでね、ゴルフ場の支配人にたくさん持たされちゃったのよ。で、せっかくだから持ってきたの。ってわけで、それで何か一品オネガイねー」

炎天下でのゴルフの後でいつもよりお酒がまわっているのだろうか。今日はずいぶんとご機嫌によっぱらっているらしい。だいぶ顔を赤くした愛子さんは、それだけ言うとふたたび奥のテーブル席へと戻って行ってしまった。

厨房に残された私と女将さんは目をあわせると、二人そろって肩をおとしてため息をつく。

崎本さんは相変わらず息をしているかも怪しいくらいに硬直しているので、現状では役に立ちそうにもない。

パクチーまたは香菜（シャンツァイ）というのは、見た目はセリに少し似ている葉野菜だ。

いま目の前にあるような青々とした葉菜は主にアジア圏で、乾燥させた種子などはコリアンダーと呼ばれる香辛料としてヨーロッパでも使われるなどしていて、世界各地で古くから食用とされてきた。らしい。

だがこのパクチーというのは和食では用いられることがなく、日本では最近まであまり馴染みがない食材となっていた。料亭出身でガチ日本食畑の崎本さんや女将さんが扱いを知らないというのも、まあ頷ける話ではある。

とはいえ私だって、ネトゲに入れ込むさえない引きこもり気味の貧乏学生だ。

ネットニュースでパクチストなんて言葉を目にするくらいに流行っているというのは知ってはいても、実際に口にしたことは数えるほどしかない。

ふとカウンターに目をやれば、ヤエがひとりおちょこを手に日本酒をちびりちびりとやりながら、こちらを興味深そうに眺めている。

そういえばヤエは見た目こそ中学生じみているが歳は私と同じで飲酒可能年齢。今日の言動からもわかるように結構な食道楽だ。なおかつこんなでも父親はどこぞの会社の社長だなんていうお嬢様。私なんかよりもずっと外食偏差値が高い生活をしているはずだ。

私の視線で意図に気付いたのだろう。ヤエも私たち続いて、カウンターの上のこのやっかいな食材に目を向ける。

「パクチーねえ。うーん、たしか四川料理とかタイ料理とかにちょっと乗っかってたりとかはしてたかなあ」

「でもああいう唐辛子マシマシな料理はうちでは無理だぞ」

「だよねえ……」

私よりも世の流行には敏感な筈のヤエも、指を顎にあてて首をかしげる。

「それ以外だとすると、ベトナム料理とか。ほら、フォーガーとかもパクチーがわさっと乗ってるじゃない？」

「あー、あれは美味しかったなあ」

ヤエと一緒に四谷あたりのベトナム料理屋に入ったことを思い出す。フォーというのは米粉から作られた麺をだしに浮かべるベトナム版のラーメンのような料理だ。ガーというのは鶏のこと。ちなみに具材が牛肉だとフォーボーになる。

「ああ、そうか。だったら、焼き物用の鶏のささ身を酒蒸しにして、パクチーを添えてサラダとかできそうかな。ベトナム料理はけっこうシンプルな味だったりするし、変にエスニックな味付けとかしなくてもうちのダシ味にも合うんじゃないかなあ。どう？　崎本さん」

「そういうものか……」

私の呼びかけで、いままで完全に停止していた崎本さんがみしりと再起動する。

明確な答えが返ってこないのは、納得していないというよりはあまりぴんとは来ていないという感じだ。もしくはまだ起動プロセスの途中なのかもしれない。崎本さんはいつもとは違って眉間のしわはそのままに、なんだか少しぎこちない動作で厚手の雪平鍋を手に取る。

その鍋で日本酒をひと煮立ち。少々の塩と鶏のささ身を加えて蓋をしたら、火をとめてある程度冷めるまでそのまま放置。こんな簡単な手順だけれど、よくネットレシピなんかで見る電子レンジを使ったものとくらべると味も柔らかさも全然違うというのは、この店にバイトに来るようになって初めて知ったことだ。

こうして出来たささ身の酒蒸しを一口大に割いて、適当な大きさに刻んだパクチーと和えて大皿に広げる。鶏ダシをゼラチンで固めたジュレと細切りの唐辛子が乗っているのは、わからないなりの崎本さんのアレンジといったところだろう。

パクチーの緑、ささみの白、ジュレの琥珀色に唐辛子の赤と、皿の上は想像していたよりもずっと色鮮やかだ。

「鶏とパクチーのサラダ、とりあえずあがった。んだがなあ……」

「見た目はすごく美味しそうじゃない？」

「うう、多分だいじょうぶ、なんじゃないかな……」

崎本さん、私、ヤエの三人がカウンターの上に置かれた大皿を見下ろす。

客であるヤエだけは興味津々といった顔をしているけれど、料理を出す側である私と崎本さんはそうもいかない。つくったのは崎本さんだったとしてもアイデア出しをしたのは私だ。妙なプレッシャーに胃のあたりがきゅっとする。そういえば今日は昼からなにも食べてないし。

「まあ、とりあえず食べてみましょうよ」

女将さんがカウンターを囲む面々にサラダを取り分ける。小皿にひとくち盛られたそれを、私は祈るような気持ちで口にする。

ふんわりとした口触りの鶏のささ身、その淡白な中にも旨みのある味に、しゃきっとしたパクチーの食感。口に残るのは癖がありながらもどこかさっぱりとしたパクチーの風味と唐辛子の辛さだ。

「あ、これ美味しい……」

「あらあら、悪くないじゃない」

「私もこれ好きかもー」

顔を上げると、女将さんも手のひらで口覆うようにして、驚いた顔をしている。ヤエは笑顔で小皿を差し出している。それはおかわりの要求なのか。

「なるほど。これは薬味だと思えばいいんだな」
私たちと同じく小さく取り分けた皿からサラダを口にした崎本さんも、小さく頷く。
最近の流行りでは、このパクチーを増し増しでなんていうのを宣伝文句にしている店も多いと聞くけれど、この味はちょっと独特で強すぎる。本来は薬味や風味付けに使うのが正しいのだと思う。特にうちのように素材の味を大事にする和食系の店の料理として考えるなら、味のアクセントとして使うくらいでないと他とのバランスがとれないだろう。

「薬味、薬味かあ。だったらなめろうに足してみるとかはどうかなあ。ちょっとナンプラーとか足してレモンをしぼってとかしたら、なんちゃってエスニック料理にならない？」
「まだよくわからんが、やってみるか」
私の提案に相変わらず少し首をかしげながらも、崎本さんが再び手を動かし始める。
居酒屋の定番メニューにもなっているので知っている人も多いとは思うのだけれど、なめろうというのは千葉あたりの郷土料理。鯵とか鰯なんかの青魚を三枚におろして薬味と味噌などの調味料とあわせて、そのまままな板の上で粘りが出るまで包丁でたたくっていう豪快な漁師料理だ。
カウンターの冷蔵ケースから取りだされた三枚におろされた鯵を数枚。それから大葉に茗荷にわけぎといつもより量が多めの薬味。さいごに今日の問題児であるパクチーを刻んで少々。
いつもはここで作り置きの味噌ダレが登場するのだけれど、今日に限っては慣れない薬味や調味料を使うっていうこともあって、慎重に味のバランスを取っているのが横から眺めていてもわかる。

「鯵とパクチーのなめろう、とりあえず食べてみてくれ」
そう言う崎本さんの手には、白地に青の絵付けが美しい伊万里の小皿。飾りにパクチーの葉の部分が添えられたそれは、見た目には普通のなめろうのように見える。
ちゃんと盛り付けられたそれはとりあえずヤエに差し出して、私は崎本さんがひとくち醤油皿に残しておいてくれた分を口に運ぶ。

それはよく知る鯵でありながら、あまり良く知らない不思議な味の料理だった。よく錬られた鯵と味噌の中にふわりと広がるナンプラーと柑橘の香り。これはきっと柚子だろう。パクチーは主に茎の部分が細かく刻まれている。茗荷などの他の薬味とも上手くマッチしていて、味の主張はあってもやりすぎ感はない。

「すごい、美味しい。和食だけど和食じゃなくて、なんだかエスニックだ……」

「うちで出すにはちょっと味が強めだけど、良いんじゃないかしら、これ」
「まあ、悪くはないな」
女将さんと崎本さんの表情を見る限り、どうやら二人の評価も悪くはないらしい。リクエストされたとはいえ、その場の思いつきで二品も崎本さんに料理させてしまった私としては、この結果にやっと肩の力が抜ける思いだ。

「うーん、うーむ……」
そんな中、カウンターでちびりとなめろうをつまみ、ちびりと日本酒を口にしたヤエが首をかしげる。
「ん、どうした？　これ私としてはすごく美味しいと思うんだけれど、ヤエの好みじゃなかったか？」
「いや、なめろうは美味しいのよ。なんだけれど、なんだかお酒の味がね、抜けちゃった感じなのよねー」
「あーそれはそうか」
おちょこを手に口をへの字にまげるヤエのその感想は、たしかにごもっともだと思う。

ヤエが今、口にしているのは<夜明け前>という長野のお酒。どこかで聞いたことがあるようなこの名前は、島崎藤村の長男さんから許可を頂いてつけたものらしい。この名前を頂いたからには丁寧に心をこめて作っているとかというのを酒蔵のウェブサイトでも読んだことがある。そして、その文句に恥じぬ、甘さと酸味のバランスが良くてとても美味しくて、なおかつ値段もお手頃なお酒だ。
しかし、この癖の強い料理に合わせるとなると、バランスの良さが仇となってしまう。料理に味が負けてしまうのだ。というかこの料理に合わせる日本酒となると、お酒のほうもだいぶとんがったものになると思う。

「じゃあこういうのはどうかしら？」
私とヤエの会話を聞いていたのだろう。女将さんが冷蔵庫から四合瓶を一本取り出して、私たちの前に立てる。
「鬼、辛……？」
「ええ、これ私も知らないお酒だ……」
無手無冠 超辛口生原酒〈鬼辛〉。ラベルは白地に明朝体のすごくシンプルなもので、それがなんだか逆に新鮮に感じてしまう。
「ほら、余所の居酒屋さんでも見る〈ダバダ火振り〉っていう栗焼酎ってあるでしょ。あの酒造所さんのお酒なのよ。ちょっと偏った味だからなかなか普段は出せないんだけど、この料理なら合うと思うわよ？」
そう言って四合瓶をかかえてしなをつくる女将さんは妙に色っぽい。普段見慣れている私でもちょっとやられてしまいそうだ。案の定、ヤエなんぞはふにゃりとした目で女将さんの前

にお猪口を差しだしている。
「はい、ユカちゃんもひとくち。お勉強ね」
そんな女将さんにそういわれてしまっては逆らえる筈もない。逆らうつもりもない。私は小ぶりのお猪口に少し入れられたそのお酒で、ちろりと舌を湿らせる。
「うわ、なにこれ。辛口？　っていうかなんて言うかなにこれ……」
「生原酒ってのもあるけど、とにかく味がすごく濃いんだ。んでもって辛口ってこういうのもありなのか……」
そして私は絶句する。
辛口の日本酒というと、ひとくち目の舌触りが強くて、でも後味なく水のように流れていくお酒と言う風にこれまでは思っていた。でも「超辛口」と冠するこのお酒の味はそんなものではぜんぜんないのだ。
確かに原料である米由来の甘さみたいなものは殆どない。そのかわりにあるのは甘さ以外の全部とでもいうような濃厚な風味だ。それが一瞬で口の中に広がって、そして流れ去っていく。残るのは確かにこれはお米の酒だったのだと主張するかすかな香り、それをほんの少しだけ残して全てを塗りつぶしてしまう。そんなお酒だ。
「あ、パクチーの後味がきれいさっぱり消えてる……」
「確かに、これならぜんぜん負けないかも。っていうかこれ中華とかイタリアンとかのコッテコテな味付けの料理でも勝っちゃうお酒じゃない？」
「でしょう？　っていうわけでヤエちゃん、ご注文とかどうかしら？」
「はい！　これ、ください！」
間髪いれず、ヤエが大きな声をあげる。
ゲーム仲間のうちでは誰よりも口が回って〈アキバの詐欺師〉なんて陰口を叩かれることもあるヤエだけれど、リアル接客業の本職は格が違う。そんな風景を一歩身を引きつつ眺めながら、私はおちょこの底に残ったお酒をちろちろと舐める。
そんな風にぼうっとしていると、店の奥でテーブルだか椅子だかがガタリと大きくなる音がした。
「ちょっと！　そっちでばっかり楽しんでないで、こっちにもその料理ちょうだいよ！　もともと私のリクエストなんだからね！」
振り向けば、奥のテーブルから愛子さんが身体を乗り出して、ふくれっ面を覗かせている。
「りょ、了解！　ただいま参りますう！」
私は慌てて背筋をのばし、出来上がっている料理を急いで愛子さんの元へと届けるのだった。

そんなわけで一通りの注文をさばききれば、私と崎本さんにとってはちょっとの休憩タイムだ。
うちのようなほぼ常連ばかりを相手する居酒屋なんてものは、半分はお酒と料理、もう半分はほろ酔い気分の会話を楽しむ場所のようなもので、厨房の仕事量も山あり谷あり。こうやって手があく時間も少なくはないのだ。

「――って話になったんですよ。ほら崎本さんはぴしっと白衣だし、女将さんも綺麗な和服姿なのに、アレってないじゃないですかあ」
「そうねえ。私もね、ユカちゃんは飾りっ気なさすぎって気にはなってたのよねえ」
「あら、だったら私の若いころの服とかもってこようかしら」
「さすがに愛子さんのだと違う方面の店になっちゃうわ」
一息ついてふと気づけばカウンターに座っていたはずのヤエは、いつのまに愛子さんたちの座る奥のテーブル席に席を移し会話の輪に加わっている。女将さんも同じ輪の中だ。
愛子さんをはじめとするテーブルの面々は、ヤエにとってはひとまわりもふたまわりも歳が上な人たちだというのに、そんなものはなんの障害にもならないらしい。相変わらず彼女の図々しさというか社交能力は半端ない。
「ってなわけでどーん。こういうのとかどうです？ いま通販でもいろいろあるんですよー」
そのヤエが持ち出したのだろう。タブレットに表示させたなにかの画面をテーブルを囲む皆がなにやら覗き込んでいる。
「あら、この紅葉色の作務衣とか可愛いわねえ」
「こっちのミニスカ浴衣とかどうだ？」
「このスリットどーんなチャイナとか着させたいのう」
「それ、ただのご隠居の趣味じゃねえか」
「この露出度高いのにしましょうよ」
「だから愛子さん、うちは大衆割烹なのよ？ それだと風俗店になっちゃうわよ」

まあそれで常連様たちが楽しく店での時間を過ごしてくれるのなら私としても有り難いことではあるのだけれど、聞こえ来る会話の端々には何やらきなくさい内容が含まれているような気がしてならない。不安ばかりが募る。
「ねえ、崎本さん。なんかみんなの様子が怪しくない？ 私どうなっちゃうのかなあ？」
「俺に聞くな。俺じゃああれは止められん」
「ですよね……」
厨房に二人、完全に取り残された形となった私と崎本さんは、大きくため息をつく。
そしてその悪い予感は的中する。変に盛り上がってしまったおかしな雰囲気はそのまま冷める事がなかったのだ。

一度店に戻った愛子さんが山ほど抱えてきた妙に露出度が高い衣装やら、女将さんの和服やら、あげくには古書店のご隠居の孫娘の趣味だとかいうコスプレ衣装などが店には積み上げられ、その全てを強制的に着させられるという地獄のファッションショーで、阿鼻叫喚の週末の夜はふけていったのだった。

「ていうかクシ、背が高すぎるのよ。どれもこれもひざ上丈になっちゃうじゃん」
「うっさい、なりたくてこの背になったわけじゃないわい！」
「次はこれじゃよ、はよう」
「嫌ですよ、なんでスク水とかあるんですか！」
「そうよねえ。なんかどれもちょっとイケナイ雰囲気よねえ」
「っていうか愛子さんの持ってきたのはそもそもアウトなのばっかりですからっ！」

ここは、大衆割烹「梟の塒（ふくろうのねぐら）」。
最近なんだか色々な変なものに侵食されつつある、私のアルバイト先なのである。

※〈鬼辛〉はアルコール度数が２０度以上ある強いお酒です。量とペースには十分注意してお楽しみ下さい。

あとがき

◆はじめまして、大きな愚と申します。主に列島生物図鑑を担当していたセルデシア・ガゼットがこの春をもって全３０刊の任期満了。得意分野のモンスターネタを引っ提げての初参加となりました。何故か某子爵のイラストが表紙候補に……（大きな愚）

◆初めまして／お久しぶりです。さわめです。さて（つづく）ってなにやってんですかねわたし。今回はヤマトとは縁もゆかりもない西の果て、華やかなりし〈花の都〉を舞台に新シリーズ開幕です。工房の面子にプロットを見せたら絶対収まらないって言われて、書いたら結局こうなりました。続きはなろうで！の予定です。ドワーフ施療神官の奮闘にご期待ください。（退路を断つスタイル）（さわめ）

◆エッゾいいですよね。ウニとかジンギスカンとかホタテとか。カロリーは正義だ！　旗（脂肪フラグ）を掲げい！　僕はエッゾ民の血もちょっぴり引いてるので、この地がご贔屓だったりするのでした。今回の主役「むちお」ですが、アニメ一期の設定資料集に登場してます。お持ちの方は８７ページをご覧あれ。意外とかっこいい彼が見られますよ！（津軽あまに）

◆今回は梅子の話かきました。割りと重要キャラなんですが、色々都合があって（主に尺とか）本編にはろくに出番もないのです。キャリアウーマンで眼鏡美人で甘やかしお姉さんもできるし叱咤激励も出来てとかこのひと完璧超人（無量大数）なんではないでしょうか。趣味キャラと言われても否定できません（橙乃ままれ）

◆じつは日本酒いまだよくわかってません。米、酒蔵、季節、作り方等々変数多すぎ味の幅広すぎ。おまけに地産地消なものが沢山で運良く好きな味に出会えたとしても一期一会だったり。沼です。ちなみに今回名前をお借りした〈夜明け前〉は色々な複合施設に店舗のあるヴィノスやまざきが取り扱っています。〈鬼辛〉のほうは高知県アンテナショップに行くと買えたりします。機会があればぜひおためしあれ。（山本ヤマネ）

◆奥付：
「まかないごにんまえ
七面体工房ログ・ホライズン短編集２」
制作：七面体工房
印刷：ＰＩＣＯ（プリンティングイン株式会社）発行
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗｐｉｃｏ－ｎｅｔ．ｃｏｍ

01　ＩＮＤＥＸ
02　「カナコッペ」山本ヤマネ
04　「こちら古書店ひよこ堂」津軽あまに
12　「十九歳の冬ごもり」橙乃ままれ

ハーイみんな、こんにちは☆　かわいさヤマト全一アイドル てとらちゃんだゾ☆

この本は、『まかないごにんまえ』『虹色サイドキックス』のおまけとして作られた本だよ。『まかない～』シリーズがそもそもおまけ本みたいなものなのに、おまけのおまけとか意味不明だよね♪　でもお仕事を振られたからには、てとらちゃんがんばって紹介しちゃう！

『カナコッペ』、『こちら古書店ひよこ堂』、『十九歳の冬ごもり』はそれぞれ山本ヤマネ、津軽あまに、橙乃ままれの書き下ろし短編小説！　『まかないごにんまえ』に入りきらなかったこぼれ話、中身は読んでのお楽しみ！

突発座談会『嫁にするなら誰？ｉｎ アキバ』は、そのまんま、「ログホラに登場する女子キャラのなかでお嫁さんにしたいのはだ～れ？」っていうテーマで（原作者含む）スタッフが好き勝手しゃべってるよ。みんながお嫁さんにしたいのは誰かな？　……うん、そう！　てとらちゃんだよね！　知ってた！！　きっと座談会でもボクの話題で持ちきりなのは確定的に明らかだよ！

よーし紹介はここまで！　残りの尺はボクの新曲『じゅうまんまいのうろこ！』を――えっ、もう終わり！？

カナコッペ

山本ヤマネ

彼女はきまって金曜日の閉店三十分前きっかりにやってくる。そしてチーズケーキをひとつ注文する。

しかし私の店〈ダンステリア〉は、自慢ではないがアキバでも一二を争う人気店だ。おまけに金曜日の夕方ともなれば彼女のお目当てが残っていることなど殆どない。

だから彼女はほとんど毎週、空っぽになったショーケースと、オープンテラスで軽食や会話を楽しむきらびやかな女性たちをしばし眺めたあと、手ぶらでアキバの雑踏へと消えていく。彼女が店のカフェのテーブルでケーキを前にしている姿を見た覚えなんてほとんどないのだ。

そもそも彼女はどんな子だっただろうか。背は小さかったように思う。〈冒険者〉ではあった筈だけれど、どんな容姿であったかがさっぱり思い出せない。店員の子らに尋ねても明確な言葉は返ってこない。

これは驚くべきことなのだ。

〈エルダー・テイル〉のプレイヤーの男女比は7対3くらいだと言われている。女性〈冒険者〉というのはアキバにおいてさほど多いものではない。それがなくとも女性というのは男性に比べてコミュニティを強固に形成しやすい性質を持っているのだと思う。

そんなアキバの女性〈冒険者〉のほとんどが週に一回は訪れると言われているのが、私の経営するカフェ〈ダンステリア〉だ。

そういった理由もあって店長である私の交友関係はアキバでも一番といえるほどに広い。私の元にはなにをしなくともアキバの女性たちの様々な情報が流れてくる。

少なくとも友人を二人はさめば、私の知らない女性〈冒険者〉は居ない。

そうだった筈なのだから。

「チーズケーキは、まだありますカ？」

「あーごめんなさいね。今日はもうケーキは全部はけっちゃったのよねー」

いつものような金曜日。いつものようにほぼ満員となっている店内。それは雑踏にまぎれて聴き逃してしまいそうな、とても小さなやりとりだった。

でも今日はぜったいに逃さないと決めていた。だから気づくことができた。だから私は給仕の仕事の手を一旦とめて、店の入口へと急ぐ。

「待って。ちょっとまってください、お客様！」

私の上げた声に、店を出ようとしていた彼女が振り向く。

クラシカルなデザインのメイド服に、百五十センチもなさそうな小さな身体。長めに切りそろえられた前髪で目が隠れていることも相まって、どこか人形のような不思議な雰囲気を感じさせる。そうだ彼女だ。どうして忘れてしまっていたのだろう。

私はいちどバックヤードへと下がり、このときのために準備しておいた一皿を手に取る。そして微動だにせず店の入口で待つ彼女の前にそれを差し出す。

「はい。今日はあなたのために一つ取り置いておいたの。チーズケーキ・ニューヨークスタイル。新作なのよ?」

「……えッ」

人形のようだと思っていた彼女の顔に紅がさす。前髪で半ば隠れたその眼が大きく何度もまばたきする。半開きになってしまった口もとからは、いまにもよだれが垂れてきてしまいそうだ。

「……感謝いたしまス、可奈子様」

ずいぶん時間が経ってから、彼女は小さな声をあげる。そう言いながらも、彼女の視線はガラス製のケーキドームから透けて見えるきつね色に釘付けだ。

「その感謝につけいるようで悪いんだけれど、ひとつお願いをしてもいいかしら?」

「はい。このチーズケーキの対価ということであれば、出来る限りのことをすると、コッペリアは約束いたしまス」

彼女は顔を見上げて私と目をあわせると、口元を引き締めて、強い口調で答えてくれる。

なんだろうこの可愛い小動物は。なんで私は彼女に「人形みたいな」なんて印象を持ったのだろう。

とても嬉しくなってしまった私はちょっと大げさに一礼したあと、彼女の前に片手を差し出す。

「そんな大したことじゃないのよ。このケーキを食べる間、私も同席させてもらいたいの。私、あなたのことをもっと知りたいみたいなのよね」

差し出した私の手に、ちょこんと手をあわせる彼女は、私を見上げて不思議そうに首をかしげる。

「私の自慢のお店のとっておきの席を用意したのよ。ずっと通ってくれているお得意様にはちゃんと笑顔でいてもらわないと、この可奈子様の沽券に関わるってもんなのよ!」

それが私に小さくて可愛い友達が新しくできた瞬間だった。

それから毎週金曜の閉店前のひとときは、カナコッペのひみつのチーズケーキタイムになったのだ。

こちら古書店ひよこ堂

津軽あまに

「お、お邪魔しますー……」

おずおずとした声に遅れて、からん、と扉につけたベルが鳴る。

アキバの街外れにある雑居ビルの一角〈変人窟〉。多くの生産系ギルドが詰めている建物だけれど、それにしてはこの場所を訪れる客は多くない。

理由は簡単、入居しているギルドが軒並み、マニアックでニッチな集団ばかりだからだ。それでビルについたあだ名が〈変人窟〉。ド直球すぎて泣けてくる。まあ、その一角に陣取っている私からして、否定する要素も皆無なんだけれどね。

とりあえず私は並んだ本棚にはたきをかけていた手を止めると、ビルの入り口へと駆け寄った。

そこにいたのは、かわいらしい一人の女の子。はっきりいって、あんまりこの場所には似つかわしくない娘さんだった。

「はいはい、ようこそ〈変人窟〉へ。どちらへ御用かしら？」

とりあえず私は一番彼女が向かいそうな候補を案内する。

「多々良ちゃんのところの〈アメノマ〉なら地下よ。あの子、真面目すぎるところがあるからあんまりごりごり値切りとか一気に距離つめて世間話とかしようとすると困っちゃうから手加減してあげてね」

今〈変人窟〉で一番お客さんが多いのが、ドワーフの〈刀匠〉多々良ちゃんの運営している刀専門の生産系ギルド〈アメノマ〉だ。とりあえずここを紹介しておけば3人に2人くらいは問題ないくらい。だけれど、その娘さんはぷるぷると首を横に振った。

「い、いえ、別に私は刀を買いにきたわけではなくてー」

あら、違ったのね。最近あの娘、女の子の友達が少しずつ増えてきたから、てっきりその関係だと思ったんだけど。セタ君にしか心を開いてなかった昔が嘘みたい。そういう意味ではあの〈殺人鬼事件〉も悪いことばかりじゃなかったのかもね。まあ、それはさておき。たしかに、目の前の娘さんの装備はいかにも魔法使い系。言われてみれば刀を使うようには見えない。

「それじゃあ、〈魔装院ヴティクリウム鳳凰〉のお得意様？そういえば新モデル……〈赫奕たるルフシの隻翼〉のお披露目が今日だったかな」

〈変人窟〉で一番の客数を誇るのが〈アメノマ〉だとすれば、一番の売り上げをたたき出していると思われるのが、服飾ギルド〈魔装院ヴティクリウム鳳凰〉だ。……うん。よく舌噛まずに言えたもんだ。慣れって強いなあ！　†朱竜蒼雀†くんら、中二……もとい退廃的美的感覚の持ち主が集まり、オサレ……独特なデザインの服を発表して、同好の趣味人たちや一部の

〈大地人〉貴族に人気を博している。
たしかに元の世界だとオサレすぎるけど、スマート美形が増えた今ならああいう服も眼福よねー。わたしも何度服装描写の監修を手伝ってもらったか……。着用用ってより、観賞用って感じかなあ。いや、作ってる本人たちは実用性も必死で考えているから、そう割り切るのも失礼かもしれないけどね。ふむ。いわれてみれば、目の前のこの娘も、ふわふわ天使系の〈怜悧にして儚泡のミオスティス〉シリーズとか、似合うんじゃないかしら。
「あんなにかっこいい服なんて私みたいな地味なキャラには似合わないですってー！　ああいうのはもっと、すらっとしてしゅっとした人にしか許されないガイアが輝けと耳元で囁いてくれるような人向けのなんかだと思いますー」
ほほう、この娘わかってらっしゃる。そうよね、しゅっとした細身の美形さんがあれを着た日には正直眼福もいいところで一日頑張れる気がしてくる。そのために私が何度契約従者の〈剣の貴公子〉様に頭を下げて衣装変更をしてもらったことか。説得次第で召喚従者がお着換え可能になった〈大災害〉パッチ万歳。超万歳。ソドプリ様の生暖かい視線は気にしない。むしろご褒美ですありがとうございます。ダメ人間でごめんなさい。
しかし、これも空振りとは。それじゃあ、一体この娘さんはどうしてこんなところにやってきたのだろう。
「……まさかとは思うけど〈メイドのあな〉の弟子入り希望？いや、あそこの地獄令嬢・獅子ケ原凱さんはすっごくいいひとなんだけどね？　ちょっとメイド性が普通のメイドさん好きとは違うから、あんまり初心者向けではないというか……」
「じこくれいじょう・ししがはらがいさん……？」
「ええ、またの名を 仮面のメイド 凱……アキバ漢女八部衆の一角よ。この前、〈西風の旅団〉のドルチェさん相手に、四天王昇格を賭けたメイドバトルを挑んで惜敗したことでその筋では有名ね」
よりによって四天王最強に挑みかかった凱さんの漢女心はわからなくもないけれど、やっぱりドルチェ姐さんは別格よね。勝負のときに振舞われたあのカレー、また食べたいなあ。
「……世界には私の知らない筋が多すぎます……ええと、ではなくて、私は〈古書店ひよこ堂〉に用があってうかがったんですが」
「え？　〈古書店ひよこ堂〉？　うちのお客さん！？　あはは、ごめんなさいね」
いや、びっくり。〈古書店ひよこ堂〉は私、比翼子が取り仕切っている個人営業の古本屋だ。……私は自分のお客さんにひたすらよその宣伝をしていたということになる。恥ずかしいなあ！
でもまあ、これには一応理由がある。うち、〈古書店ひよこ堂〉は〈変人窟〉の一階、入り口にお店がある。それに、このビルって今まで説明してきたとおり、結構濃いお店が多くて、

うっかり間違えて入ってトラブル起こしちゃう人とかいるから、こうして窓口のお姉さん役が板についちゃたっていうか、むしろうちのお客さんなんて多くないから、そっちが本業になりつつあるっていうか……うううう、言ってて悲しくなってきたなあ。

「で、うちに御用ってことは、もしかして同好の志かしら？」

「同好の、志？　あ、はい。本は大好きです！」

「……ええと、唐突だけど「攻め」の対義語といえば？」

「……うーん、「守り」？　これが何か？」

「ああ、うん。そうよね。ううん、なんでもないの、こっちの話」

OK、この子はこっち側じゃない。きれいモードで接客だ。

「な、なんだかとてもがっくりさせてしまった気がします……」

いいのいいの、あなたはそのままのあなたでいて。うん。

「それで、うちはしがないただの古本屋よ？　メジャー本の品揃えなら〈第八〉さんとか〈海洋機構〉さんのお店に行った方が充実してるんじゃないかしら」

「あの、私、小説を書いてまして。〈第八商店街〉のあきば先輩から、こちらで本にしていただけると」

「なんだ！　そっちのお客さんね。ふふふ、そういうことならお姉さんに任せなさい！　その創作物のたまご、ぴよっと殻をやぶって形にしてみせましょう！」

「ぴよっと？」

そう、ぴよっと。うん、気にしないで、口癖みたいなものだから！

製本業は私の……〈古書店ひよこ堂〉の副業のようなものだ。まだ本格的に印刷機械が再現されていないアキバにおいて、新たに本を作るには〈筆者師〉のサブ職業とその技術が必要となる。私はたまたま趣味でゲーム時代からちまちま育ててきていたこの〈筆写師〉のレベルと、元の世界で豆本作りとか装丁遊びをしていた経験を生かして、少部数の本作りを引き受けていたのである。えへん。

「それじゃあ、こちらへどうぞ」

私はお客さんである女の子を店の奥へと案内する。本棚の並ぶ売り場の奥、製本道具や見本誌、紙サンプルが色々と置いてある作業室兼打合せスペースだ。

「おおお、いろんな道具があるんですねえ」

きょろきょろと周囲をうかがう娘さん。印刷機材やパソコンがない状態での製本ははっきりいって地道な手作業だ。まあ、その分〈冒険者〉の身体能力補正や魔法や特技による省力化もできるから、今と元の世界、どちらが楽だとは簡単に言い切れないけどね。

「それで、ページ数とサイズは？」

「B5の76ページ、小説本です」

「表紙のデザインはこちらでやる？　それともあてがあるのかしら？」

「表1、表4は友達にお願いして用意してありますー。本文72ページ、表紙1～4で＋4で76ページです」
お、この子、わかってるな。
表1、表4というのは、いわゆる本を閉じたとき、最も外側になる表紙の天井部分と底部分のこと。「表紙」「裏表紙」とか呼ばれる部分だ。印刷するときには誤解を避けるために、番号をつけて呼ぶのである。ちなみに、表紙をめくった裏側が表2、裏表紙をめくった裏側が、表3。印刷料を計算するときのページ数はこの、表紙分1から4までの＋4ページを本文に足して積算する。うっかり本文だけで料金見積もりをしたりすると、余計な出費にびっくりしたりするから気をつけないとなポイントだったりするのだ。注意！
「それじゃあ、表紙と中身の紙にご希望は？」
最近手掛けたサンプルを並べて、反応を見る。
本を作る人の中には「自分の書いたものが形になれば細かいことは気にしない」というタイプもいるけれど、紙の質、色、特殊装丁に凝る人だって少なくない。そして、そういう凝り方ははっきりいってきりがないものだ。私はというと、そういうこだわりは大好きで、できるだけ応援してあげたい方なのだけれど。
「ええと、紙はこのサンプルと同じで。表紙はモノクロイラストだから色紙がいいんですけれど、ありますか？」
「色のご希望がないなら、ハシオカプ色……ラベンダーが近いかな？　が余ってるから、それなら基本料金に含めておくわ。それ以外の色だと在庫がなくて取り寄せだからちょっと料金にも色がつくけど、どうします？」
「ハシオカプ……エッゾの果物ですよね。ハスカップだと思えば、うん、花言葉もぴったり。それでお願いします！」
ふうん、そういうところも考えているんだ。よきかなよきかな。
「あとは、特殊装丁の類は不要でＯＫ？」
「はい、それで結構です。最初ですし、まずは形にしたいなって」
「はーい。それじゃあ、お値段はだいたい……こんなとこかしら」
だいたい、製本の値段はページ数、紙の質、表紙の装丁のオプションなどでざっくり決まる。ページ換算なのは、1ページあたりの印刷製本の手間やコストは絵だろうと文章だろうと、〈筆者師〉のスキルを使えば誤差の範囲で収まるからだ。
「原稿はもうできてる？」
「はい！　持ってきています！」
娘さんは鞄から紙の束を取り出した。元の世界なら電子データをｗｅｂ状でやりとりするデータ入稿の方が主流になっていたけれど、この世界での原稿は手書きを直接持ち込むしかない。
持ち込まれた原稿の取り扱いはだいたい3パターンに分けられる。その1、きれいにな状態のものをそのまま〈筆写師〉の

特技で複写する。絵の場合はこのパターンが多い。その2、字があんまり上手じゃない人の小説原稿などは、私が清書して、それを印刷用原稿とする。高レベル〈筆写師〉の補正のせいか、私の文字は精神集中時のみ、かなり読みやすいものになっているのだ。もちろん追加料金をいただきます。長編かつ字が個性的（最大限社会的に配慮した表現！）な場合、結構疲れるのよこれ！　そして、3パターン目は、活版で字組みをするケース。まあ、これはうちではやってない……というか、やれないパターンね。たぶんアキバじゃ〈海洋機構〉の工房でしかやってないんじゃないかしら。活版っていうのは、乱暴に言えば一字一字を彫りこんだハンコを組み合わせて版元を作って印刷する方法。日本語の場合、漢字も含めて割と笑えない種類と量の活字が必要になるから、よっぽど大量印刷するものでなければ〈筆者師〉の転写の方が効率がいい。元の世界では大発明で世界を変えたとも言っていい活版が革新的な技術になりきらないあたり、ゲーム時代のスキルが強力なこの世界のいびつさが顕著に出てきてる部分だなあと思うけど。まあ、それはさておき。

娘さんの持ってきた原稿は、私が手を入れる必要がないくらい整った文字だった。挿絵も入っているし、これはパターン1かな、一番手間のかからないケースだ。うん、いいお客さんで何より。

ノンブルも振ってるし、余白も十分。……ノンブルってのはページ番号ね。目次との対応で検索性があがるのはもちろん、乱丁、落丁の確認も簡単になるっていう意味でも、大事な部分なのでありました。これがないと、前後の文章の繋がりからしかページの飛びとかがわからなくなっちゃうもんね。

「どうでしょうか？　作り直した方がいい部分、ありそうですか？」

「表紙にちょっと塗り足しがないくらいかしら。あとはだいたい大丈夫だと思いますよ。うん、だいたいばっちり！　よいこの花まる原稿ね！」

「塗り足し……？」

「あー、ええと、製本するときって、原稿を〈コピープリント〉で複写するんだけど、そのときは製本サイズよりちょっと大きめの紙に印刷して、周囲を裁断して作るの。そこまではＯＫ？」

「は、はい」

「で、今もってきてもらってる原稿だと、表紙にはぴったり製本サイズの部分までしかイラストがないでしょ？　それを大き目の紙にそのままの縮尺で印刷して、それを裁断すると……もしも寸分たがわずきれいにきれればはじっこまでイラストが展開されるけど、ずれちゃうと、上下左右どこかに不自然な空白ができちゃう」

「……なるほど」

「だから、ちょっとだけ本のサイズよりも大きなイラストの原稿を用意してもらうようにお願いをしているの。その「製本サ

イズより余分にはみだした、裁断用の部分」を、塗り足しって読んでるってわけ。今回はこっちの方で数％拡大複写して対応するけど、次からは原稿作成のときに気をつけてくれると嬉しいわね」

「は、はい！　勉強になりました！」

うふふ、素直でよろしい。かわいいなあ。奥付の記載も大丈夫、と。

「ねえ、もしかして、元の世界でも同人とか書いてたクチかしら？」

「いえいえ！　あっちでは読み専でしたのですよ。こっちに来てから書き始めて、あっちで同人やってた友達に本の作り方とか原稿の整え方とかを教えてもらって……だから、今回が初めての本作りなんです」

「そっかあ」

この世界には、パソコンもテレビもない。雑誌も印刷されだしたけれど、まだ素人作成の試行錯誤。ＣＤも音源のＤＬ販売も、ソシャゲもＳＮＳも手が届かないものになってしまった。娯楽の代表みたいな〈エルダー・テイル〉とそっくりなこの世界に来て娯楽に飢えるなんて、笑ってしまうくらい皮肉だと思う。

けれど、そんな中でも、こうして新しい物語を作る人がいる。

「ありがとう」

思わず、口にしていた。

「え？　え？　な、なんでです？　本作っていただくのはわたしの方なのに」

「ふふふ、そうよね。変よね」

社会が大きくなって、市場が広がって、すっかり忘れかけていたことだけれど。どんな大作も、すごい萌えを生み出す名作も、人が作ったものなのだ。

自分の萌えとか、衝動とか、思い付きとか、妄想とか、作り手の動機や原動力はそれぞれだけれど、それが、輪郭を持ち、誰かの手に渡って、読み取られ、そしてその相手の心に、何かを伝える。それが、作り手の意図通りのメッセージになることはまれかもしれないけれど、それでもそのことは、すごいことだと思う。

だって、創作活動なんてものは、大多数の人にとっては生きる上であんまり「必須」なことではないのだ。お金を稼ぎたいならもっと効率のいい方法がある。フィールドで危険がない程度の弱いモンスターを退治するなりすればいい。名声がほしかったりちやほやされたいなら、〈大地人〉を相手に、〈冒険者〉があんまりいない地方で住み込みで活動すればいい。自分が娯楽を楽しみたいなら誰かが作ったものを買えばいい。世の中には創作なんてしたことのない人もたくさんいて、そういう人たちだって幸せに日々を暮らしている。それは何も悪いことじゃない。

おまけに、何かを作ることっていうのは、考えるほどテク

ニックはいらないけれど、思うよりもパワーがいるものだ。書き始めることは簡単だけど、書き終えることは難しい、と言い換えてもいい。

にもかかわらず、その手で新しいものを作ろうとする人がいて、だからこそ、同人誌っていうのは生まれてくるものなのだ。

うちの書架には、こうして作られた薄い本がたくさんある。趣味嗜好性癖ジャンルにメッセージ、千差万別な無数の想いの結晶だ。

元の世界にいたころは地雷とか苦手ジャンルとかそういうのにいらだったりしたこともあったけど、今のこの娯楽が激減した状況と、その中でなお、こうしたものを書き上げようとする過程と労力を考えれば、少なくとも私にとっては、どれもきらきら光る宝物なのである。……まあ、好き嫌いが皆無になったわけではないけどね！　ただ、〈大災害〉後は「あなたの中ではそうなのね」という棚が広くなった的な？　と、年取っただけとか言わない！

「それにしても、よかったです。初めてのことばかりで緊張してたから、こんなに親切に教えていただけて」

「うう、まぶしいなあ。そんなこと言ってもちょっとしかサービスしないから」

「ちょっとはしてくれるんですか？　ありがとうございますっ！」

「ええい、それじゃあ表紙の紙はこっちでどうだ！」

「おおー！　手触りがちょっと違いますねー」

物語を書くことは、世界を描くことは、それだけでまぶしいことだ。

だからこそ、目の前の彼女のように、こうして新たな一歩を踏み出す作り手さんに、私は最大の敬意と祝福を送りたいのである。

その先は荒野かもしれない。けれど、あなたの進んだ先には道ができるし、その背中を追いかける人もでてくるかもしれない……でてこないかもしれないけど。

それでも間違いなく、その道の先には、きっと、誰も見たことのない景色がある。その光景が素晴らしいものである保証はできないけど、その過程は、たとえどこに進んだとしても、誇っていいもののはずだ。

だってそれは、あなたが走りださなければ、その手を動かさなければ、存在しなかった世界があるということなのだから。

「ところで、この表紙イラストの花、これもきっと意味があるんでしょう？」

「えへへ、よくお分かりで！　嬉しいです！」

「さっき花言葉が、って言ってたから、詳しいんだろうって思ったの。あたりね」

「ですです。これはラッパスイセンとユーカリですね。花言葉は「私の元へ帰ってきて」と「再誕・追憶」。今回の話のテーマにぴったりかなって、イラストを描いてくださった方が考え

てくれたんですよー。素敵ですよね！」
心底嬉しそうにほほ笑む彼女に、わたしはつられて口元をほころばせてしまった。私はこういう人たちをこそサポートしたいし、たくさんの薄くて想いの厚い本で書架を埋め尽くしたいのである。
「それじゃあ、注文書を書いてもらおうかしら。ここら、本のタイトルと名前をお願いね」
「ええと、それじゃあ、タイトルは――」
そうして、また一つこの世界に新たな物語の卵が産み落とされる。
それを温め、殻を破らせ、世界に産声をあげるひよこにするのが、私の仕事。
願わくは、この白紙の世界に、これからもたくさんの新しい物語が生まれますように。たくさんの人たちが、自由に筆を走らせて、色とりどりの翼を広げられますように。
……ちょっとかっこつけすぎかしら？

「ああ、そうそう、比翼子さん」
帰り際、彼女はくるりと私を振り返ると、満面の笑みで言い残した。
「今度来るときには、「ピヨさんコレクション」、見せてくださいねー。わたし、あんまり地雷とかないので！」
……ぶふっ。あの娘、擬態してただけだったの！？　完全に騙された……！
たしかに、同志だってわかってたら本そっちのけで脱線しそうだったし、まさかあの娘そこまで読んでああいうムーブを！？　ひええ、こわい娘！
まあ、そんな底知れない娘さんの本の最初の読者になれるっていうのは、役得かもしれないわね。さて、それじゃあ一つ、作業に取り掛かるとしましょうか！
そんなこんなで、私は裁断担当の相棒である〈剣の貴公子〉を呼び出すと、作業台へと向かうのでありました。

十九歳の冬ごもり

橙乃ままれ

「ハイ、ＨＡＬ！」
「今日はバーテンダーやらないのか？」
「アンとのデート、どうだった？　わたしにもチャンス頂戴よね」
　通り掛かる同窓生から声をかけられるたびに、鴻池晴秋（こうのいけはるあき）はいい加減に手を振ってそれを返事としていた。建築計画がずさんだったのか、あるいは後付で利用が決定されたのか、石造りの年代を経た建物の、幅の広い通路とも広間ともつかぬ共用スペース、背の高い出窓へとつながるくぼみのカウチが、彼のいつもの居場所からだ。
　卒業したチューターから貰ったえんじ色の柔らかいカウチに身体を沈めた晴秋は、喉を潤そうとサイドテーブルのマグカップを手繰り寄せ、中身が空なのであっさりとあきらめた。慌てて水分補給をしなければならないほどではないし、いまは課題を読み込むほうが優先だ。
　手元のタブレットにはまとまった量の課題図書や論文が詰め込まれていて、夏前には咀嚼して自分なりに取りまとめておきたい。たしかにボリュームのある学習量ではあるのだが、とはいってもイエールの学生は全員そんなものだ。名門大学というのはただ単純に伝統があるからそうなのではなく、授業や要求のレベルが高いからこそ名門なのだというのが大学側の主張である。
　もっとも学生はカリキュラムに忙殺されているというわけでもない。恋に遊びにバカンスに課外活動やボランティアなど、盛りだくさんの時間を過ごすのがカレッジの文化だった。ここイエールでは一年生と二年生は、全員強制的に寮生活を強いられる。例外はない。どの教室も、図書館も、クロスバイクで五分以内の距離にある。長期休暇を除けば生活は密度の濃い狭い範囲で済む。体育会系の合宿にも似た生活が二年も続くわけで、同窓生の絆はとても強い。
「ねえ、ＨＡＬ。アンがＨＡＬに日本語教えてもらえればすぐお姫様になれるっていってたけど、本当？　わたしにも教えてくれない？」
「そのサービスはソールドアウト。かぼちゃの馬車と同じく、品不足でね」
　晴秋はいい加減にこたえた。
　最近どういった風の吹き回しか女性からのお誘いが多い。東洋人はモテないのが常識だと思っていたのだが、どこかで変な噂が出回り、晴秋はミステリアスな東洋の美青年という設定に

なってしまったようだ。生活習慣が違う、積極性のない極東の男性でも、背丈があってスポーツがいけて、かつ紳士であると周知されれば話は別だ。

とはいえ、そのミステリアスという部分が厄介で、好奇心を満たすために接近してこられても、面倒なだけだ。

しかもさすが愛の国だけあって、女性からであっても主張が強い。

最初は真面目に相手をしていたが、そのうち面倒になってぞんざいに扱うようになった。つまりは珍獣扱いなのだろう。こちらが下手に出る必要もない。

「もうっ。はぐらかしてばっかり」

「アンと一緒に採点のバイトをすることは、もうないと思うよ」

視線もやらずに答えたその言葉は、話しかけてきた女性を大いに満足させたようだった。「そうなの、もう。早く言ってよ！」と上機嫌で去っていく。

先週臨時のバイトで組まされた女性が、その時のことを「デート」だと言って自慢しているのだろう。日本語コースのテストの採点は、日本出身の晴秋にとって割の良いものだったが、作業量が目に余ったため、大半をひとりで終わらせたのがまずかったようだ。

アンとかいう女性（正直名前も覚えていなかった）にはテイクアウトの夕飯を手渡して、早々にバイトを切り上げただけなのだが。

・下心を持って親切にしたと認識された。

←下心を持って親切にされたと思いたい。

・なんだか始終ニコニコしていた。

←モーションを掛けられていた可能性。

ループアウト；何れにせよ面倒なことだ。

晴秋はそう考えて視線をタブレットに戻した。そういえば失敗したな、どうせ話しかけてきたのなら、さっきの女性（名前は知らないが）にカフェオレの出前を頼めばよかった。そんなことを思い浮かべながらだ。

リベラルな校風――それは文字通りに自由を指し示すもので、通りかかる寮生たちはラフな服装ばかりだ。多くはフリースのトレーナーにジーンズで、ジャケットを着ている男性などほとんどいない。もっとも、中にはアオザイや、アーミー風、スキューバのウェットスーツなんていう衣装が混ざるあたりが混沌としたこの大学らしい光景だ。

面倒なことは確かにあるのだが、相対的に見てここは非常に良いところだ。

寂しければ週末ごとにパーティーは開催されているし、カレッジで恋人をみつける同窓生は数多い。三年生になれば敷地内の個人寮やアパートで同棲を始める者などざらだ。

イエールはニューヘイブンという都市の中にある大学なのだが、その都市に対して依存度が大きいわけではない。民間の商

店が購買部代わりに敷地内に店舗を出しているので、都市に出なければならない用事というものがあまりないのだ。
緑豊かで、特に紅葉が素晴らしいこの都市と、中心部にある大学は、晴秋にとって理想的な避難所だった。
腕時計に視線をやった晴秋は立ち上がり、樫のドアから芝生を横切りヒルハウスアベニューに出た。乾ききった落葉が足元でカサつく広い歩道を進み、自室を目指す。
晴秋は冬のエドワーズ・ストリートが好きだった。
ニューヘイブンで評判なのは、赤と黄色の泡でデコレートされたような鮮やかな秋の紅葉だが、冬枯れのあらわになった樹木のシルエットには、それとはまた違った心を慰めるような美がある。
一昨年、晴秋の母が死ぬと、晴秋を取り巻く環境は一変した。
鴻池家は関西有数の名家で、特に金融業に根を下ろしている。二十一世紀にもなって企業の後継者で揉めるなんて馬鹿らしいと晴秋は思うのだが、旧財閥に連なる血筋ともなるとそうもいかないらしい。
一族が保有する資産は、不動産や有価証券のみならず関連企業への影響力や、積み重ねた恩顧といった目に見えない形のものも多い。株券を媒体にした流動性で、その種の権力は継承され得ないのだ。血族という重苦しい伝統としがらみのなかで、それらは子々孫々へと手渡される。そして当主とその側近の動向は、一族の隅々にまで影響を及ぼすのだ。
思えば父は（そう言えるほどの交流は皆無だが）母と晴秋を、鴻池のそういったしがらみから遠ざけてくれていたようにも思える。認知こそしたものの、親族への紹介もしなかった。大時代的な言い回しだが私生児であった晴秋は、それが原因の居所のなさを感じたこともあったが、今思い出すとそれ故の自由を与えられてもいた。晴秋は中学生まで旧財閥の血を引いていることも知らぬまま、公立の学校へ通っていたのだ。
風向きが変わったのは母が死んでからで、当時高校に入ったばかりだった晴秋は父に連れられ、祖父母と会うことになった。
何回か食事をした後、どこが気に入られたのかはわからないが、どうも晴秋は祖父母の後見を受けることになったらしい。晴秋という名前は、祖母がつけてくれたということもそのとき知った。
正直に言えばありがた迷惑という気持ちがなかったでもない。
晴秋は母とふたりで暮らしてきたし、父と会うのは年に数度だったのだから、その暮らしが続くのならばそれでも良いと思っていたのだ。
母は子供の晴秋から見ても美しい人だったが、どこか日陰でひっそり咲く花のような、良く言えば守ってあげたくなるような、贔屓目抜きで言うならば世間というものに対してひとりで立ち向かう資質を欠いていた、なよやかな印象の女性だった。
そんな評価を実母に対してしてしまう晴秋は、幼い頃から冷めてひねくれた、賢しげな子だと言われてきたし、別にそれを

気にするでもなかった。手に入るものはいずれ手に入るだろうし、手に入らないものは入らないだろう。そういう世界の摂理のようなものを、晴秋は小さい頃から感じ取っていて無駄に抵抗するような被虐趣味がなかったのである。もっともそれは、勉強でもスポーツでも習い事でも、同年輩の子どもたちがつまずくようなことを一度やれば大抵は身につけてしまえる生来の器用さがあってのことだったわけだが。

しかし大人びているとはいえ、そのころの晴秋は高校生にしか過ぎず、一人で暮らすことはむずかしかった。いいや、暮らすと言うだけで言うならば可能だったかもしれないが、生活費の問題がある。醒めた視線を持っているからこそ、晴秋は今まで母とふたりで暮らしてこれた資金源が父であること、つまりは鴻池の金であるということもわかってしまっていたし、それを今更拒絶するのは自己満足であり、周囲にも迷惑をかけることが理解できた。

鴻池本家の意向で高校を移りしばらくすると干渉も増えてきた。鴻池の人間として乗馬ができなければ――、ソシアルダンスの経験くらいはないと――、茶道の嗜み程度は――そういう声だ。いちいち戦ってまわるのも面倒であり、それなりに付き合って結果を出していくと、そのちょっかいはより激しくなった。

当主であるところの祖父の一声で、妾腹の晴秋も一族の人間として扱われるようになったわけだが、それはつまり将来鴻池傘下の何処かの企業に指揮官のポストが用意されるということにほかならない。名前も出てこないような末端の子会社のそれならば本家嫡流の子どもたちに影響はないが、そうでなかったとすればポスト争いになる。それを恐れた派閥の探りが激化してきたのだろう。

そしてその探りが嫌がらせの域に達した時、父と祖父は晴秋に幾つかの選択肢を示し、そのなかで晴秋はイエールを選んだ。

コネチカット州の閑静な観光地にある、この名門大学が避難所であるというのは、そのよううな意味合いでなのだった。

「おーい、ＨＡＬ」

年代物の赤いレンガで作られたクラブハウスの二階から手を振る友人を晴秋は見上げた。この季節に窓から身を乗り出すにしては随分寒そうな薄着ではある。

「イスラム史のレポート終わってるか？」

「すでにキックした」

友人は絶望的な顔をした。写して終わるようなものではないので、ペアのレビューでもしたかったのだろう。晴秋は肩をすくめて「メアドに放り込んでおけば、見るよ」と告げる。もちろんその後に「週末暇ならだけど」と付け加えるのを忘れない。

タンクトップの友人は「そんなこと言ってもおまえ、週末に暇だったこと無いじゃないか」と、暑苦しい声を上げた。

誤解だ。

晴秋は基本的には暇で、怠惰で、いつだってぼんやりと過ごしている。暇に見えないのは、周囲が勝手に晴秋を引っ張り出したり、周囲で勝手に騒いだり、話しかけたりしてくるからだ。それは別に晴秋の望みではないし責任でもないはずだ。特に女性は面倒で、どうも晴秋をトロフィーとみなしている雰囲気がする。

「これからデートなので」

「え！？　あ、噂のルテナント・コマンダー……か？　あれ本当だったのか！？」

晴秋は相手にするのを切り上げて、眼鏡の位置を戻して肩をすくめると寮の玄関をくぐる。

オープンスペースでくだを巻いている同窓生に身振りだけで挨拶をして、晴秋は幅の広い階段を登った。年代物の建物なので、壁は漆喰で厚い。その重厚な廊下を歩いて自室へと到着する。

イエールの寮生はその殆どが二人部屋から四人部屋なのだが、この部屋は晴秋しかいない。ちょっとした手回しと、かなり面倒なバイトの報酬としてプライベートスペースを勝ち取ったわけだ。シーズンが変わればどうなるかわからないが、もう半年以上、二つ目のベッドは壁に立てかけられている。

シンクでミネラルウォーターをグラスに入れると、デスクの端末を立ち上げる。「待ち合わせ」相手は、その中なのだ。

『またせた？』

「いや。オンタイム」

『あやしい』

「信用ないね」

『いままでの言動が結果を生んだのだね』

古式ゆかしいタイピングの文字式チャットが、古臭いオンラインゲームの会話ウィンドウを流れて行く。画面には色鮮やかな小さなキャラクターが写っている。どんな世界観かわからないが、羽飾りの付いたクワやら、金色の漏斗やら、オリハルコンのトラクターやらだ。晴秋は持ち物画面から「精魂込めたトマト（最上級）」を大量に売り払ってスペースを作った。基本は放置ゲームなのだが、たまに荷物整理をすると資金が増えるのだ。

『そちらは寒い？　セイシュー』

「ほどほどかな。まあコマンダーにくらべて僕は子供らしいから。寒さには強いね」

『歳上をからかうものではないわ』

晴秋がリアクションアイコンをクリックすると「セイシュー」と表示のある自分のキャラクターの上に、怒っていますよという感情を現す吹き出しが出現する。とはいえそのジェスチャーは、落ち着きのあるネットの友人であるルテナント・コマンダーには通用しないようだ。

そのルテナントのキャラクターは黒尽くめのズングリした精

霊のような姿で、設定した順回路を巡って自動売買をしている。このゲームは万事その調子で、キャラクターを作ったら、時間を掛けてプレイをせずとも後は放置で勝手に進んでいくのだ。

ルテナントは頭の上に音符のマークを浮かべている。いつでも大体そうなのだが。

子供、とは言ってみたが晴秋は彼女（多分、そうだと思うのだが）に年齢の話をしたことはない。彼女の方もそれは同じで、晴秋に対して歳上ぶることがあるので、老婆と揶揄をしたことがきっかけで歳上扱いをしているだけだ。

ゲームで知り合った顔も知らぬ友人との、定番のやり取りというわけだ。

「ルテナントはやっぱり仕事？」

『生きる時間の全てはこれすべて人生の糧なのです』

「ブラック？」

『職に貴賤はありませんよ』

「職場にはあるのにね」

気軽な会話だが、時間はかかっている。

晴秋は二面あるモニタで資料の索引づくりと発表資料を作りながら、たまに、思い出したように遣り取りをしているからだ。ルテナントも、鼻歌のようなアイコンを浮かべながら、ゆっくりと鍋をかき混ぜている。それも自動行動だ。あちらの側も、仕事をしながらディスプレイをたまに覗き込むのだと以前に聞いたことがある。

身元を明かさないそういうコミュニケーションは、どこまでも気軽で、ある意味無責任で、誰にはばかることもなく気が楽だった。

相手は日本人なのだと晴秋は考えている。というのも、セイシューという名前が和風であると気づいたからだ。そのキャラクターネームは晴秋からつけたものではあるが、その「晴秋」を、名付けの親の祖母は本当はセイシュウと読ませたかったらしい。こうのいけせいしゅう。なんだか仏門の僧侶のような響きだ。由来は聞いていないが、偽名代わりには便利でネットではそうハンドルすることが多い。

『今週も課題は順調？』

「人生が順調」

『では部屋にこもって書と向かい合うよりも街に出て友と語らうべき』

「ルテナントはたまにお説教臭いよね」

『一応コマンダーですから』

「なるほどね」

十代最期の一年に突入した晴秋は、その年齢なりのひねくれた仕草で応えた。この種のアドバイスには逆らう意味など殆どないのだ。とはいっても、だからといってそれに素直に従える十代でもない。状況が許すか許さないかもある。肩をすくめて「なるほどね」と皮肉そうに答えることで、その辺を表現したつもりだ。

自分でも子供じみていると思うが、おそらくそう評価することそのものが素直に子供として過ごせていない証拠で、自嘲がわいてくる

イエールの生活は好きだ。確かに呆れるほど忙しいし、課題は山盛り、イベントだって矢継ぎ早に押し寄せてくるけれど、それは日本にいたときのような親族の理不尽なちゃちゃ入れではない。やりたくなければやらなくたってかまわないのだ。イエールはそんな生徒に時間を与えるし、目に余れば落第するだけ。

自分はここで、最後の子供時代を過ごすこともできるし、一足早く大人になることもできる。大学時代とはまさにそのためにある。しかし、晴秋はまだその結論をだせてはいないのだ。

『彼女ができたらお説教も減るのですが』

たぶん軽口のたぐいなのだろう。ルテナントがそんなことを呟いた。はっきりしないのは彼女の英語が堅苦しいせいだ。英文学で言えばスモレット。ところどころ時代が怪しい言い回しが交じるせいで、本気なのか冗談なのかわかりづらい。

返答に困ってレポートの手を止めた晴秋はディスプレイをじっと見つめた。

どこかマヌケな動きでかぼちゃを積み直しているルテナントのキャラクターが胡散臭く見える。

「ルテナントが彼女でいいよ」

『ごまかしてばかりいると悪魔に呪われますよ』

いろんなことを考えることが面倒になった晴秋は「写真を取らないとね」と返した。

『まあ、そういうことであるのならば一応移住先も紹介しますが』

「ルテナントこれ辞めるの？」

牧歌的なオンラインゲームから離れるような発言に、晴秋は驚く。

深夜作業の眠気覚ましにちょうどよい会話相手だったのだが、ゲームを移行するのか。まあ、オンラインゲームなどというものはメーカーが荒稼ぎをしてユーザーが減れば数年で撤退するのが常の世界なので、なにも不思議な話ではないのだが晴秋はそう尋ねた。

別段そういう感情はまったくないが、周囲には彼女を作らないアリバイとして利用させてもらっているのだ。多少の思い入れは、厳密に測定すれば、無いではない。

日常生活の中で馬鹿話をするクラスメイトには事欠かないが、ある意味それはこの狭い世界の中での友人であり競争相手でもある。一人になりたくて、でも話し相手がほしいそんな夜、気兼ねのない関係の相手はそれなりに貴重なのだ。

『〈エルダー・テイル〉というゲームです。とても長くサービスを続けていますし、居着くにはよいかと』

「そうなんだ」

手早く手元のモニタに公式ページを呼び出して、晴秋はその

内容を確認した。白銀の鎧を着た騎士が、剣を片手に赤い竜と戦う。仲間は魔法使い、僧侶、剣士、重武装の戦士、格闘家と勢揃い。典型的なファンタジー戦闘ＭＭＯ。世界的な老舗で、名門ですらあるゲーム。長い歴史を誇り、そのクエストの数は多く、プレイスタイルは自由で奇人変人が好き勝手な活動を繰り広げている。

それを晴秋は、この大学のようだと思ったのだ。

「いいね」

『おすすめしましょう』

「招待とか、してくれるの？」

このとき、晴秋はなんの深い考えもなかったのだ。日本に戻った自分が自分を持て余して退廃した日々を送るようになるということも、そのゲームで日本最大とも呼ばれるギルドを作ることになるとも、そしてそのゲームが自分自身の人生に決定的な影響を与えるとも、思っていなかった。

ただ単純に暇つぶしのチャットソフトを交換する。その程度の認識しかなかった。

『そういう機能は、ないようですよ』

「そっか。じゃあ、アカウント登録したら、探す」

『そうですか？　おもしろいですね。わたしのほうが早く見つけ出すと思いますが？』

お互いにひねくれていたのだろう。それに、蓋を開けてみれば二人の年齢はほとんど同じだったのだ。だからお互いが企んだイタズラ――〈エルダー・テイル〉では今とハンドルネームを変える――が、両方同時に、同じことをしあっているなんて思いつきもしなかった。

勝負の結果はログイン後七分でルテナントが勝利した。

ルテナントは本名をハンドルにしていたのにも関わらずだ。

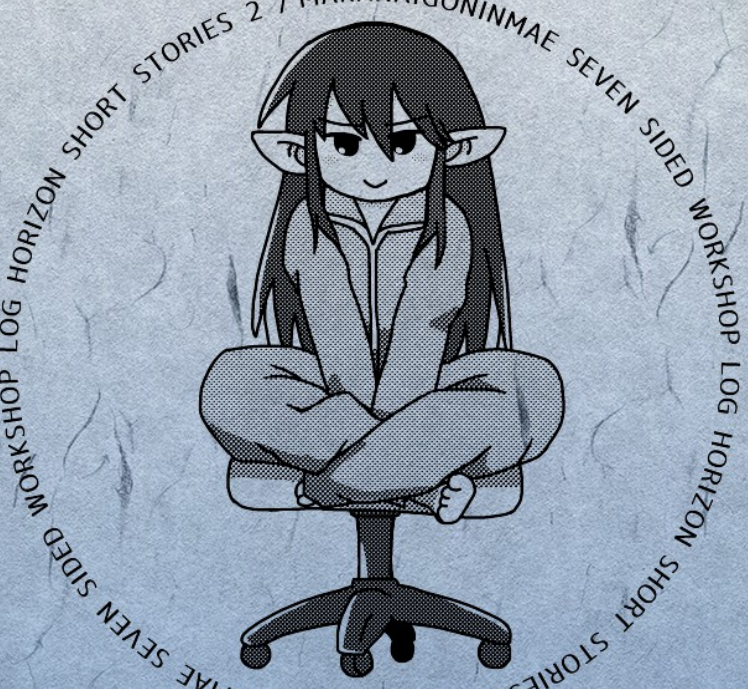
そのことで、晴秋はその後十年以上、彼女にからかわれつづけることになる。だが多分それでよかったのだろうなと、十年後の晴秋は思うのだ。感謝を口にだすことはついぞなかったとしても、ルテナントは晴秋の難しいシーズンの友人だった。

↑しかし一般的に言えば、口うるさいお目付け役といえるのでは？

↑その価値判断の主導権は、自分にあるべき。

彼の冬ごもりは、コネチカット州の美しい都市でおこなわれた。そして避難所の守護神は、彼の古くからの友人で腐れ縁の相手だったのだ。

それはたぶん晴秋の人生でも最大級の恩寵だった。


MAKANAIGONINMAE SEVEN SIDED WORKSHOP LOG HORIZON SHORT STORIES 2 / MAKANAIGONINMAE SEVEN SIDED WORKSHOP LOG HORIZON SHORT STORIES 2 /